

京都府遺跡調査概報

第102冊

1. 常盤仲之町遺跡
2. 長岡京跡右京第704次・井ノ内遺跡
3. 木津川河床遺跡第14次
4. 稲葉遺跡第7次
5. 井手寺跡・栢ノ木遺跡

2 0 0 2

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要がありますが、当センターでは、それに対応するために3種の刊行物を刊行しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成13年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、西日本旅客鉄道株式会社の依頼を受けて行った常盤仲之町遺跡、長岡京跡右京第704次・井ノ内遺跡、木津川河床遺跡第14次、稲葉遺跡第7次、井手寺跡・栢ノ木遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都市文化市民局、長岡京市教育委員会、八幡市教育委員会、京田辺市教育委員会、井手町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- | | |
|----------------|----------------------|
| 1. 常盤仲之町遺跡 | 2. 長岡京跡右京第704次・井ノ内遺跡 |
| 3. 木津川河床遺跡第14次 | 4. 稲葉遺跡第7次 |
| 5. 井手寺跡・栢ノ木遺跡 | |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	常盤仲之町遺跡	京都市右京区常盤窪町	平13. 5. 7～6. 29	京都府土木建築部	小池 寛
2.	長岡京跡右京第704次・井ノ内遺跡	長岡京市井ノ内	平13. 7. 17～9. 7	京都府土木建築部	柴 暁彦
3.	木津川河床遺跡第14次	八幡市八幡字源野	平13. 6. 8～10. 18	京都府土木建築部	松尾史子
4.	稲葉遺跡第7次	京田辺市田辺久戸	平13. 5. 9～8. 10	西日本旅客鉄道株式会社	中川和哉
5.	井手寺跡・栢ノ木遺跡	綴喜郡井手町大字井手小字中溝ほか	平13. 7. 12～8. 9	京都府土木建築部	野島 永

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

本文目次

1. 常盤仲之町遺跡発掘調査概要-----	1
2. 長岡京跡右京第704次・井ノ内遺跡発掘調査概要-----	11
3. 木津川河床遺跡第14次発掘調査概要-----	29
4. 稲葉遺跡第7次発掘調査概要-----	37
5. 井手寺跡・栢ノ木遺跡発掘調査概要-----	49

付表目次

2. 長岡京跡右京第704次(7ANGSK-1地区)・井ノ内遺跡	
付表 種実同定結果-----	26

挿図目次

1. 常盤仲之町遺跡

第1図 調査地位置図-----	1
第2図 南壁土層断面図実測図-----	2
第3図 遺構配置図-----	3
第4図 溝9西壁土層断面図-----	4
第5図 溝9主軸線測角図-----	4
第6図 溝9および柱穴列位置関係図-----	5
第7図 柱穴4実測図-----	5
第8図 土坑14・15周辺遺構実測図-----	6
第9図 出土遺物実測図(1)-----	7
第10図 出土遺物実測図(2)-----	8
第11図 出土遺物実測図(3)-----	9
第12図 溝9主軸線と近衛大路末道の関係図-----	10

2. 長岡京跡右京第704次(7ANGSK-1地区)・井ノ内遺跡

第13図	調査地位置図	11
第14図	調査地周辺の条坊	12
第15図	中央調査区南壁土層断面図	12
第16図	調査区平面図	13
第17図	中央調査区平面図	14
第18図	S D70401中層遺物出土状況平面図	15
第19図	S D70401下層礫出土状況図	16
第20図	掘立柱建物跡実測図	17
第21図	S D70401出土土器実測図(1)	19
第22図	S D70401出土土器実測図(2)	20
第23図	その他の遺構出土土器実測図	23
第24図	S D70401出土石器・土製品・石製品実測図	23
第25図	瓦・鉄釘実測図	25

3. 木津川河床遺跡第14次

第26図	調査地および周辺遺跡分布図	29
第27図	トレンチ配置図	30
第28図	地震痕跡分布図	31
第29図	第1トレンチ平面図	32
第30図	第2トレンチ平面図	33
第31図	第3トレンチ平面図	33
第32図	S X24・39・40平・断面図	34
第33図	第1～第3トレンチ土層断面図	35

4. 稲葉遺跡第7次

第34図	調査地位置図および周辺遺跡地図	37
第35図	調査区配置図	38
第36図	遺構平面図	39
第37図	個別遺構平・断面図および東壁土層断面図	41
第38図	遺物実測図(1)	43
第39図	遺物実測図(2)	44
第40図	S K07出土石器実測図	45
第41図	S K07出土石器および包含層出土石器実測図	46
第42図	S K07出土石器類重量別数量グラフ	47

5. 井手寺跡・栢ノ木遺跡

第43図	調査地位置図	49
------	--------	----

第44図	調査区位置図-----	50
第45図	調査区実測図-----	51
第46図	柱筋土層断面図および調査区北壁土層断面図-----	52
第47図	調査区南壁土層断面図-----	53
第48図	柱穴実測図-----	54
第49図	土坑 S X 20 実測図-----	54
第50図	出土遺物実測図(1)-----	55
第51図	出土遺物実測図(2)-----	56

図 版 目 次

1. 常盤仲之町遺跡

図版第 1	(1) 調査地全景(南東から)	(2) 調査地全景(南西から)
	(3) 溝 9 周辺遺構検出状況(南から)	
図版第 2	(1) 溝 9 周辺遺構検出状況(南東から)	
	(2) 調査地北側中央部遺構検出状況(南東から)	
	(3) 調査地南西部分遺構検出状況(西から)	
図版第 3	(1) 溝 9 検出状況(南から)	(2) 溝 9 検出状況(南東から)
	(3) 溝 9 完掘状況(西から)	
図版第 4	(1) 溝 9 完掘状況(東から)	(2) 溝 9 完掘状況(北東から)
	(3) 溝 9 土層堆積状況(東から)	
図版第 5	(1) 柱穴 4 遺物出土状況(北から)	(2) 土坑 17 遺物出土状況(北から)
	(3) 土坑 17 土師皿出土状況(北から)	
図版第 6	(1) 土坑 16 磔検出状況(西から)	(2) 溝 28 周辺遺構検出状況(北東から)
	(3) 溝 28 周辺遺構完掘状況(北東から)	
図版第 7	(1) 土坑 29 周辺遺構検出状況(東から)	(2) 溝 41 完掘状況(北から)
	(3) 土坑 15 周辺遺構検出状況(南から)	
図版第 8	(1) 土坑 14 磔検出状況(南から)	(2) 出土遺物

2. 長岡京跡右京第704次(7ANGSK-1地区)・井ノ内遺跡

図版第 9	(1) 調査前の状況(北から)	(2) 調査前の状況(南から)
	(3) 北調査区完掘状況(南から)	
図版第 10	(1) 南調査区完掘状況(北から)	(2) 中央調査区遺構検出状況(1)(南から)

- (3) 中央調査区遺構検出状況(2)(南から)
- 図版第11 (1) 中央調査区全景(南から) (2) S D 70401下層礫出土状況(北東から)
- 図版第12 (1) S D 70401中層遺物出土状況(南東から)
(2) S D 70401テラス遺物出土状況(西から)
(3) S D 70401埋土堆積状況(北東から)
- 図版第13 (1) S B 70409・10・11完掘状況(南西から)
(2) S B 70409完掘状況(南西から)
(3) S B 70410・11完掘状況(南西から)
- 図版第14 出土遺物(1)
- 図版第15 出土遺物(2)
- 図版第16 出土遺物(3)

3. 木津川河床遺跡第14次

- 図版第17 (1) 調査地全景(南から) (2) 調査地全景(西から)
- 図版第18 (1) 第1トレンチ全景(南から) (2) 第2トレンチ全景(東から)
(3) 第3トレンチ全景(北から)
- 図版第19 (1) 第1トレンチ全景(下層・上が西) (2) 第2トレンチ全景(下層・上が西)
(3) 第3トレンチ全景(下層・上が西)
- 図版第20 (1) 第1トレンチ西部(上層・南から) (2) 第2トレンチ南部(上層・東から)
(3) 第3トレンチ全景(上層・北から)
- 図版第21 (1) 第1トレンチS X 24(西から) (2) 第1トレンチ北壁2(南西から)
(3) 第1トレンチ北壁2東隅(南から) (4) 第2トレンチ北壁2(南から)
(5) 第1トレンチ噴砂に裂かれた溝(南から)
(6) 第1トレンチ作業風景(東から)
- 図版第22 出土遺物

4. 稲葉遺跡第7次

- 図版第23 (1) 南部トレンチ全景(南から) (2) 南部トレンチ全景(北から)
(3) S X 01(北から)
- 図版第24 (1) S K 07(西から) (2) S D 09(東から)
(3) S K 10(北から)
- 図版第25 (1) 北部トレンチ全景(南から) (2) S K 21遺物出土状況(南から)
(3) S K 15(西から)
- 図版第26 (1) S K 16(西から) (2) S K 18(西から)
(3) 拡張区断面(西から)
- 図版第27 出土遺物(1)
- 図版第28 出土遺物(2)

5. 井手寺跡・栢ノ木遺跡

- | | | |
|-------|----------------------------|---------------------|
| 図版第29 | (1) 調査前近景(南東から) | (2) 柱穴P 5 (南から) |
| | (3) 柱穴P 5 断ち割り状況(南から) | |
| 図版第30 | (1) 柱穴P 6 断ち割り状況(南から) | (2) 柱穴P 7 (南から) |
| | (3) 柱穴P 8 (南から) | |
| 図版第31 | (1) 柱穴P 12(南から) | (2) 柱穴P 13検出状況(北から) |
| | (3) 焼土坑S X20半截状況(南西から) | |
| 図版第32 | (1) 小土坑S X18検出状況(北から) | (2) トレンチ南壁 |
| | (3) トレンチ南壁S X21断ち割り状況(北から) | |
| 図版第33 | (1) 調査区近景(東から) | (2) 調査区近景(上が北) |
| | (3) 井手寺推定域遠景(南から) | |
| 図版第34 | (1) 出土遺物(凝灰岩加工片) | |
| | (2) 出土遺物(土器・屋瓦) | |

ときわなかのちょう

1. はじめに

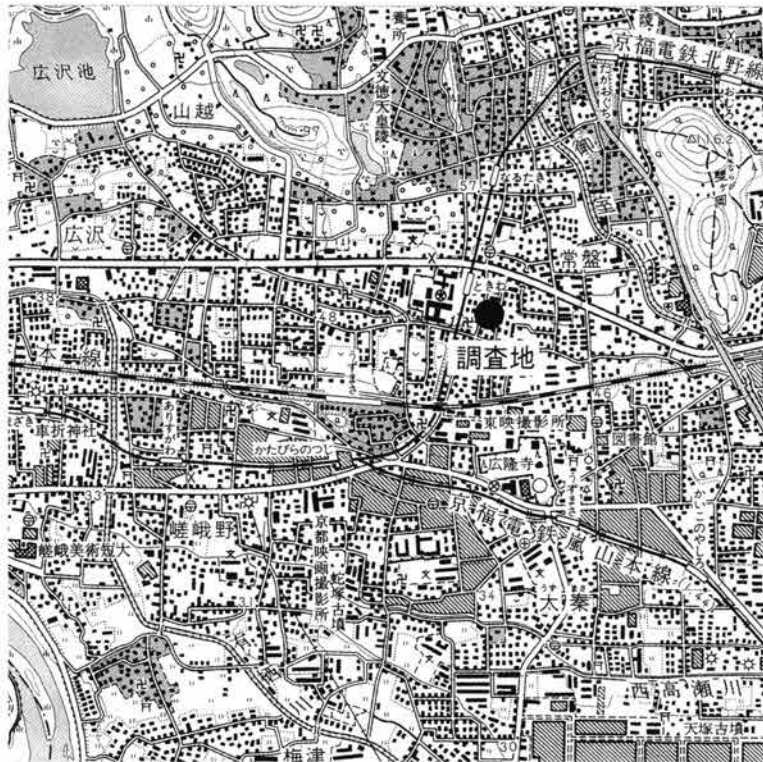
常盤仲之町遺跡の発掘調査は、京都府土木建築部が施工する府営住宅常盤団地の建て替え工事に伴う事前調査である。平成12年12月4日に京都府教育委員会による立会調査が実施され、地表下0.6～0.9mにおいて安定した遺構面が確認された。今回は、その調査結果を受けて、南棟建設予定地を対象として発掘調査を実施した。

建設予定地は、約600㎡を測るが、既存建物の建設および解体時の攪乱が、約300㎡に及ぶことが予想された。そのため、建設予定地である600㎡については、場外搬出による残土処分を0.4～0.6mの深度において実施した。その後、遺構面直上に残存する攪乱土を重機により除去し、遺構の検出を行った。なお、当初、攪乱下における遺構の残存は想定していなかったが、深度の浅い攪乱下では、遺構面を検出したことから、おおむね300㎡を対象に人力による遺構検出を行った。その結果、約230㎡の遺構面において柱穴、土坑などの遺構を確認した。

発掘調査は、平成13年5月7日から6月29日の期間に実施し、6月25日には、約50名の参加を得て、関係者説明会を実施した。一方、現地調査は、調査第2課調査第2係長伊野近富と同主任調査員小池寛が担当し、遺構写真撮影は小池が、遺物写真撮影は、調査1課資料係主任調査員田中彰が担当した。また、本概要作成の整理作業および原稿執筆は小池が担当した。なお、測量基準点となる国土座標杭の設置は、(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

2. 位置と環境(第1図)

今回の発掘調査地は、京都市右京区常盤窪町1-4~8に所在し、旧御室川に挟まれた丘陵台地上に立地している。トレンチ西端の遺構面の標高は約47m、東端では約46.4mを測り、西方から東方にわずかではあるが傾斜して



第1図 調査地位置図(1/25,000)

いる。一方、常盤仲之町遺跡は、古墳時代から江戸時代にかけての集落跡であり、周辺には弥生時代の村ノ内町遺跡や古墳時代後期の常盤東ノ町古墳群、前方後円墳である太秦馬塚古墳や仲野親王陵古墳などが所在している。

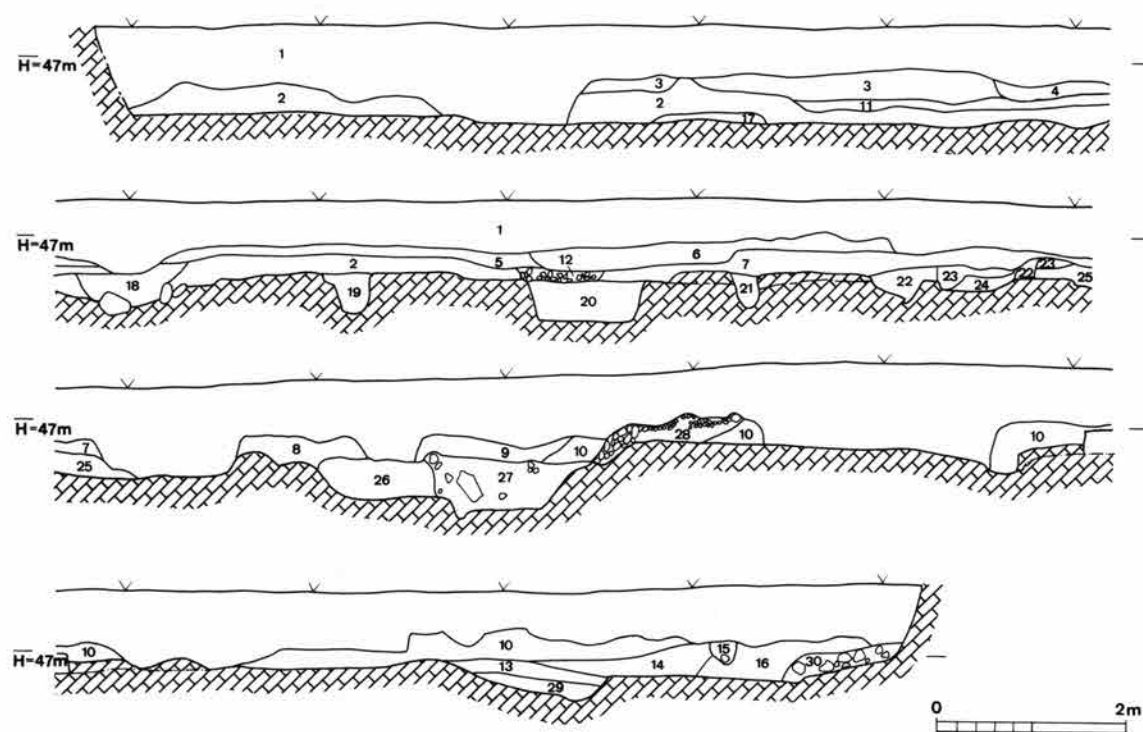
3. 調査概要

(1) 層序(第2図)

トレンチの攪乱が広範囲に及んでいることから、南壁において土層堆積状況の確認を行った。基本的には、0.5～0.7mの整地層が堆積しており、その下層に江戸時代中期以降に比定できる淡黒褐色土層(3層)、暗灰褐色土層(4層)、濁暗灰褐色土層(5層)、濁暗茶褐色土層(6層)、淡黒褐色土層(7層)、暗茶褐色土層(8層)、暗茶褐色細砂土層(9層)、淡黒褐色土層(10層)が堆積している。なお、検出した室町時代から江戸時代前期の遺構は、基本的には地山面上で確認した。

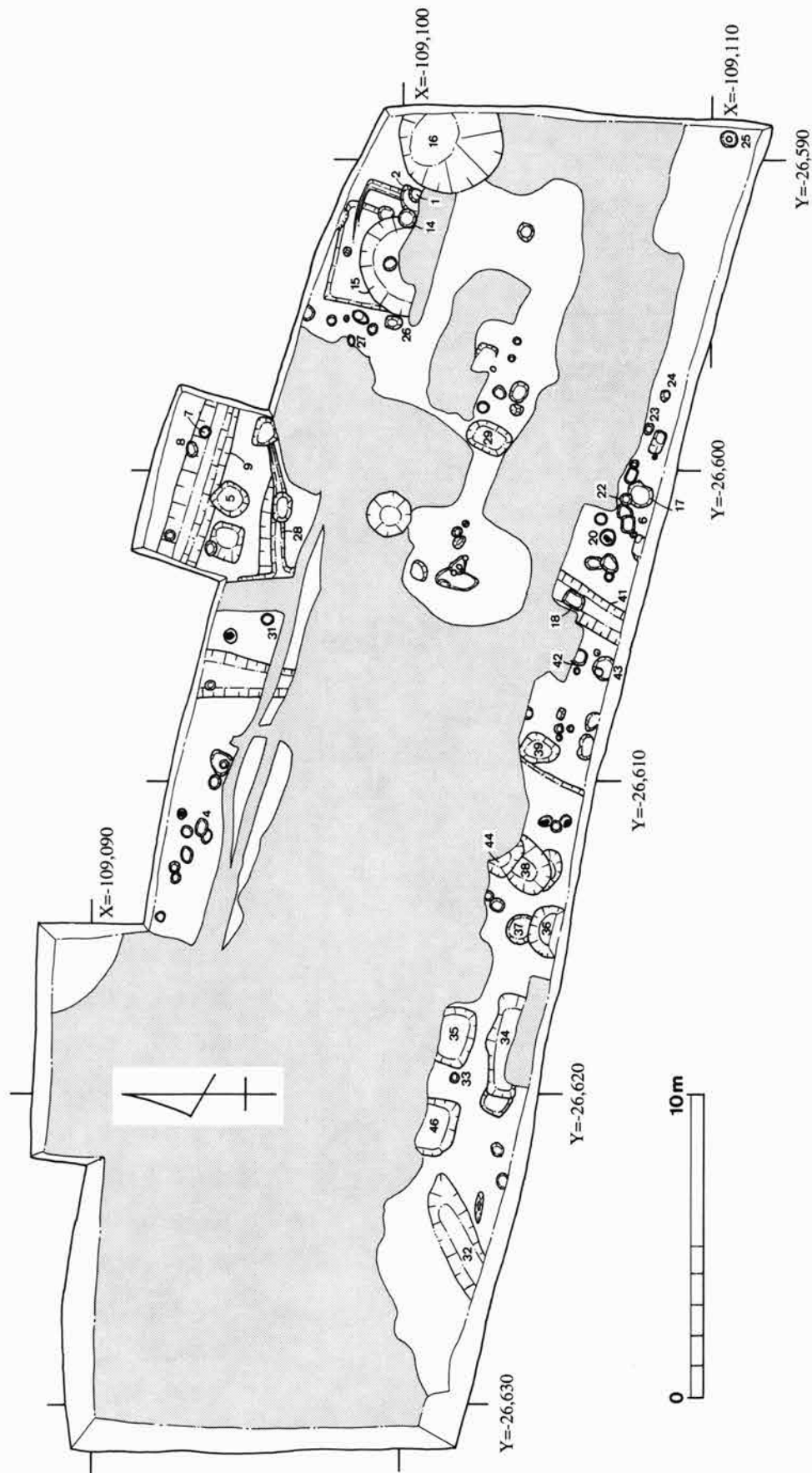
(2) 検出遺構(第3図、図版第1・2)

遺構面は、基本的にはトレンチ北端と南端に残存している。検出遺構には溝、土坑、柱穴、井戸、方形区画溝、礫を充填した土坑などがある。以下、主要な遺構について概観しておきたい。



第2図 南壁土層断面実測図

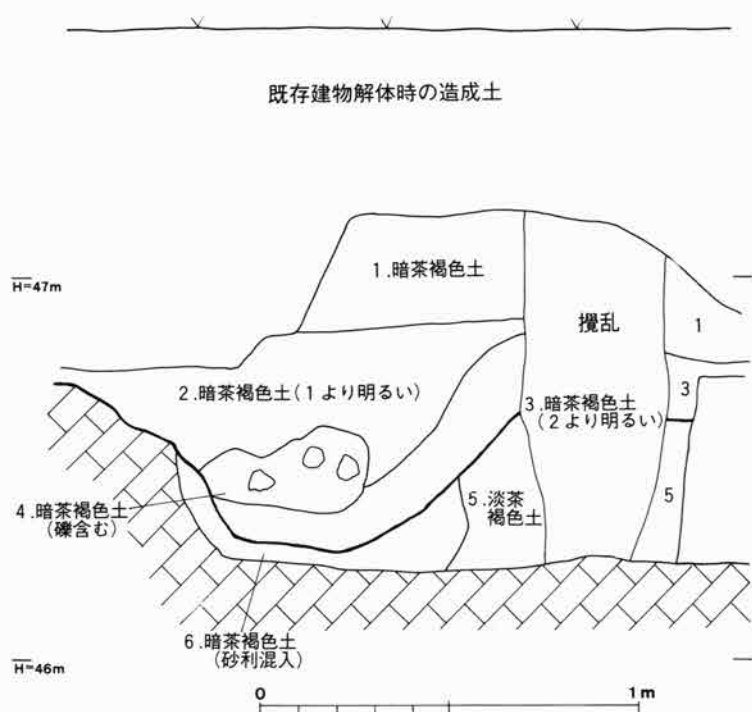
- | | | | |
|-------------------|-------------------|--------------------|------------------|
| 1. 近代層 | 2. 暗灰褐色土 | 3. 淡黒褐色土 | 4. 暗灰褐色土(細かい) |
| 5. 濁暗灰褐色土 | 6. 濁暗茶褐色土 | 7. 淡黒褐色土 | 8. 暗茶褐色土 |
| 9. 暗茶褐色土(細かい) | 10. 淡黒褐色土 | 11. 濁黄褐色土 | 12. 暗茶褐色土 |
| 13. 暗茶褐色砂利(S D32) | 14. 暗茶灰褐色土 | 15. 暗茶褐色土(濃い) | 16. 暗茶褐色土 |
| 17. 黄褐色土 | 18. 暗灰褐色粘質土 | 19. 濁黄褐色土(地山ブロック含) | |
| 20. 濁暗茶褐色土(S D41) | 21. 濁灰褐色土(S P43) | 22. 暗灰褐色土 | 23. 濁黄褐色土 |
| 24. 淡黒褐色土 | 25. 淡灰褐色土 | 26. 淡黒褐色砂利 | 27. 暗茶褐色土(S K36) |
| 28. 淡黒褐色(砂利含) | 29. 暗茶褐色砂利(砂利細かい) | 30. 暗茶褐色礫 | |



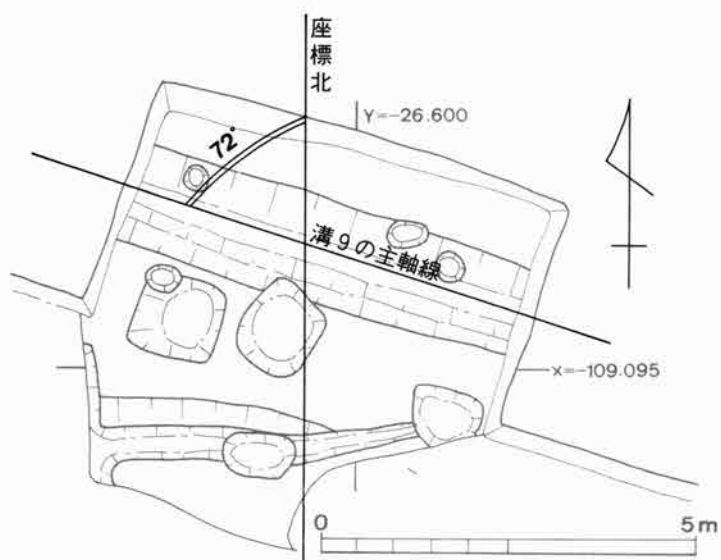
第3図 遺構配置図(網部は攪乱)

溝9(第4～6図、図版第3・4) 新設団地の階段部分での検出であり、検出した溝の全長は5.1mを測るに過ぎない。溝幅は1.4mを測り、最も深い部分で0.6mを測る。溝の南肩はゆるやかに傾斜し、深さ0.3m地点で急激に傾斜している。一方、北肩は、ゆるやかに傾斜しており、南北両肩の形状は異なっている。

溝内には、分層が可能な暗茶褐色土が堆積している(第4図)。溝内最下層には、3層である暗茶褐色土が北肩を覆うように堆積しているが、南肩部には及んでいない。また、3層の上層には、礫を含む暗茶褐色土が3層を一部切り込んで堆積している。一方、溝の最上層には2層である暗



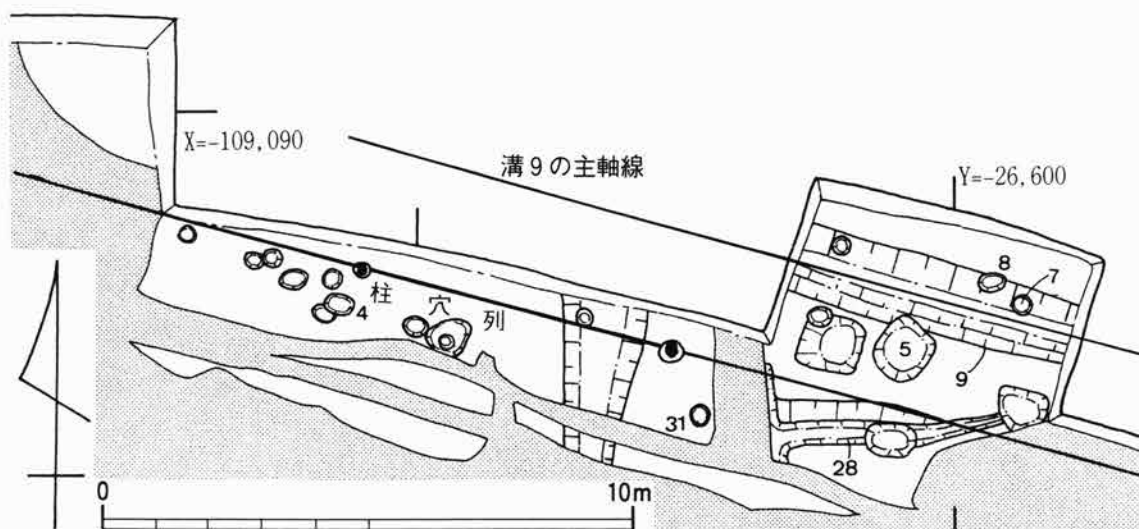
第4図 溝9西壁土層断面図



第5図 溝9主軸線測角図

茶褐色土が厚く堆積しており、人為的に埋め戻された可能性が高い。また、溝9の主軸は、第5図に示したように座標北から西方に72°振っていることが把握できた。なお、溝内からは室町時代に比定できる瓦質土器の羽釜(第9図7～9)が出土している。

溝9の南西隣接地点では、柱穴を13基検出している。後述するように柱穴4からは、江戸時代前期に比定できる唐津焼の皿(第9図17)が出土しており、全ての柱穴が同時期に穿たれたのではなく、室町時代から江戸時代前期の時期幅がある。他の柱穴からは時期を設定するに足る遺物が出土しておらず、溝9と同時期であるか否かについては、明確な根拠を提示できない。が、溝9の南肩部から南方へ1.6mの線上に根石をもつ柱穴を2基確認しており、柵の支柱穴である可能性が高い。また、第6図に提示したように溝9と同じ振り角であることか



第6図 溝9および柱穴列位置関係図

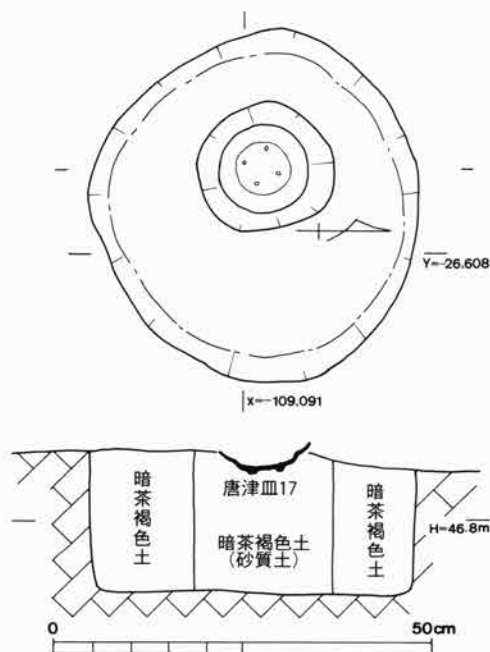
ら、同時期に併存していた可能性を想定しておきたい。これらから溝9と柵によって居住空間が区画されていた可能性が指摘できる。

柱穴4（第7図、図版第5-(1)） 調査地北側中央部で検出した直径約0.45mの円形の柱穴である。柱穴の側面は、垂直に掘られており、検出面から柱穴底部までの深さは、約0.18mである。柱穴のほぼ中央では、直径約0.18mの柱痕を確認しており、柱穴検出面において完形の唐津焼の皿（第9図17）を1点検出した。皿は、ほぼ水平に据えられており、意図的に埋納したと考えられる。皿は、柱穴底部から約0.18mの地点で出土し、なおかつ、完形の状態を保っていることから、建物の廃絶に伴う埋納である可能性が高い。

土坑14（第8図、図版第8） 調査トレンチの北東部で検出した礫充填土坑である。一辺1.1mの隅丸方形を呈しており、中央部に人頭大の礫を充填している。充填礫は、自然礫が大半であるが、土坑南端中央には、一辺約0.25m四方に加工した方形の台石を据えている。土坑の南半が攪乱により消失していることと上部構造物が消失していることから、用途については判然としない。が、方形の台石を中央に配置し、その周囲に礫群を配置していることから石塔などの基礎構造物である可能性が高い。

土坑15（第8図、図版第7-(3)） 南半部が消失しており、全体の形状などについては判然としないが、直径が約3mの円形土坑である。土坑の深さは約0.2mを測り、底部は平らである。

土坑16（第3図、図版第6-(1)） 直径3.4mを測る円形土坑である。最下層には拳大の礫を充填しており、その上層には0.05mの焼土が堆積している。出土遺物から江戸時代後期に比定できる。



第7図 柱穴4実測図



第8図 土坑14・15周辺遺構実測図

土坑17(第3図、図版第5-(2)・
(3)) 直径0.8mを測る円形土坑である。土坑底部から土師器皿(第9図4～6)が出土し、土坑検出面において古瀬戸花瓶(第9図3)が出土している。

(3)出土遺物(第9～11図)

出土遺物の総量は、整理箱に換算しておおむね6箱であり、基本的には室町時代から江戸時代に比定できる土器が多い。以下、図示した遺物の一部について報告しておきたい。

2は、信楽焼のすり鉢である。口径33.5cmを測り、内面には5条を1単位とするすり目が等間隔に施されている。3は、口径8.8cm、残存器高9.2cmを測る古瀬戸の花瓶である。双耳には直径約4cmの不整形な円環が付く。器表面には細かい貫入が入る。4は、口径6.8cmを測り、底部中央部が内側に突出する土師器皿である。

7は、口径20.5cmを測る瓦質土器の羽釜である。短く下方にのびる鰐をもつ。内面は横方向のハケメによって成形し、外面には指頭圧痕が観察できる。8は、直径24.5cmを測る瓦質土器の羽釜である。短い鰐が付く。9は、口径36.8cm、鰐の直径44cm、器高28.8cmを測る瓦質土器の羽釜であり、底部は丸底である。

13は、口径15cmの龍泉窯系の青磁碗である。14は、口径10.2cmを測る志野焼の碗である。乳白色の釉薬が厚くかかる。15は、口径9.6cmの志野焼の碗である。16は、口径11.4cmの美濃焼の天目茶碗である。17は、唐津焼の皿である。口径は12.1cmを測り、底部内面には、胎土目のトチン痕が観察できる。20は、絵唐津の皿である。口径14cm、高台径4.4cm、器高3.6cmを測る。

以上が、遺構から出土した遺物である。次に包含層から出土した遺物について報告しておきたい。21は、口径7.4cmを測る土師器皿である。底部中央が内側に突出する、いわゆるヘソ皿である。14世紀に比定できる。他の土師器皿の法量は、22が8.4cm、23が8.8cm、24が11.6cm、25が10.4cm、26が11.6cmを各々測る。27は口径2cm、器高2.4cm、28は口径4.8cm、器高5.6cmを測る焼塩壺である。江戸時代中期以降に比定できる。

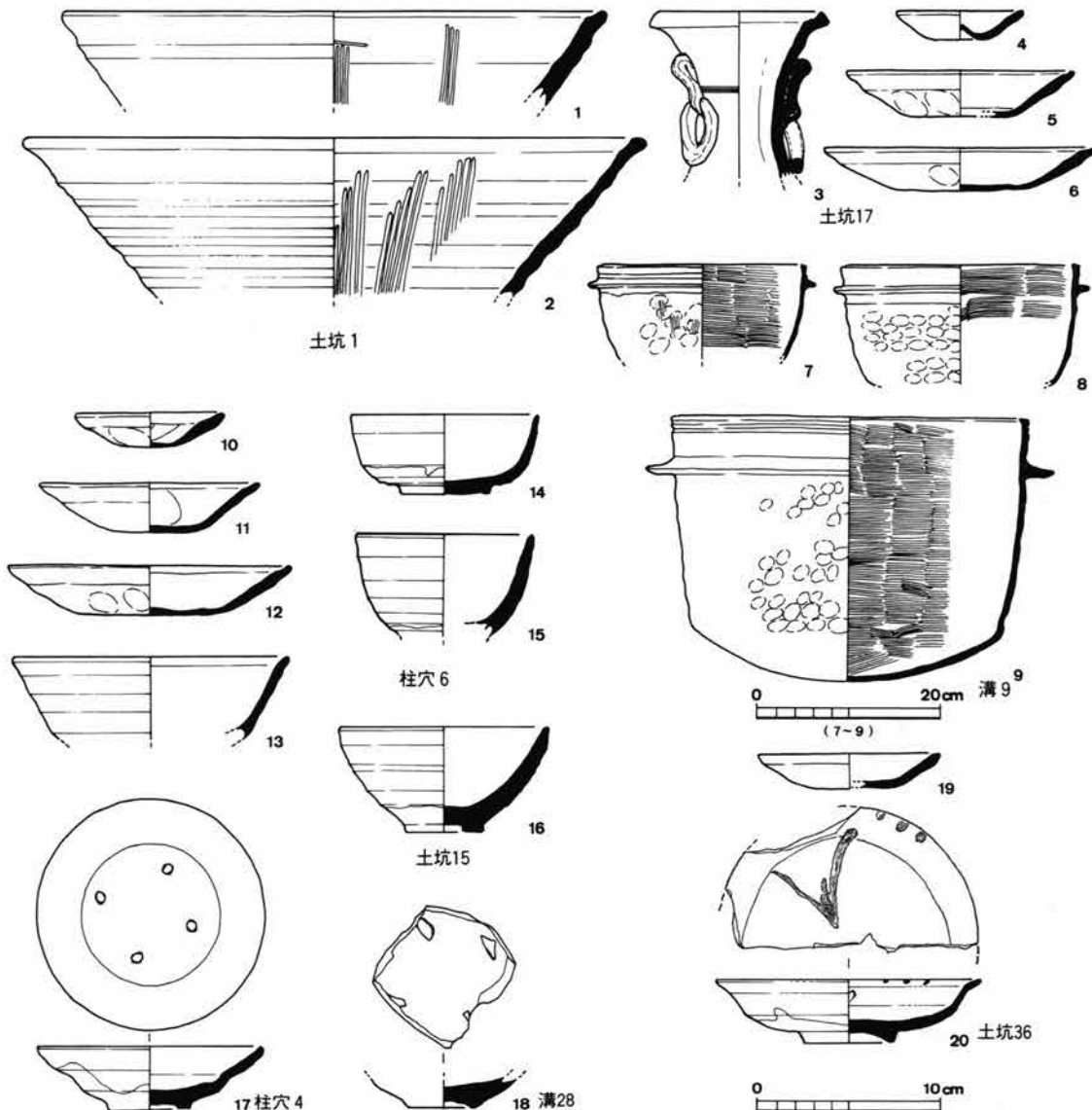
29から32は、瓦質土器の火鉢である。29は口径13.2cm、器高4.3cmを測り、外面には押圧による八葉の花文が施されており、底部には三脚を有している。一方、30は細片のため法量は不明であるが、口縁部外面の稜線間に連続する花菱文が施されている。31は、口径15.2cm、器高5.2cmを測り、内面に成形痕が残る。32は、底径14cmを測り、3か所に低脚を付している。外面には縦方向のヘラミガキが顕著である。

33は、口径11.2cm、器高2.6cm、34は、口径11.2cm、器高2.2cmを測る志野焼の皿である。35は、口径10.4cm、器高1.9cmを測る瀬戸美濃焼の丸皿である。36は口径7.6cm、器高3.8cmを測る志野

焼の椀である。37は口径10.6cm、器高2cm、38は口径10.4cm、器高2cmを各々測る瀬戸美濃焼の折縁ソギ皿である。基本的な形態は酷似するが、内面の菊花様のヘラ彫りには粗密がある。39は、口径11.6cmを測る美濃焼の天目茶椀である。40は、口縁部が欠損しているが、三脚を有する古瀬戸の香炉である。

41から43は、口径が10cm前後の唐津焼の椀である。44は口径12cm、器高3.2cm、45は口径11cm、器高3cmを測る唐津焼の皿である。44の内面には胎土目のトチン痕、46には砂目のトチン痕が観察できる。また、46の削り出し高台内側には、墨書による「+」印が付されている。47と48は、伊万里焼の染付椀であり、47の口径は9.6cm、48の口径は14.4cmである。

49は、細片のため口径は不明であるが、中国龍泉窯系の青磁椀である。また、50は、口径13.3cmを測る中国龍泉窯系の青磁椀である。51は、砂目のトチン痕が内面に付く高台径4.2cmを



第9図 出土遺物実測図(1)

1・2：土坑1 3～6：土坑17 7～9：溝9 10～15：柱穴6
16：土坑15 17：柱穴4 18：溝28 19・20：土坑36

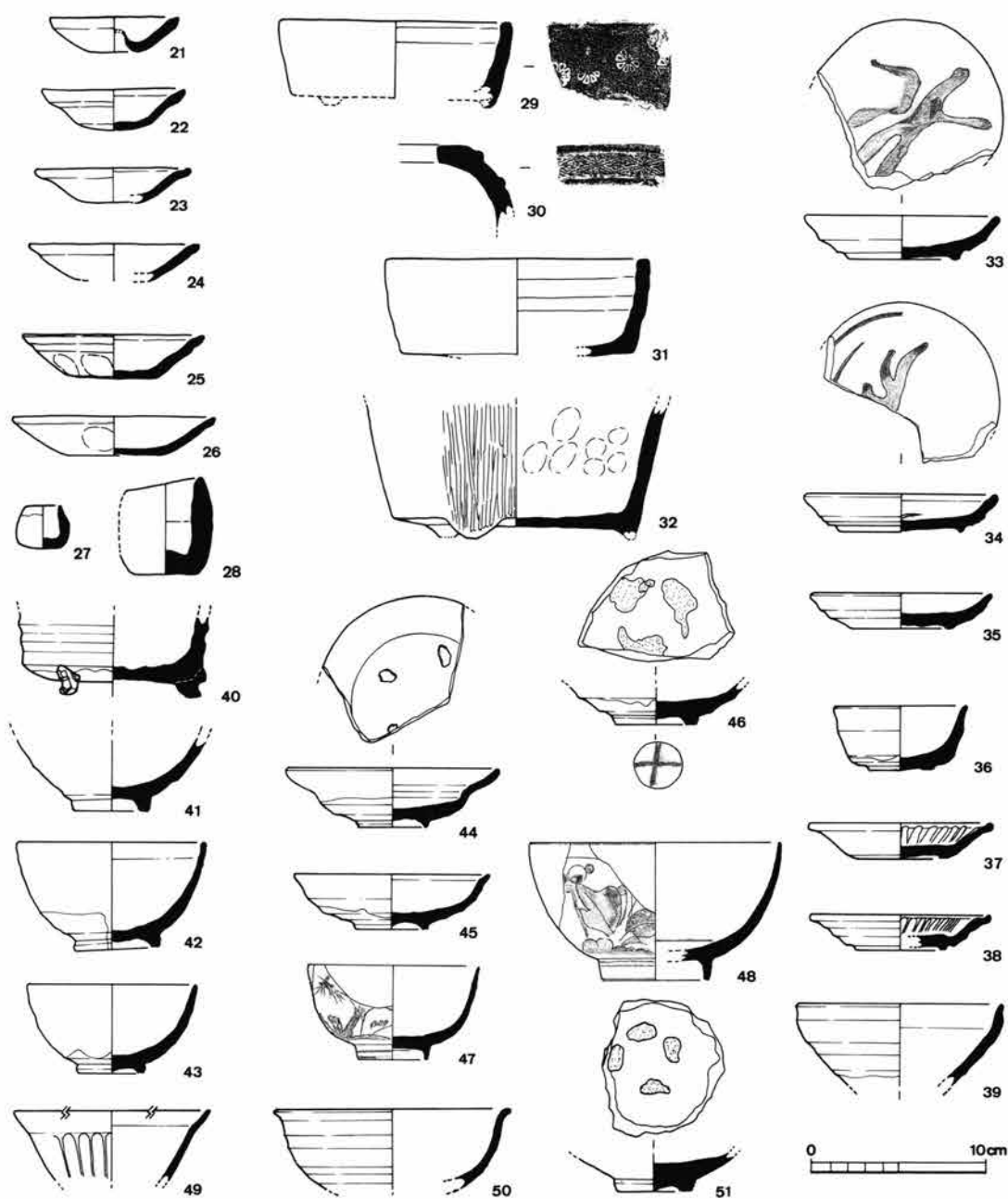
測る朝鮮王朝陶磁の碗である。

出土遺物の大半は土師器および陶磁器類であるが、第11図52は、内面には布目圧痕、外面には縄目叩き目が観察できる平瓦である。また、53は、内面には布目圧痕、外面には縄目叩き目が観察できる丸瓦である。また、図化し得ないが、緑釉陶器や灰釉陶器の細片が出土しており、これらの瓦類も平安時代を中心とする時期に比定できる。

以上が、出土遺物の概観である。これらを時期別の大別すると、14世紀に比定できる資料には21から26の土師器皿があり、志野、瀬戸美濃、唐津焼の多くは17世紀前半に比定できる。

4. ま と め

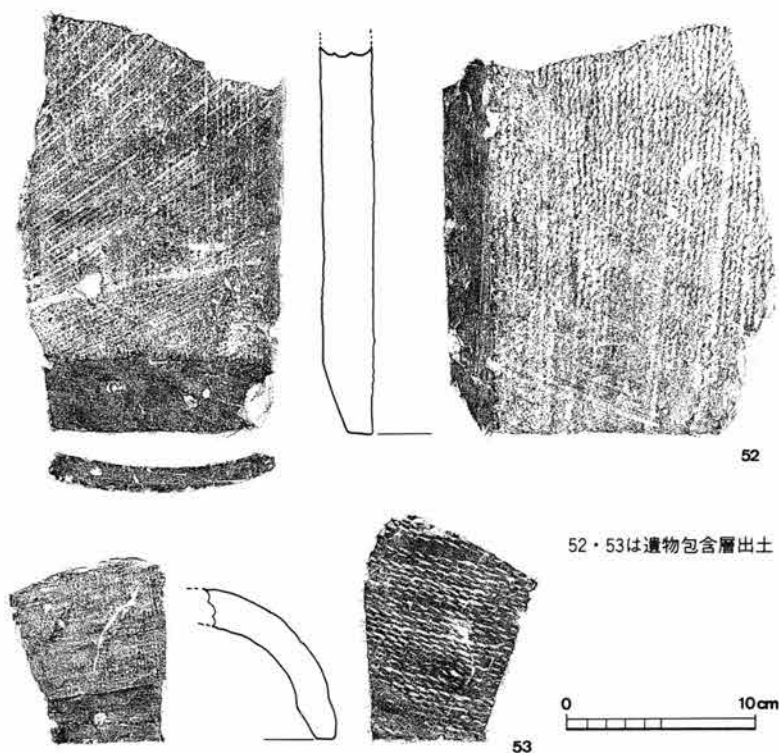
今回の発掘調査において検出した遺構、遺物の概観は以上であるが、最後に常盤仲之町遺跡に



第10図 出土遺物実測図(2) (遺物包含層)

おける今回の調査の意義について述べておきたい。

常盤仲之町遺跡は、1978年に常盤東蜂岡町15番地において古墳時代後期の集落跡の発掘調査が実施され、遺跡自体の性格や年代が把握された。^(注1)それに先行して1977年に実施された常盤東ノ町26の5番地での発掘調査では、古墳時代後期の横穴式石室墳である常盤東ノ町古墳群が確認され、集落と墳墓が隣接して造営されたことが把握された。この段階で遺跡の範囲が確定され、当調査地も常盤仲之町遺跡の範囲に取り入れられた。



第11図 出土遺物実測図(3)

その後、1994年に至るまで(財)京都市埋蔵文化財研究所によって広域立会調査^(注3)が実施され、古墳時代の常盤仲之町遺跡の範囲が想定された。これらの調査成果から当調査地が、古墳時代の常盤仲之町遺跡の範囲外にあることが想定された。

一方、常盤仲之町遺跡では、先に述べた広域立会調査で平安時代から江戸時代の遺構、遺物が確認されており、当調査地内においても関連する遺構などが確認されることが予想された。それらの検出遺構および出土遺物を新丸太町通り以南、後述する近衛大路末道以北、京福電鉄北野線以東、そして、常盤仲之町と常盤西町の町境道以西に限ってみれば、10-101調査では古墳時代後期と平安時代、10-108調査では時期不明の遺構、10-150調査では室町時代、10-151調査および10-152調査では流路状遺構などが各々確認されているが、一方、10-102調査～10-107調査、10-113調査、10-114調査、10-149調査では遺構および遺物は確認されていない。これらの状況から調査地以東には古墳時代から平安時代にかけての遺構が広がる可能性があり、また、調査地と南方に所在する近衛大路末道間には、室町時代の遺構が存在することが想定できる。

これらを今回の発掘調査と照合すれば、古墳時代の遺構および遺物は未検出であることから、古墳時代の常盤仲之町遺跡の範囲外になることが追認できた。一方、平安時代以降の遺構および遺物を確認していることから、常盤仲之町遺跡の範囲内にあることが確実になったといえる。また、今回の面的な発掘調査の成果は、常盤仲之町遺跡の範囲および年代を確定するうえで基礎資料になるであろう(図版第6-(2)・(3)、7-(1)・(2))。

次に、検出遺構についてまとめておきたい。



第12図 溝9主軸線と近衛大路末道の関係図(1/5,000)

調査地北半で検出した溝9およびその南隣接部で検出した根石をもつ柱穴群の配置状況から、これらの遺構が、屋敷地内を区画する目的で設定された施設である可能性が指摘できる。また、溝9からは室町時代の瓦質土器の羽釜が出土しており、少なくとも当該時期には、生活空間としての土地利用があったことが把握できた。

事実報告でも述べたように溝

9および柵の主軸は、座標北から西方に72°振っており、この振り角は、現行の地割の主軸と一致している。また、調査地の南方約50mには、平安時代前期に成立したと考えられる近衛大路末道が東西方向にはしっており、近世においても市街域と嵯峨一带を結ぶ主要な道路であったと考えられる(第12図)。この近衛大路末道の主軸と今回確認した屋敷を区画する溝9および柵の主軸が一致していることから、まず、地形に沿って近衛大路末道が敷設され、それを中心に地割が確定したと考えられる。その後、屋敷などの居住施設が徐々に整備されていった歴史的経緯を復原することができる。文献の記載事項の検証から近衛大路末道の成立が平安時代前期にまで遡る可能性が指摘されてはいるが、今回の発掘調査の成果から、少なくとも室町時代には、確実に近衛大路末道が敷設されていたことが確認できたといえる。

今回の発掘調査では、以上で述べたように近衛大路末道が、少なくとも室町時代までは遡り得る可能性を指摘できた。また、それ以後、絶えることなく、今日にいたるまで居住空間として土地利用がなされたことが明らかになった。

今後、周辺域における歴史的背景を考察するうえでの資料を追加できた意義は大きい。

(小池 寛)

注1 鈴木廣司ほか「常盤仲之町集落跡発掘調査報告」(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』Ⅲ (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1978

注2 鈴木廣司ほか「常盤東ノ町古墳群」(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』Ⅰ (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1977

注3 加納敬二ほか「京都嵯峨野の遺跡」(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1997

2. ^{ながおかきょう}長岡京跡^い右京^{うち}第704次(7ANGSK-1地区)・井ノ内遺跡発掘調査概要

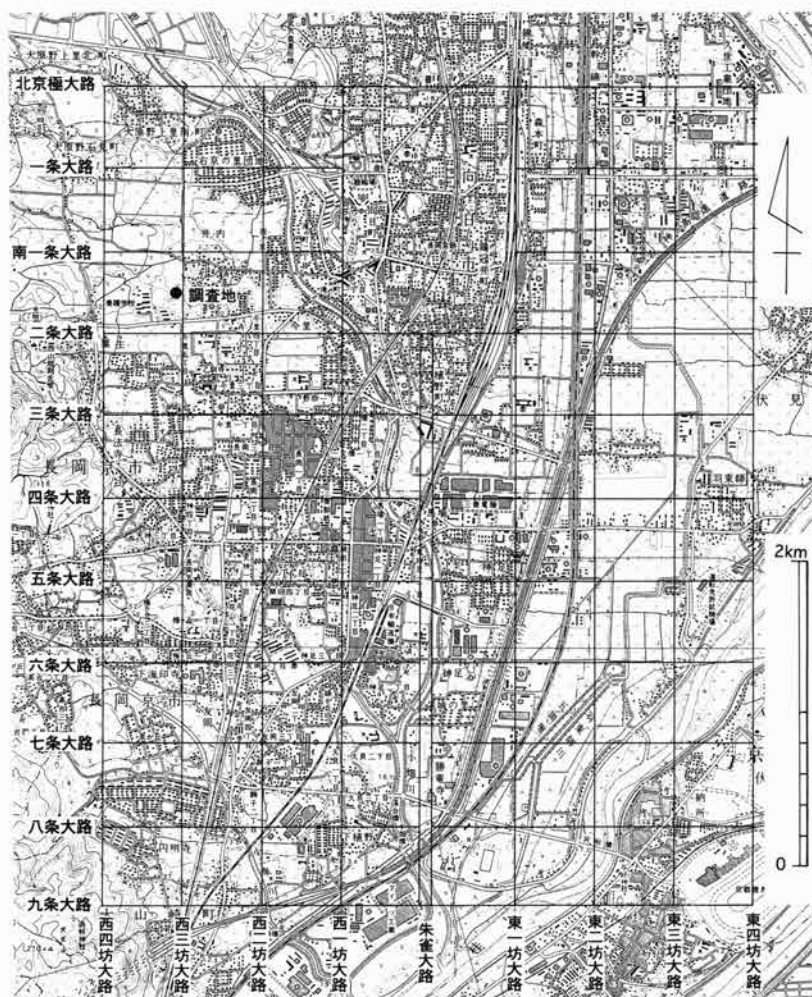
1. はじめに

今回の調査は、主要地方道大山崎大枝線緊急地方道整備事業に伴う調査である。調査以前に京都府教育委員会により、民間宅地開発予定地への進入路および側溝敷設に伴う立会調査が実施され、古代末から中世にかけての遺構の存在が明らかになった。

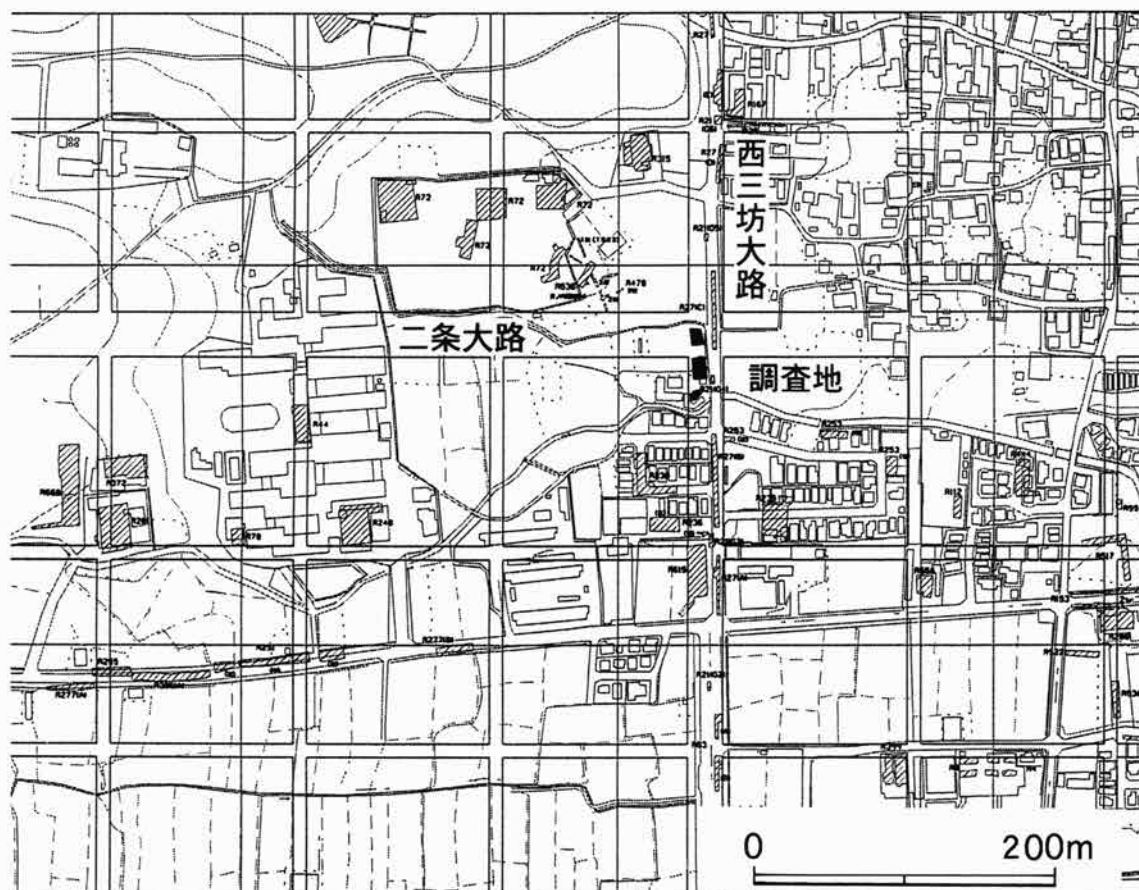
井ノ内遺跡は、西山丘陵から派生する低位段丘上に立地する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。また、調査地は長岡京の条坊推定によると右京二条四坊三町(新条坊：右京三条四坊一町)にあたり、西三坊大路と南一条大路(新条坊：二条大路)交差点付近にあたる。現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎および調査員柴暁彦が行った。調査期間は平成13年7月17日から同9月7日まで実施した。調査面積は約300m²である。調査期間中は地元関係者をはじめとして、京都府教育委員会・^(注1)長岡京市教育委員会・^(注2)(財)長岡京市埋蔵文化財センター・(財)向日市埋蔵文化財センターなど関係諸機関のお世話になった。また、現地作業および整理作業については、補助員・整理員の協力を得た。記して感謝する。調査にかかる費用は、京都府土木建築部が負担した。

2. 調査の概要

調査は宅地開発現場および作業場への進入路を確保したために、調査地は北・中央・南の3か所に分断された。また、調



第13図 調査地位置図



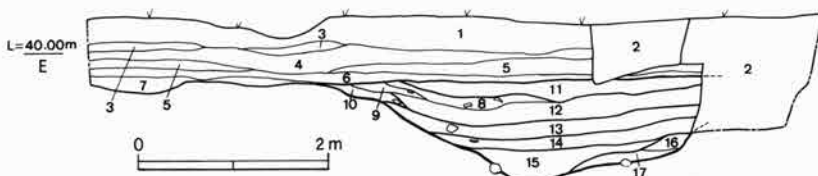
第14図 調査地周辺の条坊(新条坊による)

査着手以前から北および中央調査区部分には掘削残土が置かれており、今回の調査にあわせて、残土も含めて重機により表層の掘削を行った。

現地調査は京都府教育委員会の立会調査の資料をもとに残土の除去が完了した段階で人力による掘削を開始したが、北および中央調査区では、現在の府道敷面より高い面で遺構検出面を確認した。この検出面は南調査区に向かうにしたがって低くなり、南調査区の南端では、現地表下約60cmになる。

(1) 調査地の層序 (第15図)

中央調査区南半以北は残土を除去した段階ですでに遺構面に到達しており、現路面より高い面



- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1. 盛土 | 10. 暗茶褐色粘質土 |
| 2. 攪乱 | 11. 暗茶褐色粘質土(焼土・炭化物を含む) |
| 3. 灰色砂礫(炭泥じり) | 12. 暗茶褐色粘質土(土器・炭化物を含む) |
| 4. 灰色粘質土(耕作土) | 13. 暗茶褐色粘質土(土器小片・炭化物を含む) |
| 5. 灰褐色粘質土(小礫混じり、床土) | 14. 暗茶褐色粘質土(小礫混じり、炭化物を含む) |
| 6. 茶褐色粘質土(小礫混じり、中世遺物包含層) | 15. 暗茶褐色粘質土(小礫混じり) |
| 7. 暗茶褐色粘質土(小礫混じり) | 16. 暗茶褐色粘質土(礫敷テラス、土器を含む) |
| 8. 暗茶褐色粘質土(土器・礫を多く含む) | 17. 暗茶褐色粒砂礫土 |
| 9. 暗茶褐色粘質土(土器・礫を多く含む) | 8～17層がSD70401埋土 |

第15図 中央調査区南壁土層断面図

が遺構面であったと思われる。第15図は、比較的土層堆積の良好な部分であり、また今回検出した主要な遺構であるSD70401の埋土堆積状況も良好に確認できた部分の土層断面図で

ある。

調査地内の層序は第1層が現代の盛土層であり、その下に旧耕作土(4層)および床土(5層)があり、6層が中世の遺物包含層となっている。この6層を除去した段階で遺構検出面となる。なお、6層には磨滅した遺物小片がわずかに含まれている状態であった。

(2) 各調査区の調査概要(第16図)

各調査区には隣接する府道に平行して、東側部分に広範囲な攪乱が見られた。以下に各調査区の概要を述べる。

①北調査区 調査以前に遺構検出面が削平を受けており、遺構を検出できたのは全体の1/3程度である。大半は地山面を削り込んだ近現代の攪乱が見られた。検出面の標高は約40.6mである。検出した遺構には土坑、ピットなどがある。ピットは10基を確認したが、建物として復原することはできなかった。

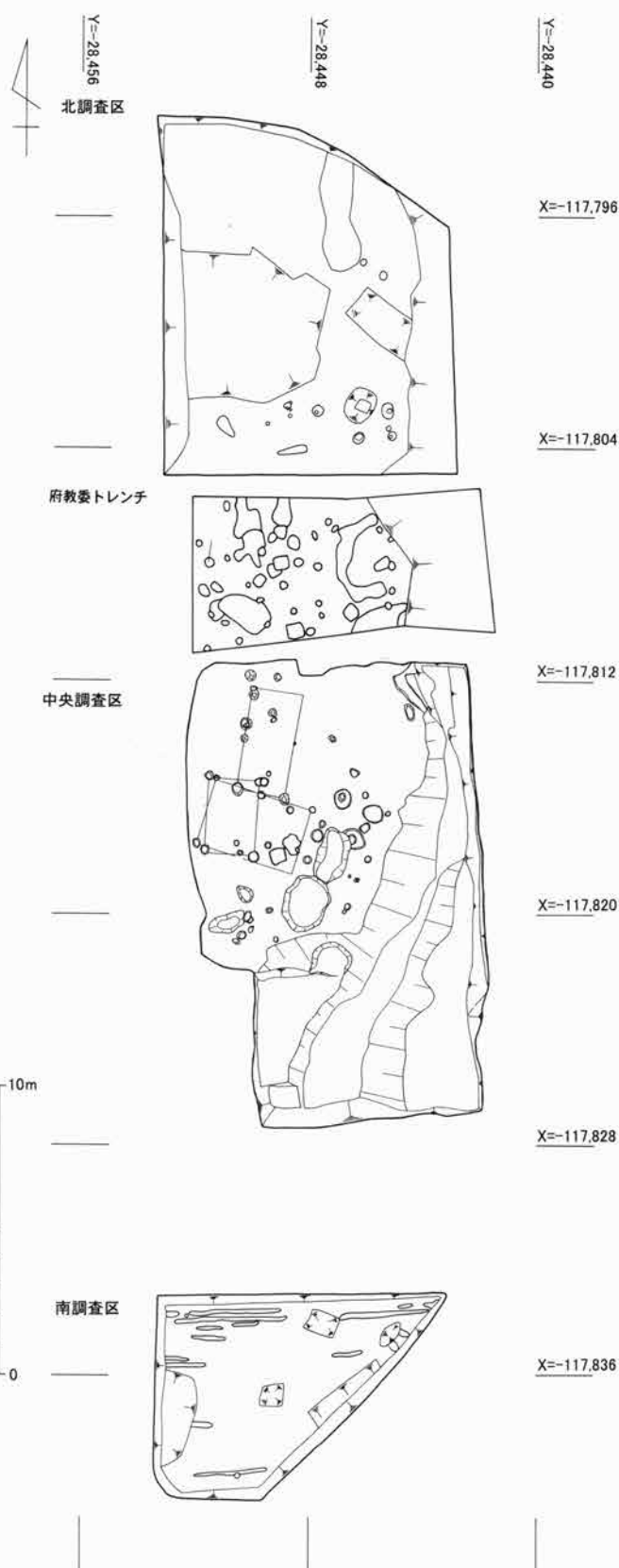
②中央調査区 遺構としてのまとまりが見られた調査区である。検出遺構には、溝状遺構・掘立柱建物跡・土坑がある。検出面の標高は40.3m前後である。

③南調査区 現在の坂川の護岸擁壁に接する調査区である。遺構検出面は現地表下約0.6m(標高約39.6m)である。遺構検出面に重機の爪痕が残っており現代攪乱が見られる。この中で東西方向の素掘り溝を数条確認した。

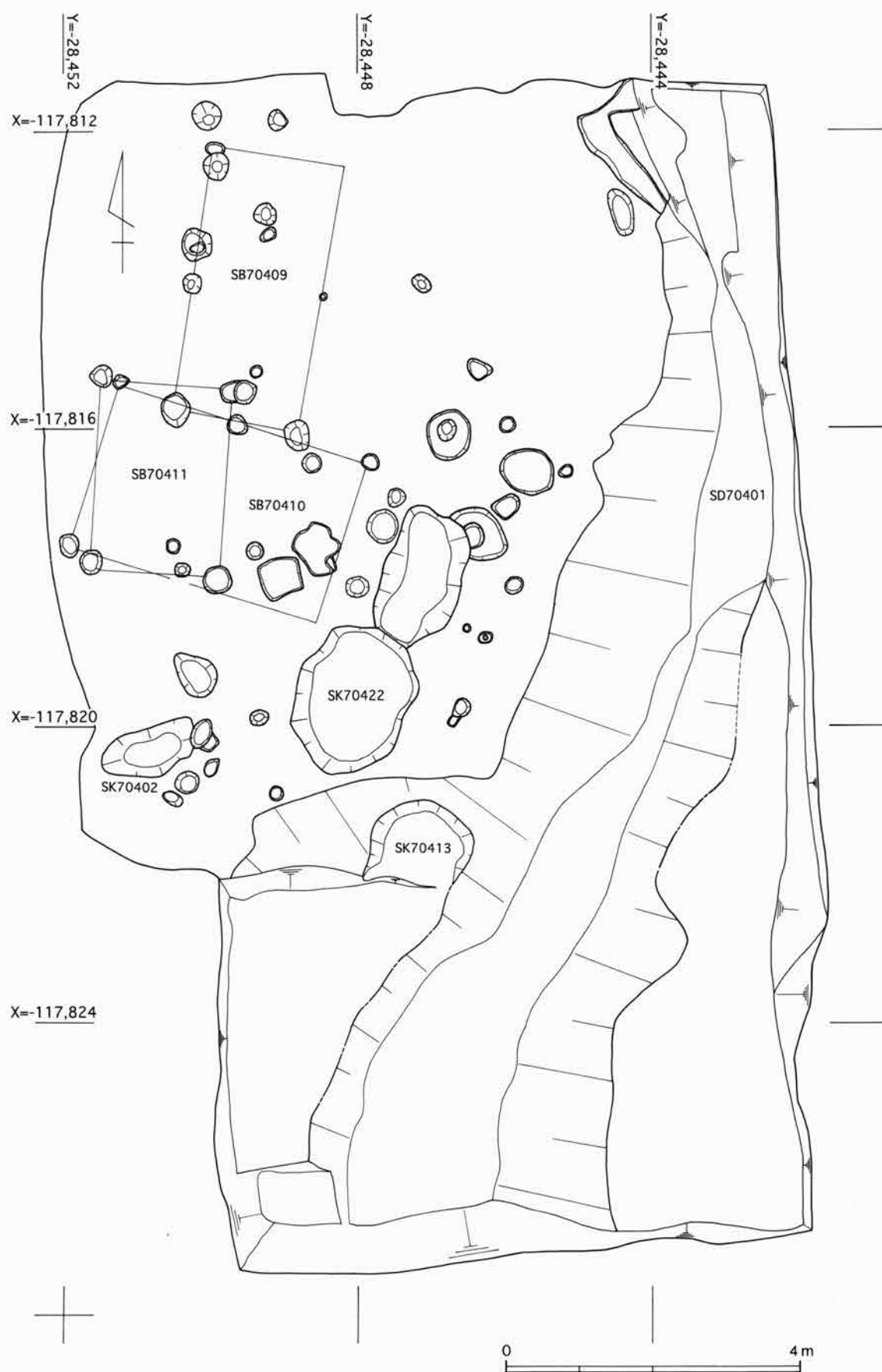
3. 検出遺構(第17図)

中央調査区から検出された主要な遺構について、以下にその概要を記す。

溝状遺構 S D 70401 調査地東側に



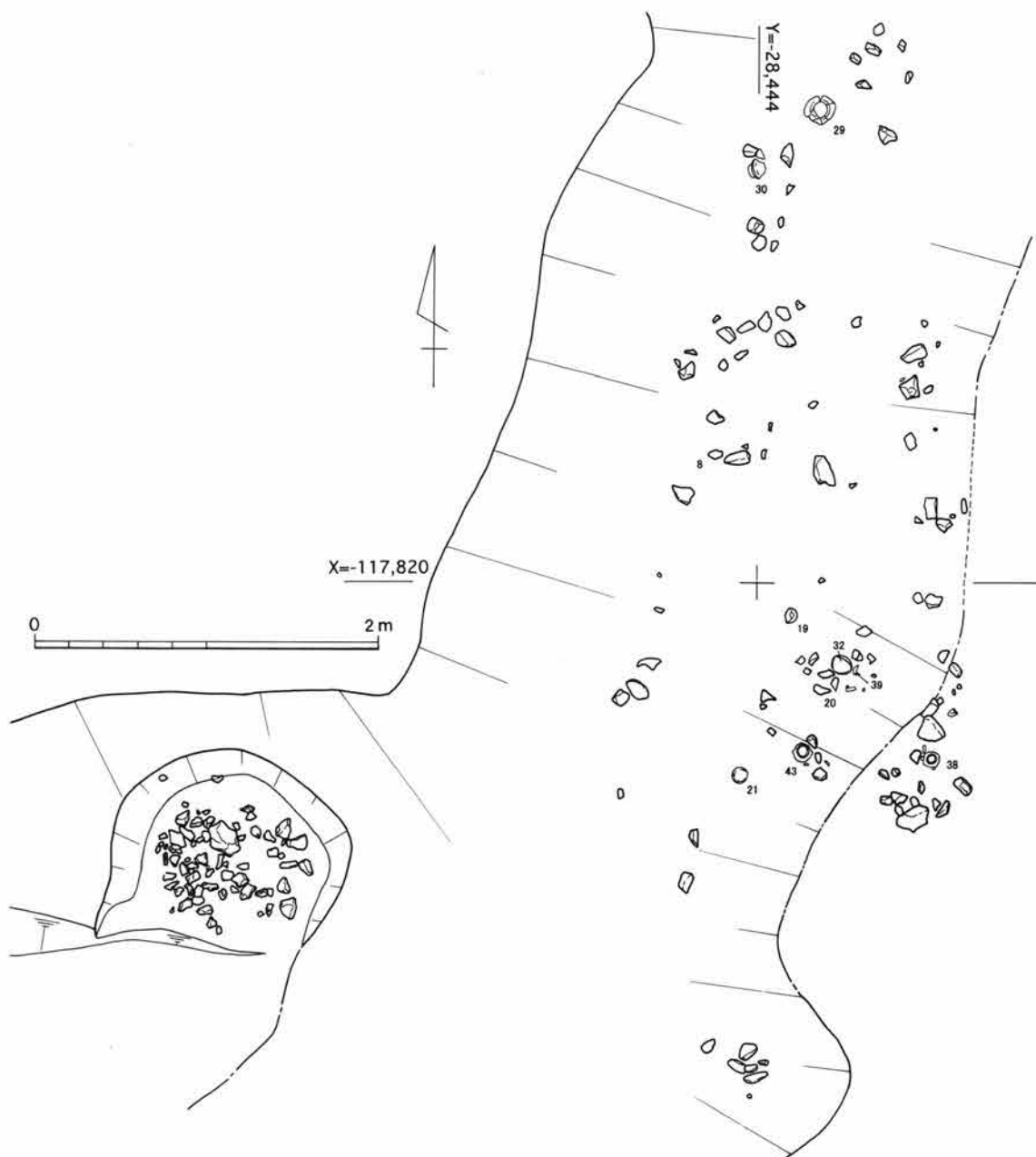
第16図 調査区平面図



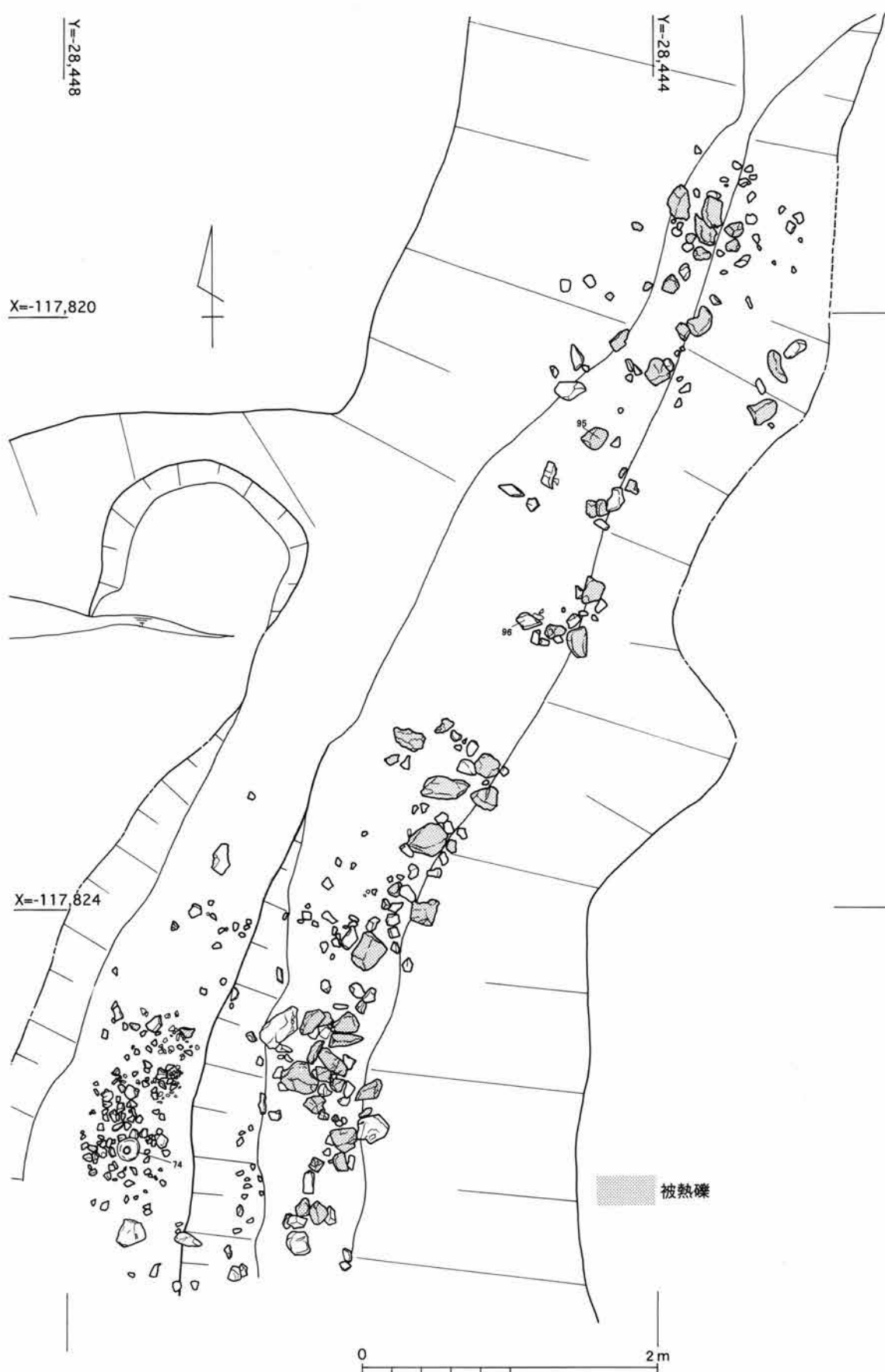
第17図 中央調査区平面図

あり、北東—南西方向に振れる遺構である。検出長は約12.8m、幅は推定で約4.4m、深さは最大で約1.1mを測る。深さは一定せず、北側は浅く、中ほどから南側にかけて深くなる。溝の北東延長部および東肩部、南西肩部は現代攪乱により削平されている。一方、溝の南側の延長部は南調査区の北壁に沿って、溝の延長部と思われる部分にトレンチを東側の府道に向かって入れたが、すでに府道側溝および坂川の護岸擁壁のコンクリートが打たれており、確認できなかったため、未調査の通路部分で東西いずれかに屈曲するか終息するものと思われるが、推測の域をでない。

溝内部の状況は、調査区南寄りの北西肩部の中段には幅約1mを測るテラスが存在する。テラス上面には子どもの拳大の小礫が敷かれており、その上面から2次的焼成を受けた瓦器碗1点が口縁部を下にした状態で出土した。このテラス部分は溝の肩部に人為的に砂礫土を盛っており、この盛土中には土器が含まれている。



第18図 S D70401中層遺物出土状況平面図(図中の番号は遺物実測図と対応)



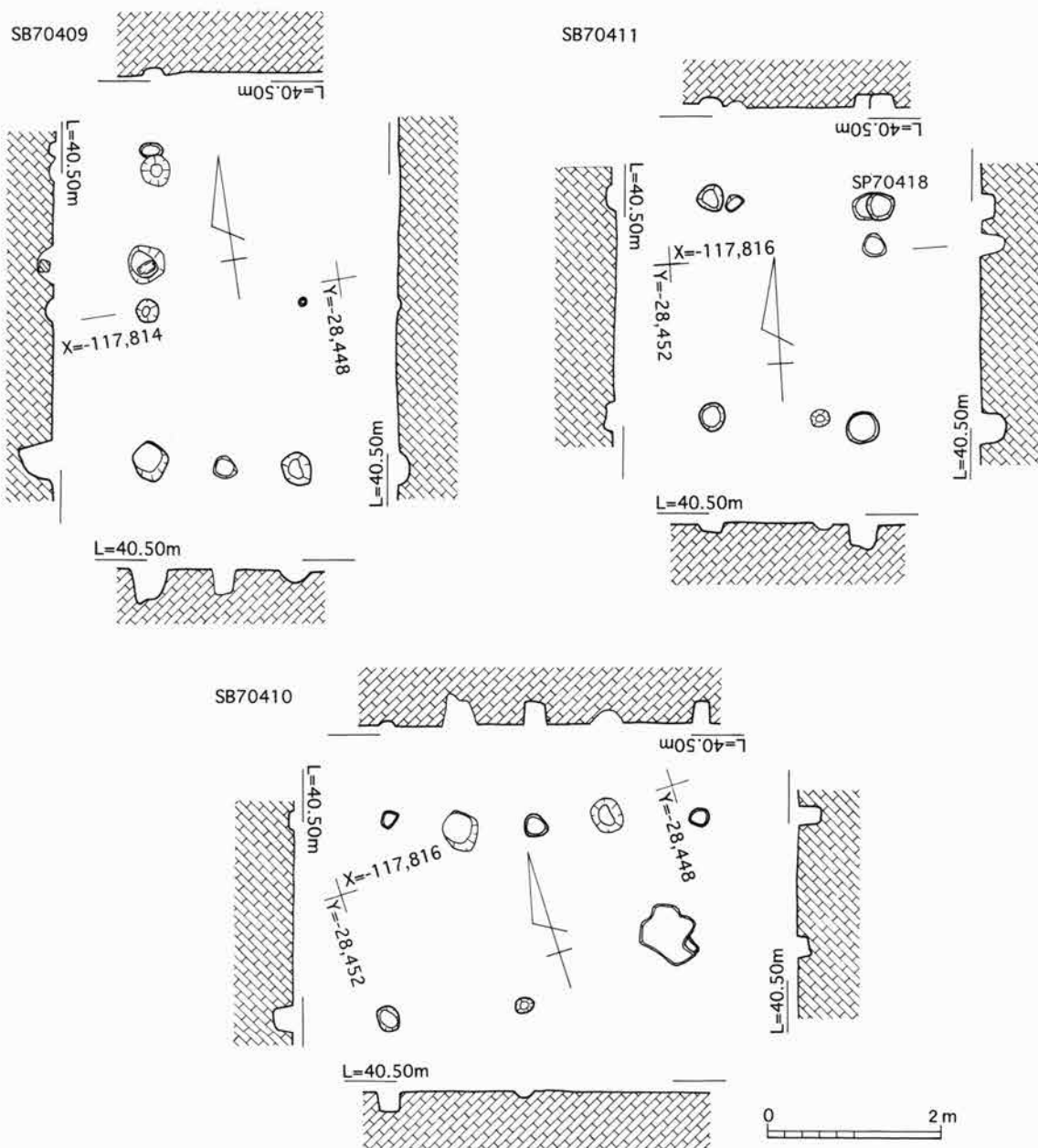
第19図 S D70401下層礫出土状況図(図中の番号は遺物実測図と対応)

底部付近には、溝底から約10cm浮いた状態で人頭大から子どもの拳大の角礫が多数出土している(第19図)。多量の礫の中には、砥石も含まれており、生活に伴い利用されていたものと考えられる。これらの礫は大半が被熱赤変しており、土器とともに投棄されたものと判断した。

埋土は大きく5層に分層できた(第15図)。基本的には礫混じりの暗茶褐色土であり、12層および13層から多量の土器および遺物が出土した。出土総量は遺物整理用コンテナに10箱ある。

また、埋土を採取し水洗洗浄したところ、炭化米や小豆と思われる種子などが出土した。そのほか小鍛冶を行っていたと思われる鍛造剥片や湯玉、砂鉄、鉄滓、フイゴの羽口なども出土している。遺構の所属時期は出土土器から平安時代末(11世紀後半～12世紀前半)と思われる。その性格は居住域を区画する堀状のものと考えられる。

掘立柱建物跡 S B 70409 東西1間、南北2間の建物である。東西1.8m、南北3.6mを測る。



第20図 掘立柱建物跡実測図

柱穴の直径は15～30cm程度で、深さは20～30cmある。建物は真北から東に振っており、溝状遺構の振れに沿うものと思われる。柱穴の中から瓦器碗や土師器皿の小片が出土した。

掘立柱建物跡 S B 70410 東西2間、南北1間の東西棟の建物である。東西は3.6m、南北は2.1mを測る。柱穴の直径は20～30cmで、深さは10～20cmを測る。柱穴の中から瓦器碗、土師器皿などの小片が出土した。

掘立柱建物跡 S B 70411 東西・南北とも1間の南北棟の建物である。東西は1.8m、南北は2.5mを測る。柱穴は直径20～30cmで、深さ15cmを測る。北東隅の柱穴 S P 70418 から瓦器碗の破片が出土した。時期は S D 70401 同様12世紀前半であり、溝と同時期の建物と考える。

土坑 S K 02 短軸0.4m、長軸1.2mの楕円形の土坑で、深さ30cmを測る。この土坑から瓦器碗や土師器皿の破片とともに重郭文軒平瓦片(第25図100)が出土した。

土坑 S K 13 直径1.4m、深さ0.5mを測る。埋土中に多量の拳大の礫を含んでいた。この礫に混じって、土師器皿、黒色土器、土師質鍋、緑釉陶器、瓦などが出土した。

4. 出土遺物

土師器・瓦器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などの土器、石器・石製品、土製品(土錘)、瓦、鉄釘などの鉄製品、鍛造剥片・湯玉・砂鉄といった鍛冶関連遺物などがある。また、自然遺物として炭化米などの種子も出土している。

(1) 土器

土師器皿は、A・B・Cの3類に分類した。^(注3)

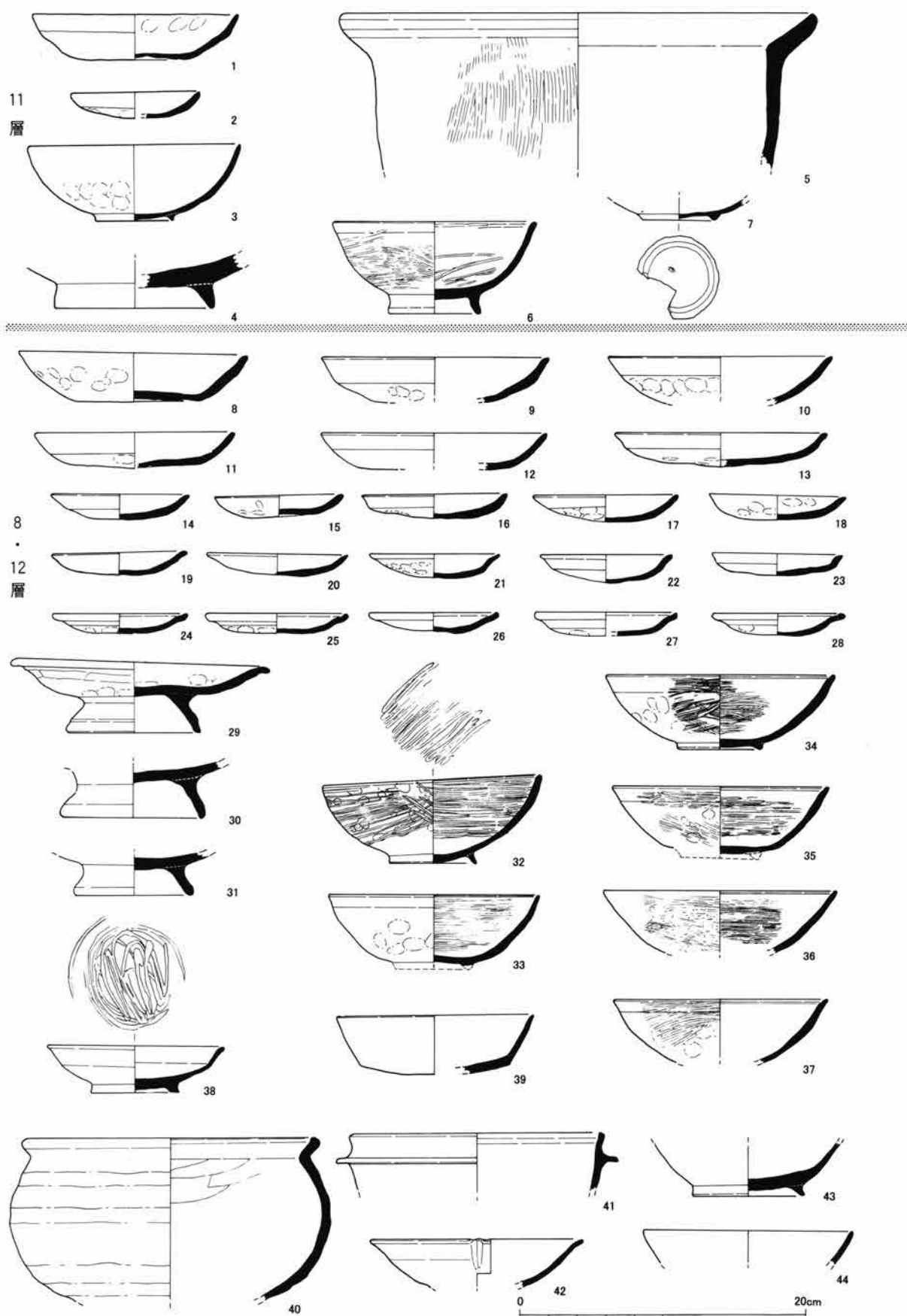
A類 直径約14cmのものと10cmの2種類が見られる。器形の特徴は底部から斜め上方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。出土点数は10cmのものが土師器皿の大半を占める。

B類 口縁部を外反させたのち、端部を内側に丸めて玉縁状にしている。口縁部の断面形状が「て」字状になる、いわゆる「て」字口縁である。直径約10cm未満である。

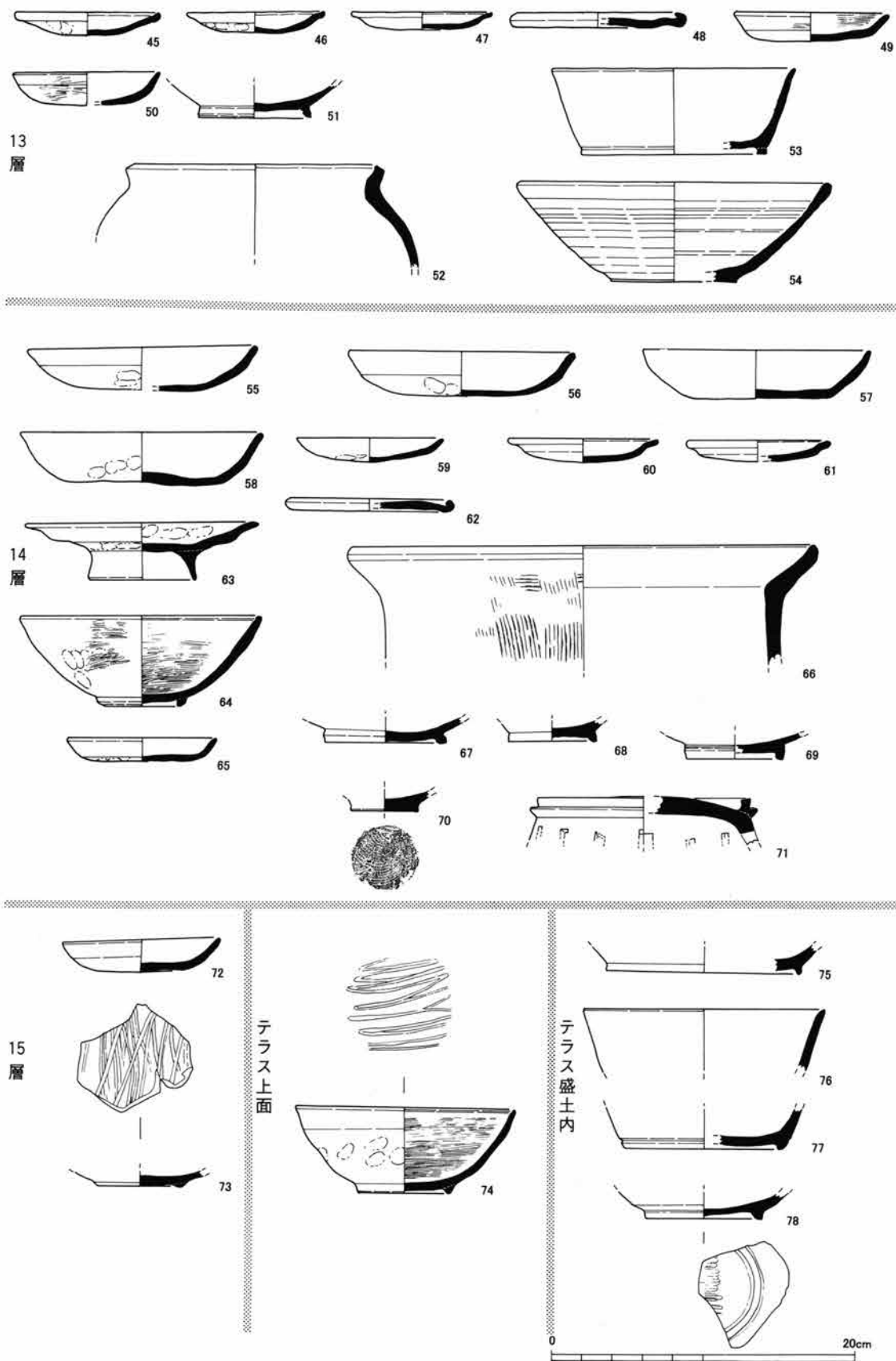
C類 底部からはほぼ水平に広がり、口縁端部を内面に折り返している。「コースター型」と呼ばれるものである。直径は11cm前後である。

溝 S D 70401 (第21・22図)

第21図1～7は11層から出土した。1・2は土師器皿A類である。1は直径14.5cm、器高3.2cmを測る中皿である。完形である。2は直径9.1cmの小皿である。3は瓦器碗である。口径14.9cm、器高5.2cmを測る。楠葉型であるが、外面のミガキは口縁部から体部中ほどまで見られるが、ミガキの間隔に隙間があり粗雑さが見られる。4は灰釉碗である。器壁が1.3cmと厚い。高台は貼り付けであり、断面は逆三角形をなす。須恵質の焼きであり、色調は淡灰色をなす。釉は見られない。5は土師質鍋である。口径は32.7cmを測る。体部から斜め上方に立ち上がる口縁部を持つ。外面は縦方向のハケメを施し、内面はケズリ調整である。胎土に砂粒を含み器表面はざらつく。色調は内外面とも淡茶褐色である。6は吉備系土師質碗(回転台土師器)である。口径14.2cm、器高6.45cmを測る。底部をヘラオコシののち、高台を貼り付けている。内外面とも横方



第21図 S D70401出土土器実測図(1)



第22図 S D 70401出土土器実測図(2)

向を基調としたミガキ調整が施される。口縁端部内面は横方向のヘラ状工具によるナデ調整がなされる。色調は乳白色をなし、胎土中に灰色の雲母粒を含んでいる。7は瓦器碗である。底部中央付近に刳圧痕が見られる。内外面とも炭素が吸着しておらず、色調は乳白色をなしている。

第21図8～44は8・12層から出土した。8～28は土師器皿である。8～13はA類の中皿である。8は口径16.2cm、器高3.5cmを測る。色調は内面が暗黄褐色、外面が淡橙褐色をなす。14～23は小皿である。14は口径9.7cm、器高1.7cmを測る。色調は淡黄褐色をなす。20は口径10cm、器高1.5cmを測る。色調は淡乳白色をなす。小皿のなかで21～23は口縁端部を斜め上方につまみ出すものである。21は口径9.2cm、器高1.8cmを測り、ほぼ完形である。色調は淡茶褐色をなす。22は口径9.3cm、器高1.95cmを測る。色調は淡赤褐色をなす。ほぼ完形である。24～28はB類のいわゆる「て」字状口縁皿である。26は口径9cm、器高3.1cmを測る。色調は淡赤褐色をなす。24～27のように口縁端部を上方に摘み上げるものと、端部を折り曲げる28がある。28は口径9cm、器高1.7cmを測る。色調は内外面とも淡黒灰色をなす。29～31は土師器高台付皿である。29は口径18.35cm、器高5.4cmを測る。土師器皿とは異なり、口縁端部は水平に引き出され器壁も0.6cmと厚い。30は底径9.8cmを測る。32・33は瓦器碗である。32は口径15.3cm、器高6cmを測る。内外面に密なミガキ調整が成される。外面は4分割のミガキ調整である。内面は口縁端部内面に1条の沈線が施される。見込み部分には、ジグザグ文が見られる。色調は淡黄灰白色をなす。33は外面が磨滅しておりミガキ調整が不明であるが、内面には密なミガキ調整が見られる。34～37は黒色土器碗である。34は口径16.1cm、器高6.25cmを測る。35は口径15.2cm、器高4.6cmを測る。高台が剝離している。38は無釉陶器である。口径12.3cm、器高3.35cmを測る。見込み部分に不規則なミガキ痕が見られる。39は須恵器杯Aである。口径14cm、器高4cmを測る。焼成はやや不良で、色調は灰白色を呈している。口縁端部外面に暗灰色の帯状の重ね焼き痕が見られる。40は土師器甕である。口径20cm、残存高11.7cmを測る。底部から弧を描くように立ち上がり、体部中ほどが最大径となり、頸部に向かって内湾し、短く「く」字状に口縁部が外反する。口縁端部は内面が肥厚する。色調は内面が橙褐色、外面が暗橙灰褐色をなす。粘土紐巻き上げ成形であり、外面にヨコナデ痕跡がある。41は小型の土師器羽釜である。復原口径18cmを測る。鐙の下部に煤が付着している。42は灰釉陶器である。口径14.8cmを測る。口縁部外面を縦に2条ナデることで輪花装飾を施す。43は碗底部である。底径7.5cmを測る。底部には回転糸切り痕を残し、高台を貼り付けている。見込み部分には、わずかに釉がかかる。色調は黄茶褐色をなす。胎土は砂粒を含み、ザラついている。山茶碗と思われる。44は白磁碗口縁である。器壁は薄く、口縁端部は尖り気味におさめる。釉調は、乳白色である。

第22図45～54は13層から出土した。45～48は土師器皿である。45～47はB類である。48はC類である。口径は11.8cm、器高は1cmを測る。49・50は瓦器皿である。51は灰釉陶器碗底部である。底径は7.4cmを測る。52は土師器甕である。口径17.2cm、残存高14.8cmを測る。53・54は須恵器である。53は杯Bである。口径16.4cm、器高5.6cmを測る。54は鉢である。口径20.2cm、器高6.5cmを測る。篠窯跡群中の西長尾5号窯の製品と思われる。

第22図55～71は、14層から出土した。55～62は土師器皿である。55～58はA類中皿である。57は、口径15.2cm、器高3.2cmを測る。色調は内面が淡橙白色、外面が橙褐色をなす。59は同小皿である。口径9.7cm、器高1.6cmを測る。色調は淡橙褐色をなす。ほぼ完形である。60・61はB類である。62はC類である。口径11.2cm、器高0.8cmを測る。色調は内面が淡黄灰白色、外面が淡黄白色をなす。63は高台付皿である。口径14.6cm、器高3.7cm、底径6.9cmを測る。64・65は瓦器である。64は椀である。口径16.7cm、器高6.05cmを測る。外面のミガキ調整はやや不明瞭であるが、体部中ほどまで磨かれている。内面は見込みに接する部分まで密にミガキが入る。65は皿である。口径9.8cm、器高1.5cmを測る。66は土師器鍋である。口径30.3cmを測る。外面はタテハケ調整が入る。67・68は緑釉陶器である。いずれも底部片であり、高台は削り出しによる。69は無釉陶器である。底径は6.4cmを測る。70は土師質土器椀底部である。底径は4.4cmを測る。底部は回転糸切り痕が見られる。色調は黄灰白色をなす。71は円面硯である。陸部分と台部分の透かしで破損している。方形透かし穴は4つが残存する。

72・73は15層から出土した。72は瓦器皿である。口径14cm、器高2.5cmを測る。底部に製作痕跡を残す。粘土紐により円板成形されており、円板製作後、一部を切欠き、皿状に仕上げている。73は黒色土器底部である。高台径は5.55cmを測る。見込み部分に縦および斜め方向のミガキが施される。

74はテラス上面から出土した瓦器椀である。口径14.5cm、器高5.7cmを測る。全体に炭素の吸着が少なく、色調は淡灰褐色を呈する。外面は表面が磨耗しており、ミガキ調整が不明瞭である。内面は密にミガキが施されており、見込み部分にジグザグ状の暗文が入る。2次的焼成を受けている。

75～78は、テラス盛土から出土した。75は土師器杯B底部である。色調は明褐色を呈する。76は杯口縁、77は杯B底部である。77は底径10.6cmを測る。78は緑釉陶器椀である。高台は削り出している。高台部分は露胎であるが、底部中央に釉をジグザグ状にハケ塗りした痕跡が認められる。釉調は淡緑褐色をなす。篠窯跡群の黒岩1号窯の製品と思われる。

土坑S K 07(第23図79・80)

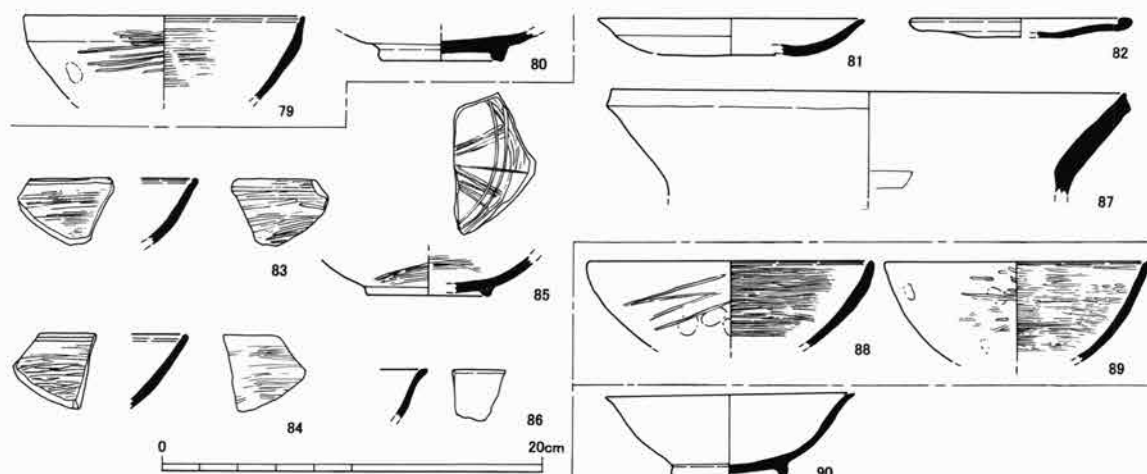
79は瓦器椀である。80は無釉陶器の底部である。底部は完形である。底径は6.4cmを測る。

土坑S K 13(第23図81～87)

81・82は土師器皿である。81はA類、82はB類である。82は口縁端部を折り曲げ肥厚している。口径11.4cm、器高1cmを測る。83～85は黒色土器である。いずれもB類である。85は見込み部分に放射状の暗文を施している。86は緑釉陶器口縁部片である。須恵質の焼きである。87は土師質鍋口縁部である。

掘立柱建物跡S B 70411ピット(第23図88・89)

瓦器椀2点が出土している。88は口径14.8cmを測る。内面の平行線ミガキは密に施されているが、外面の斜行ミガキは間隔が広く、疎らである。89は内外面のミガキが口縁端部に平行するように施されている。



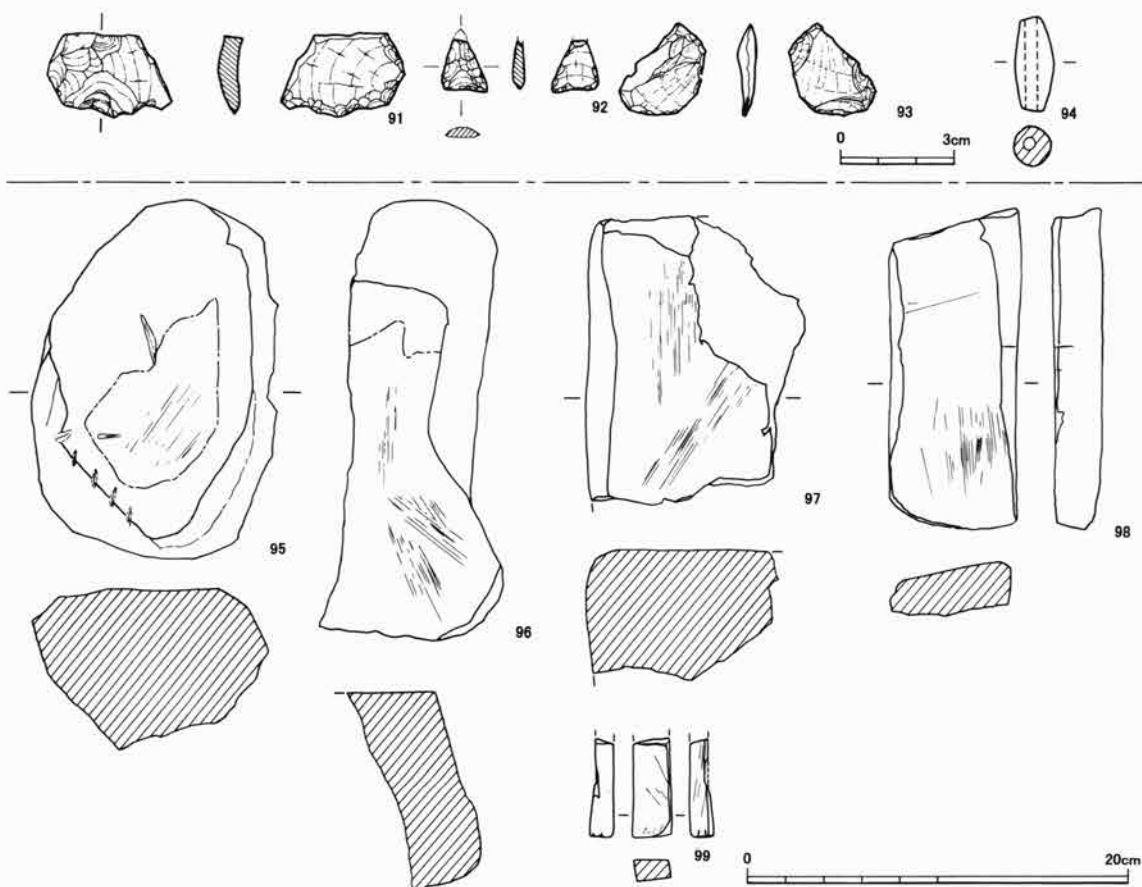
第23図 その他の遺構出土土器実測図

79・80：S K70407 81～87：S K70413 88・89：S B70411ピット 90：立会調査ピット4
立会調査(第23図90)

90は立会調査によるピット4出土の緑釉陶器碗である。口径13.2cm、器高4.5cmを測る。外面にわずかに黄緑色の釉が残存する。須恵質の焼きである。器表面は肌色の斑点が見られる。

(2) 石器・土製品・石製品(第24図91～99)

溝S D70401から砥石、剥片石器、その他混入遺物として石鏃1点、スクレイパー、土錘が出土している。砥石は大型の置き砥石が大半であるが、撥型をした小型の手持ち砥石も出土してい



第24図 S D70401出土石器・土製品・石製品実測図

る。剥片石器91は長さ3.3cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmを測る。横長の剥片を利用し、機能面を両面から調整剥離している。石材は青緑色のチャート製である。火打ち石としての使用が考えられる^(注4)。92は小型の剥片鏃である。先端部が破損している。長さ0.9cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmを測る。基部は浅い挟りがある。脚部は左右非対称である。脚部を再調整した可能性もある。石材はサヌカイトである。93はスクレイパーである。長さ2.4cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmを測る。石材はサヌカイトである。94は土錘である。長さ2.5cm、幅1cm、厚さ1.1cmを測る。形状は紡錘形である。色調は赤褐色をなす。95～98は置き砥石である。95は長さ18.7cm、幅13cm、厚さ8.3cmを測る。手前の稜部分に鉄製品で付けられたと思われる4つのキズが見られる。96は長さ23cm、幅9.8cm、厚さ10.7cmを測る。97は長さ15.6cm、幅11.6cm、厚さ6.8cmを測る。96・97は全体に破損が顕著である。これら3点の石材は砂岩である。98は長さ16.9cm、幅6.7cm、厚さ2.4cmを測る。ほぼ完形に近い。石材は暗灰色の粘板岩である。99は手持ち砥石である。先端部が欠損している。長さ5.4cm、幅2.1cm、厚さ1.3cmを測る。石材は泥岩である。

(3) 瓦(第25図100～104)

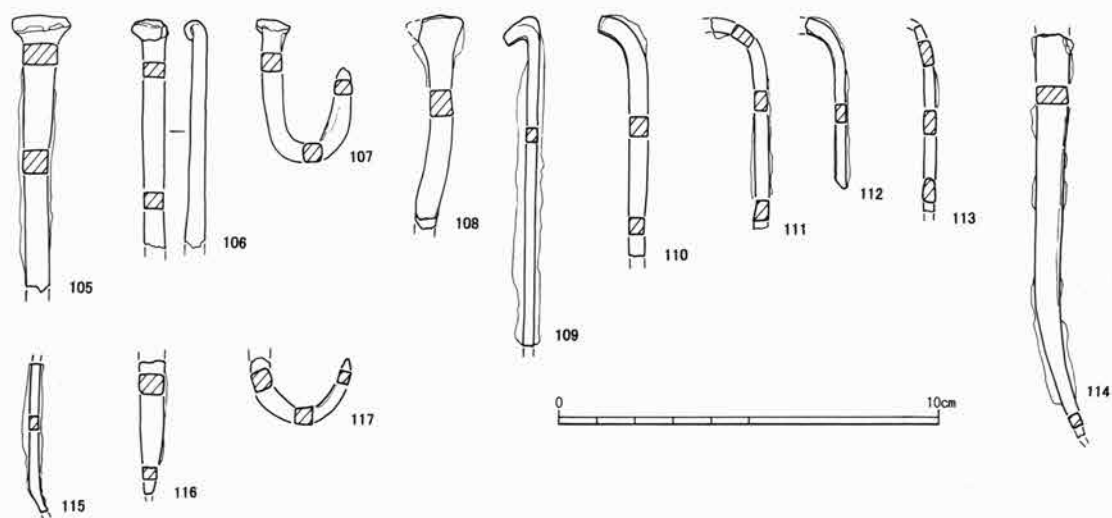
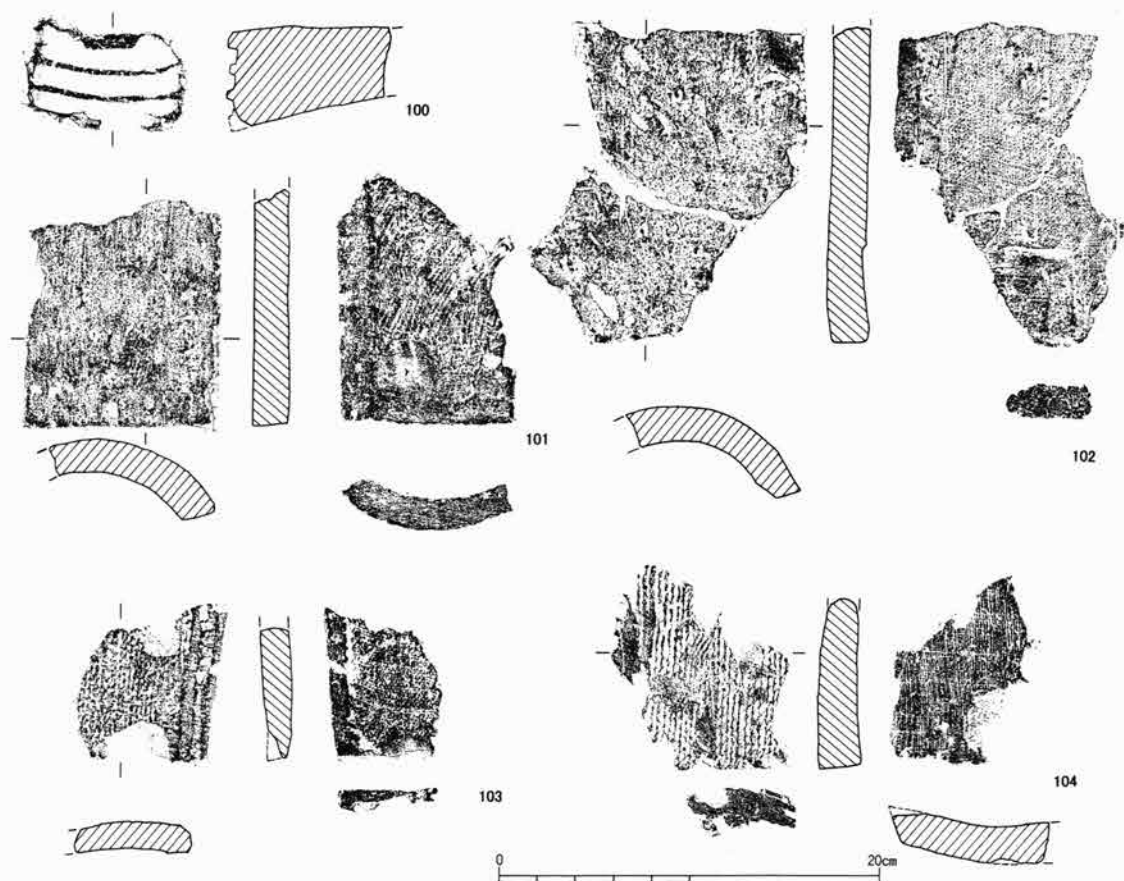
軒平瓦、平瓦、丸瓦がある。100は土坑S K70402から出土した重郭文軒平瓦である。須恵質の焼きである。長さは8.2cmを測る。瓦当部分の幅は6cmを測る。色調は青灰色をなす。胎土は精良である。101～104はS D70401から出土した。101は丸瓦である。長さ12.2cm、厚さ2.1cmを測る。胎土中には砂粒を含んでいる。凸面は縄目タタキをナデ消している。焼成はやや不良であり、色調は暗茶褐色をなす。102は丸瓦である。長さは16.4cm、厚さは2.1cmを測る。凸面はナデ調整である。胎土には砂粒、雲母、石英を含んでいる。色調は凸面・凹面とも淡灰色をなす。103は平瓦である。長さ6.5cm、厚さ1.5cmを測る。凸面は縄タタキが施されている。胎土は精良で焼成は良好である。色調は淡灰色をなす。104は平瓦である。長さ7.8cm、厚さ2.3cmを測る。凸面には縄原体の幅が約3mmを測るための縄タタキを施している。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰色をなす。

(4) 鉄製品(第25図105～117)

溝S D70401から出土している鉄釘である。頭部の形状から3分類される。A類(105～107)は頭部を鍛造し、扁平に広げ、端部を巻き込むものである。B類(108)は頭部のみ逆三角形に鍛造拡張したものである。C類(109～113)は頭部を折り曲げたものである。105は長さ7.2cm、幅0.9cm、厚さ0.6cmを測る。106は長さ6cm、幅0.6cm、厚さ0.4cmを測る。107は長さ6.9cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmを測る。108は長さ5.6cm、幅0.7cm、厚さ0.6cmを測る。109は長さ8.6cm、幅0.4cm、厚さ0.3cmを測る。110は長さ6.3cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmを測る。111は長さ5.6cm、幅0.6cm、厚さ0.4cmを測る。112は長さ4.5cm、幅0.5cm、厚さ0.3cmを測る。113は長さ4.9cm、幅0.7cm、厚さ0.3cmを測る。114は長さ10.5cm、幅0.9cm、厚さ0.4cmを測る。115～117は頭部の形状は不明である。

(5) 鍛冶関連遺物(図版第16)

炉壁、湯玉、鍛造剥片、砂鉄、フイゴ羽口片が出土している。釘などの鉄製品を調査地周辺で



第25図 瓦・鉄釘実測図

製作していた可能性がある。

(6)種子

溝S D70401から出土した種子については種実分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。分析試料は35mmフィルムケースに3本分あり、水洗選別により抽出し、水漬け状態で分析依頼し

付表 種実同定結果

種類名	S D 70401 3区		
	8・12層	14層	15層
スモモ	1	—	—
モモ	破1	—	—
ウメ	—	破5	—
カキ	—	破	—
イネ	多	22	18
オオムギ	30	35	13
コムギ	25	18	12
ムギ類	60	25	16
タデ属	1	—	—
マメ類	多	9	12
不明堅果類	—	破	—
不明炭化物	破	破	破
材	破	破	破

多：100個体以上の検出

破：破片(同定可能なものは個数を入れた)

5. ま と め

調査地の推定条坊は右京二条四坊三町(新条坊：右京三条四坊一町)にあたり、西三坊大路と南一条大路(新条坊：二条大路)交差点付近にあたる。しかし、今回の調査では長岡京期の遺物もわずかに出土しているが、当該期の遺構については確認できなかった。今後の調査課題である。

今回の調査において、中央調査区で遺構のまとまりを確認することができた。時期は12世紀を中心とするものと考えられるが、遺物には10世紀のものも若干含まれる。今回は多量の中世土器資料が出土した。また、鍛冶関連の遺構は確認されなかったが、溝状遺構の埋土中にはそれを裏付ける遺物が出土したため、この近辺が小鍛冶施設(工房)を含む生活域の一部であったことを示唆している。京都府教育委員会の調査分を含めても今回復原できる建物跡は多数のピットを検出したにもかかわらず、4棟の復原にとどまった。いずれの調査区も東側は攪乱により削平されており、すでに遺構が破壊されている部分も見られた。

調査地では、掘立柱建物跡が方位に沿わず、溝状遺構の振れに合わせて設けられている点に特徴が見られる。この点については、調査地が限定され推測の域を出ないが、この溝状遺構が自然地形に左右された自然流路、すなわち、現在南調査区のすぐ南側を流れる坂川の旧支流で、調査地周辺の台地上を蛇行して南方へ流れていたことに規制された居住域の可能性がある。溝状遺構の埋土から、水量は多くなく、淀んだ状況であったと推測される。出土遺物で特徴的であるのは、S D 70401から鍛造剝片・湯玉・砂鉄・フイゴ羽口片といった小鍛冶関連遺物が出土し、製品として鉄釘も見られることである。この釘が、近辺の工房で生産されたものである確証はないが、小鍛冶を行う集団の居住域の存在は裏付けられた。今後調査地周辺での成果が待たれるところである。

今回の調査地を含めて井ノ内遺跡周辺で平安から鎌倉時代にかけての遺構が確認されている^(注5)。また、付近には荘園の存在したことも文献から知ることができる^(注6)。それらの成果を総合的に判断

た。分析について、詳細は資料に譲るが乾燥させたものを実体顕微鏡観察している。

同定結果として、スモモ・モモ・ウメ・カキ・イネ・オオムギ・コムギ・マメ類など穀類の栽培植物が検出された。大きく果実類と穀類に分類されるが、個体数ではイネ・ムギ類・マメといった穀類が圧倒している。いずれにせよ、食糧として備蓄されていたものが火災などの原因により炭化し、溝内に廃棄されたものと判断されるようである。詳細は付表を参照されたい。なお、分析結果資料および試料については当調査研究センターにおいて保管している。

して中世集落の復原を考える必要がある。

(柴 暁彦)

- 注1 今回京都府教育委員会の立会調査の資料を調査担当者の有井広幸氏のご好意により掲載した。
- 注2 調査参加者 杉江貴宏・朴貴広・稲垣あや子・川村真由美・春日満子
- 注3 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995
- 注4 当調査研究センター主査調査員黒坪一樹の教示による。
- 注5 井ノ内遺跡周辺の平安～鎌倉時代の調査については以下のものがある。資料については(財)長岡京市埋蔵文化財センターの小田桐淳・中島皆夫氏にご教授いただいた。
- 小田桐淳 『長岡京跡右京第668次 井ノ内遺跡発掘調査報告書』(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第21集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 2001
- (財)向日市埋蔵文化財センター『都城10』(『(財)向日市埋蔵文化財センター年報』平成9年度 向日市教育委員会) 1999
- 高橋美久二ほか 「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1979) 京都府教育委員会) 1979
- 奥村清一郎ほか「長岡京跡第27次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』(1980)第2分冊 京都府教育委員会) 1980
- 引原茂治・橋本清一「長岡京跡昭和55年度発掘調査概要 2 右京第44次調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1981)第1分冊 京都府教育委員会) 1981
- 山口博「長岡京跡右京第78次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第3冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 山口博ほか「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第9冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 原秀樹「右京第98・123次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1983
- 木村泰彦・續伸一郎「右京第112次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1983
- 原秀樹「右京第98・123次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1983
- 長谷川達「長岡京跡右京第153次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第15冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 小田桐淳「右京第167次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1985
- 小田桐淳「右京第201次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1987
- 山本輝雄「右京第214次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1987
- 岩崎誠「右京第230次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和61年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1988
- 山本輝雄・岩崎誠「右京第235次調査略報・右京第253次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター

- 年報』昭和61年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1988
- 小田桐淳「右京第236次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和61年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1988
- 石尾政信「長岡京跡右京第240次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 石尾政信「長岡京跡右京第251・255次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第30冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 山本輝雄・岩崎誠「右京第235次調査略報・右京第253次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和61年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1988
- 岩松保「長岡京跡右京第277・306次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 木村泰彦「右京第315次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1990
- 木村泰彦「右京第320次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1990
- 原秀樹「右京第372次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成3年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1993
- 中島皆夫「右京第399次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成4年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1994
- 岩崎誠「右京第444次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成5年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1995
- 岩崎誠「右京第522次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成8年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1998
- 岩崎誠「右京第538次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成8年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1998
- 中島皆夫「右京第553次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成8年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1998
- 岩崎誠「右京第558次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成8年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1998
- 小田桐淳「右京第605次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成10年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 2000
- 竹井治雄「長岡京跡右京第615次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第89冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 竹井治雄「長岡京跡右京第615次」(『京都府埋蔵文化財情報』第71号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999年

注6 調査地付近には中世の荘園である富坂荘・長岡荘が文献上知られている。

向日市史編さん委員会 『向日市史』上巻 向日市 1983

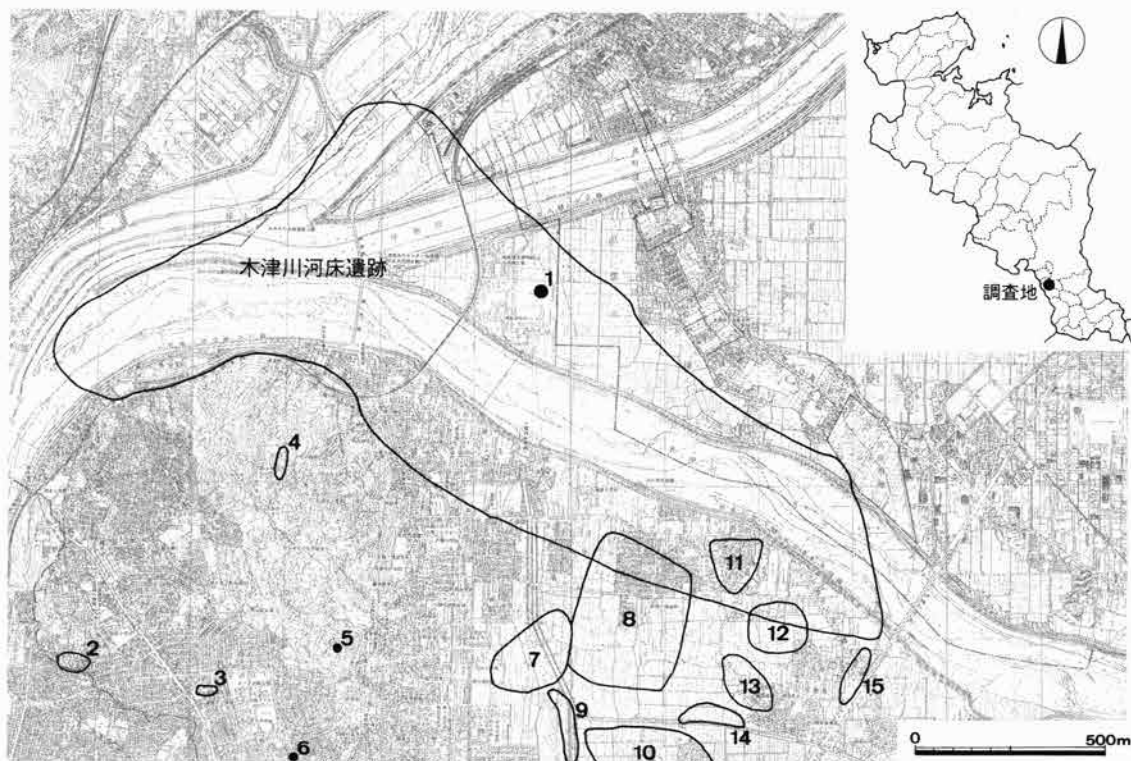
3. きづがわかしょう 木津川河床遺跡第14次発掘調査概要

1. はじめに

木津川河床遺跡は、八幡市から京都市域にまたがる弥生時代から中世にかけての集落跡である。調査対象地は宇治川・桂川・木津川の3河川が合流する地点の南東側で、淀川と木津川に挟まれる八幡市八幡字源野に所在する。

木津川河床遺跡では、洛南浄化センターの建設に伴い、昭和58年度から発掘調査が行われており、今回の調査は第14次調査となる。昭和61年度および平成元年度の調査では、弥生時代後期および古墳時代後期の竪穴式住居跡や古代の土坑墓群、中世の掘立柱建物跡などが確認されている^(注1)。本調査地のすぐ南側を調査した平成3年度の調査では顕著な遺構は確認されておらず、伏見大地震(1596年)の痕跡が確認されたのみであった。

今回の調査は洛南浄化センター浄化水槽建設に伴う試掘調査であり、遺構・遺物の分布状況を把握し、本調査の要否ならびに規模などを判断するための資料を得ることを目的とした。現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克と調査第2課第1係調査員松尾史子が担当し



第26図 調査地および周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|--------------|----------|-----------|-----------|
| 1. 木津川河床遺跡 | 2. 平野山・稲葉東遺跡 | 3. 西山廃寺跡 | 4. 鳩ヶ峰経塚 | 5. 石不動古墳 |
| 6. 茶臼山古墳 | 7. 島遺跡 | 8. 川口扇遺跡 | 9. 舞台遺跡 | 10. 戸津遺跡 |
| 11. 川口環濠集落 | 12. 下奈良遺跡 | 13. 今里遺跡 | 14. 奥戸津遺跡 | 15. 出垣内遺跡 |

た。調査期間は平成13年6月8日から10月18日で、調査面積は約1,200m²である。本報告は松尾が執筆し、遺物の写真は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が撮影した。

現地調査・整理作業にあたっては調査補助員・整理員の方々、京都府教育委員会・京都府流域下水道建設事務所・八幡市教育委員会など関係諸機関の協力を得た。記して感謝したい。また、地震痕跡に
(注2)
関しては、独立行政法人産業技術総合研究所活断層研究センター主任研究員寒川旭氏にご指導いただいた。

なお、発掘調査に係る費用は京都府土木建築部が全額負担した。

2. 調査の概要

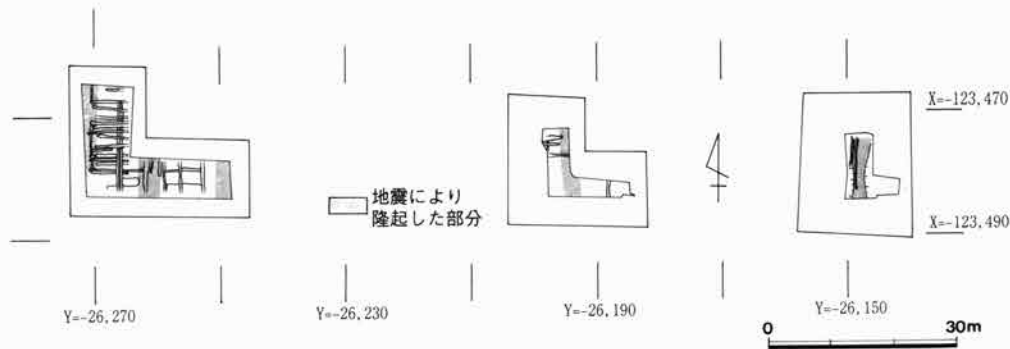
今回の調査は、調査対象地に3か所の調査区を設定して実施した。調査区は西から第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチとする。

調査地における基本層序は、次のとおりである。まず、地表下約1.5mまでは浄化センター建設に伴う造成土であった。造成土の下には旧耕作土があり、地表下約3mで中世の遺物包含層である暗灰色粘土に達した。暗灰色粘土の下には順に暗灰色粘質極細砂、暗灰色～青灰色細砂が堆積し、その下には木津川流域特有の真砂土である黄白色砂が厚く堆積している。

東西方向の断面を観察すると暗灰色粘土から下の層は約10m間隔で0.5mの高低差を持って波打っている状態になっている。これは下層の黄白色砂が地震により液状化したため起こったもので、噴砂も調査地のいたるところで見られる。標高は、高いところで約8.2m、低いところで約7.5mである。寒川氏によると、このように地面が隆起するような地震はM7か8ぐらいの大地震であり、該当する地震は1596年に起こった伏見大地震と考えられる。層位的にも矛盾はない。



第27図 トレンチ配置図



第28図 地震痕跡分布図

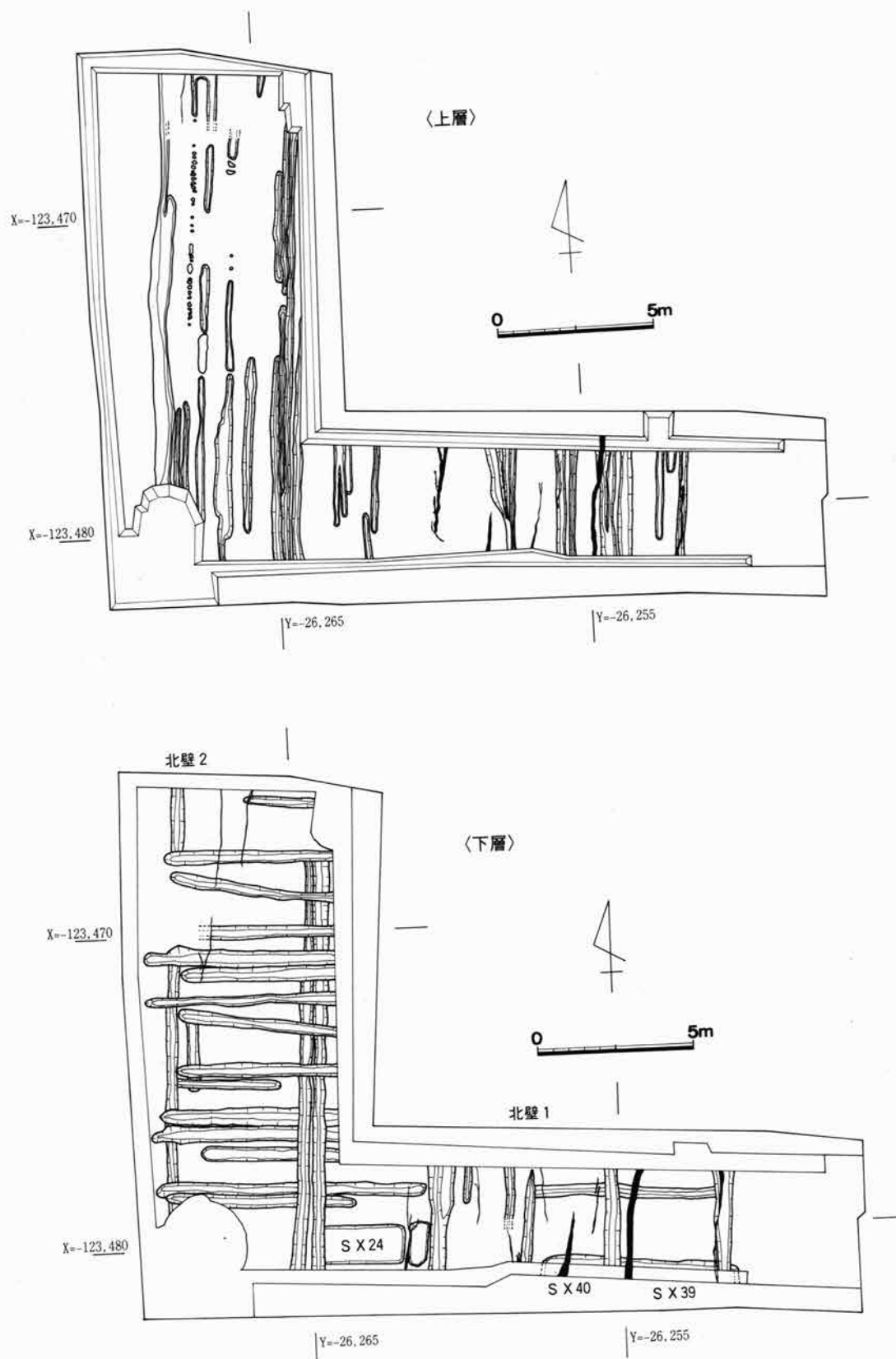
暗灰色粘土の上には地震後の整地層であると考えられる緑灰色砂質土が厚く堆積しており、この層より上の層は水平堆積していることから地震の影響を受けていないことがわかる。

いずれの調査区においても遺構面は2面あり、遺構は暗灰色粘土上面と暗灰色粘質極細砂上面で検出した。報告の便宜上それぞれ上層・下層とする。出土遺物から上層は中世後半、下層は古代末から中世にかけての時期と考えられる。以下調査区ごとに概要を報告する。

(1) 検出遺構

第1 トレンチ 調査地の西端に「L」字形に設定したトレンチである。トレンチの西端・中央・東端は地震により地面が隆起しており、遺構は隆起した部分には希薄で、主に隆起した部分に挟まれた低いところで検出した。上層では南北方向の素掘り溝群を、下層では南北および東西方向の素掘り溝群と土坑3基を検出した。上層の素掘り溝は幅約0.1m、深さ約0.05～0.1mで、断面形は浅い「U」字形である。溝底には鋤先の跡がよく残っていた。下層の素掘り溝は幅約0.4m、深さ約0.3～0.4mで、断面形は「U」字形である。上層の溝よりも規模は大きい。下層の素掘り溝群からは少量ではあるが12・13世紀を中心とする遺物が出土した。東西方向の溝は隆起に沿って波打っていた。また、噴砂によって一部水平方向に引き裂かれている溝があった(図版第21-(5))。上層の遺構埋土は灰色砂質土、下層の遺構埋土は暗褐色粘土である。S X 24は長辺約3m、短辺約1.5mの平面プランが長方形の土坑である。S X 39・40はトレンチ南端で検出した。両者には切り合い関係があり、S X 39の方が新しい。S X 40は長辺約3m、短辺0.8m以上、S X 39は長辺約3.2m、短辺0.7m以上である。いずれも、さらに南に続くが、調査地外に及ぶため規模などは不明である。埋土の状況や平面プランからS X 24と同様の土坑と考えられる。これらの土坑は、切り合い関係により素掘り溝群より古いことが確実であるが、出土遺物が無く、^(注3)時期は不明である。

第2 トレンチ 調査地中央に「L」字形に設定したトレンチである。トレンチ西南部は浄化センター建設前の鉄塔の基礎により大きく攪乱を受けていた。トレンチ中央部西寄りには、地震により地面が隆起した部分にあたっており、地形はその隆起を挟んで東西両方向に低くなっていく。遺構は主に東側の低い部分で検出した。上層では東西・南北に延びる素掘り溝群を確認した。溝の幅は0.2～0.3m、深さは0.1m前後で、断面形は浅い「U」字形である。出土遺物から中世後半以降のものである。下層では上層と同じく東西および南北方向に伸びる素掘り溝を3本確認し



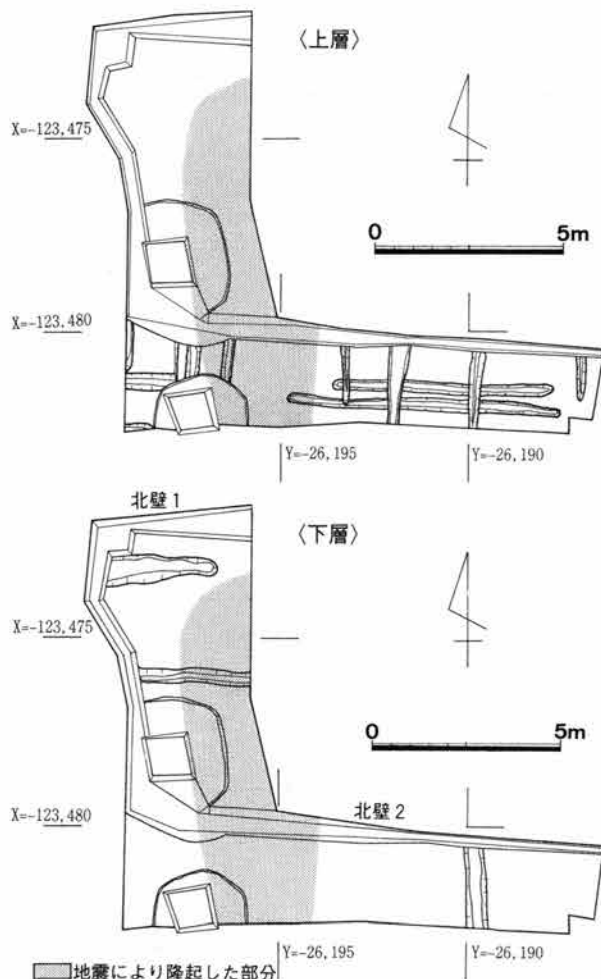
第29図 第1トレンチ平面図

た。下層の溝からの出土遺物はほとんどなかった。

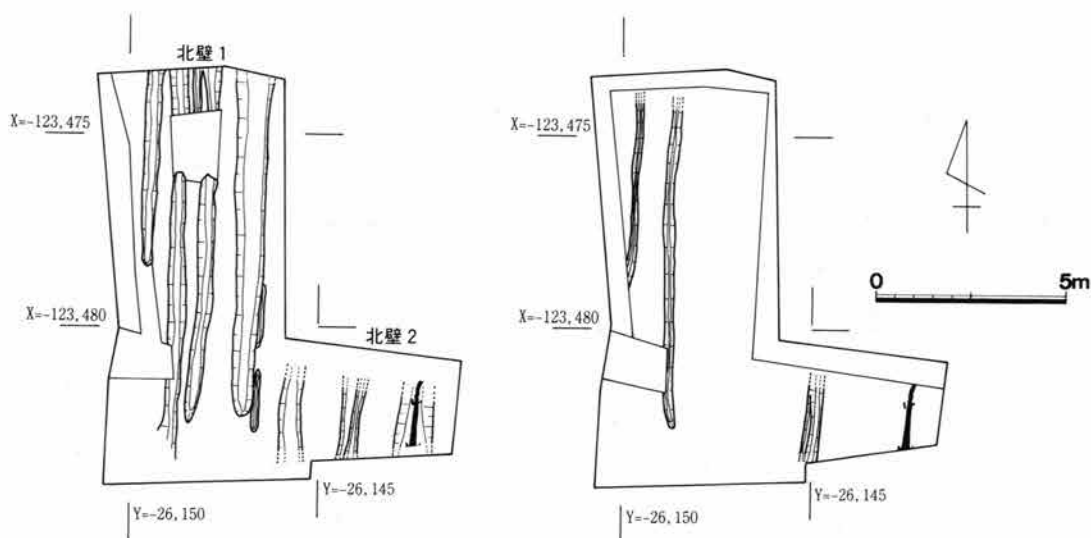
第3トレンチ 調査地東端に設定したトレンチである。トレンチ中央に地震による隆起が南北方向に走るため、遺構面は西と東に向かって低くなる。上層・下層ともに南北方向の素掘り溝群を検出した。上層の遺構の埋土は灰色砂質土、下層の遺構の埋土は暗褐色粘土である。素掘り溝は幅約0.2～0.5m、深さ約0.2～0.4mで、断面形は「U」字形である。遺物は土師器の破片が少量出土した程度である。また、下層の遺構面である暗灰色粘質極細砂上面の精査中に弥生土器片が数点出土した。

(2) 出土遺物(図版第22)

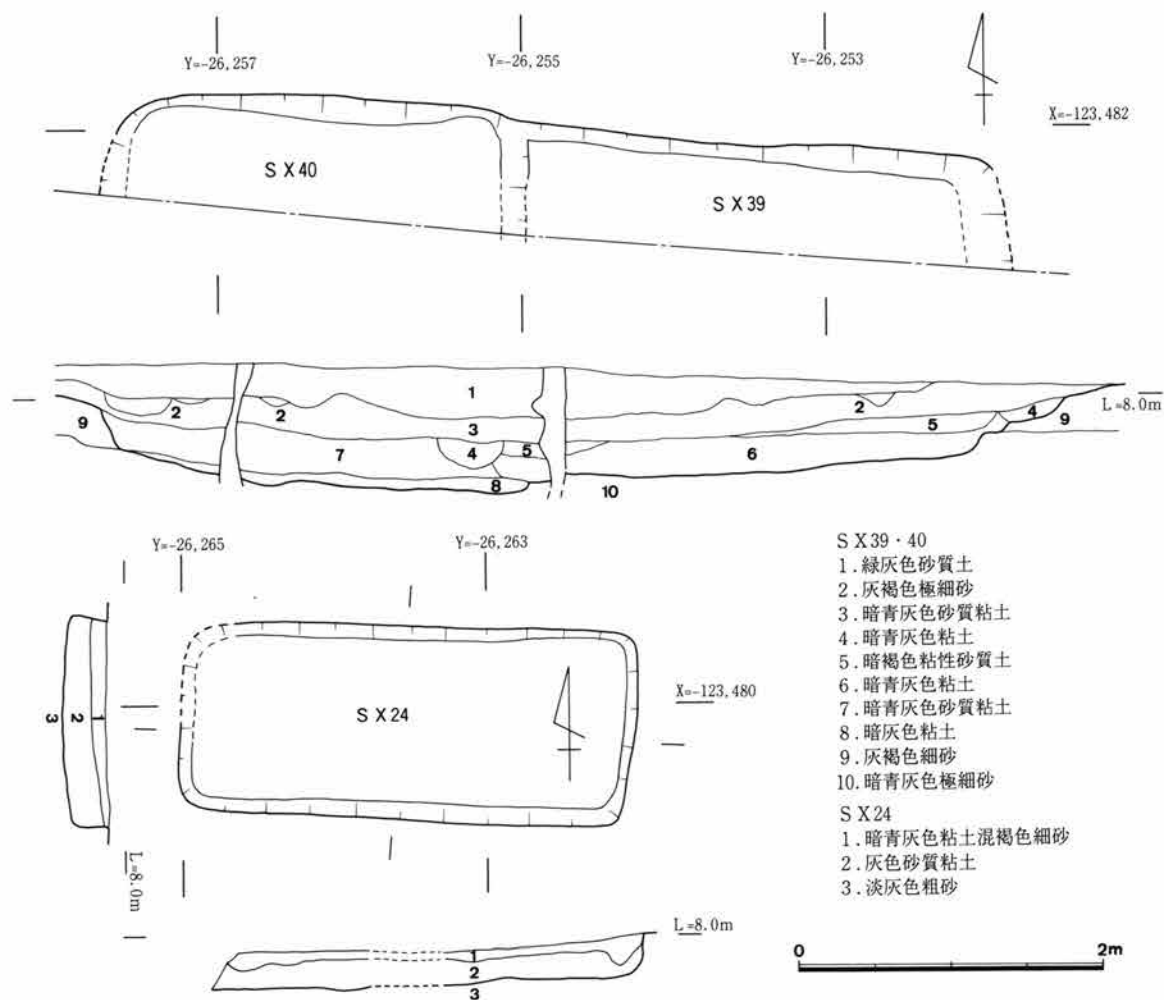
弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・瓦質土器・輸入陶磁器(青磁・白磁)・国産陶磁器(信楽・唐津・伊万里・京焼など)・砥石・瓦・焼土塊などの遺物が遺物整理箱で3箱分出土した。主体となるのは中世以降の遺物で、その他の時期の遺物はわずかである。遺構に伴う遺物は少なく、ほとんどが包含層から出土した。大半が破片資料で残存状況が良好でなかったため、本稿では写真を掲載し、図化は省略した。こ



第30図 第2トレンチ平面図



第31図 第3トレンチ平面図



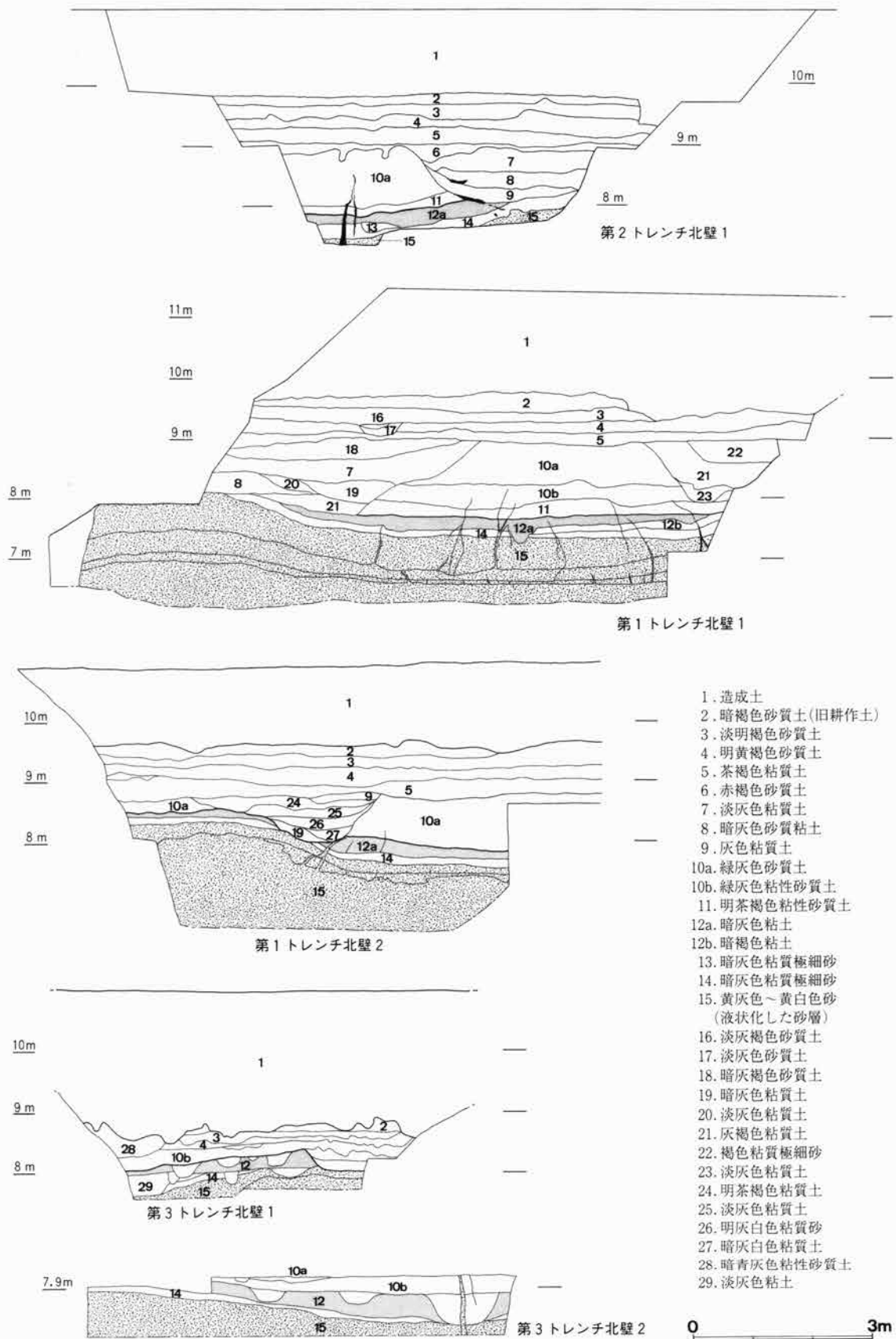
第32図 S X 24・39・40平・断面図

ここでは、まず、各層からの出土遺物について概観し、写真掲載遺物について報告する。

緑灰色砂質土からは、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・瓦質土器・輸入陶磁器(青磁・白磁)・国産陶磁器(信楽・唐津・伊万里)・瓦・焼土塊など古代から近世にいたる遺物が出土している。

暗灰色粘土からは、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器・瓦質土器・輸入陶磁器(青磁・白磁)・信楽焼・瓦など古代および中世の遺物が出土した。

弥生土器には壺(4)・甕(5)がある。4は第2トレンチの造成土から、5は第3トレンチの暗灰色粘質極細砂から出土した。土師器には杯・皿(3)・羽釜(2)などがある。3は第1トレンチ下層の溝から出土した。12世紀後半代の資料である。2は羽釜の鏝である。杯には平安時代前期の資料が含まれる。16は蕨手のような形態をしているが器種は不明である。須恵器には杯・壺・甕がある。緑釉陶器は碗底部(蛇の目高台)や口縁部片(7)が合計3点出土した。灰釉陶器は碗の口縁部片が1点出土した。瓦器には碗(1)・皿があり、楠葉型の12世紀後半から13世紀前半のものが出土している。瓦質土器にはすり鉢・羽釜がある。青磁は同安窯系および龍泉窯系の碗が12点出土しており、龍泉窯系の碗(I-5類碗)が多い。8は第2トレンチの暗灰色粘土から出土した。白磁には12世紀および13世紀代の碗や皿・壺が12点出土した(10~14)。また、写真には掲載



第33図 第1～第3トレンチ土層断面図

していないが青白磁の合子片がある。信楽焼にはすり鉢(18)・壺(19)などがある。17の伊万里焼は第1トレンチの緑灰色砂質土から出土した。15は、砂目唐津の皿である。

以上のことから緑灰色砂質土は伏見大地震より後の土層であると考えられ、上層の遺構の時期は15世紀から16世紀で、伏見大地震が下限になると考えられる。下層の遺構は、12・13世紀を中心とする時期と考えられる。

3. ま と め

今回の調査では、中世の素掘り溝群を確認し、調査地一帯が中世には耕作地として利用されていたことが明らかになった。今回確認した素掘り溝群は、南北または東西の方向をとる。このような素掘り溝群は条里制との関連で捉えられることが多く、今回の場合は久世郡条里を意識したものである可能性が考えられる。

なお、古墳時代以前の遺構が検出されなかったことから、これまでの調査で確認されていた弥生時代および古墳時代の集落は、この一帯までは及んでいなかったと考えられる。

また、今回の調査地ではどの調査区でも伏見大地震による地面の隆起が確認され、地震考古学に良好な資料を提供することとなった。隆起は、10～15m間隔で分布しており、当時の地震の規模を物語っている。伏見大地震の震源地は淀の付近と推定されており、震源地に近いところでどのような地形の変化が起こるのか知ることのできる資料でもある。

(松尾史子)

注1 岩松保「木津川河床遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第30冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

竹井治雄「木津川河床遺跡平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

小池寛「木津川河床遺跡平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注2 現地調査および整理事業に参加していただいた方は以下の通りである(五十音順・敬称略)

井上あいこ・井上美由紀・織田達也・木藤洋介・金原寿江・西脇夏海・藤田尚久・山本茜・山本弥生
また、現地調査において京都府教育庁指導部文化財保護課森下衛氏・八幡市教育委員会八十島豊成氏にご教示をいただいた。

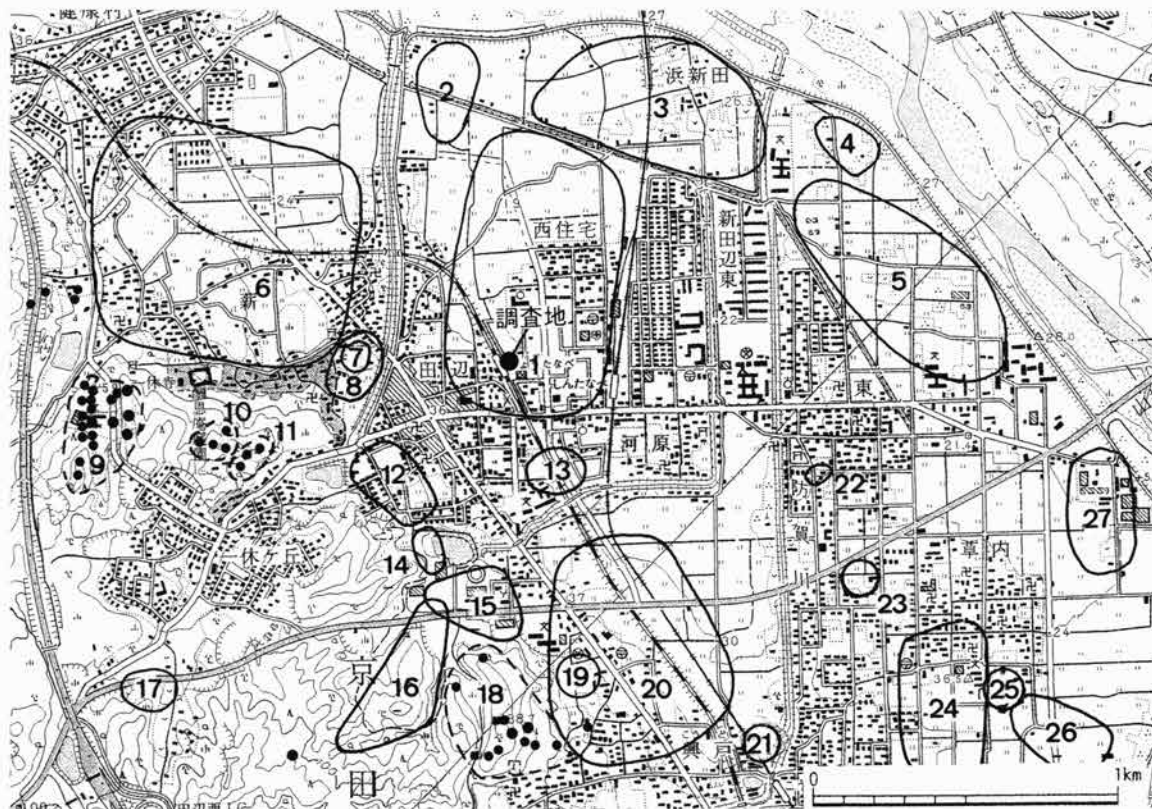
注3 第1トレンチで検出した土坑は、その形状や埋土の様相から昭和61年度および平成元年度調査で確認された土坑墓群と一連の遺構である可能性もあるのではないと思われる。

4. ^{いなば}稲葉遺跡第7次発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、平成11年度から実施している西日本旅客鉄道株式会社（ＪＲ西日本）の、片町線輸送改善計画による、京田辺駅改良工事に伴う発掘調査の３年度目にあたる。所在地は京田辺市田辺久戸である。現地調査の期間は平成13年５月９日から８月10日までで、調査面積は約910m²である。なお、調査に要した費用は、全額、西日本旅客鉄道株式会社が負担した。現地調査は、調査第２課調査第２係長伊野近富、主任調査員小池寛、調査員中川和哉が担当した。室内の遺物写真撮影については調査第１課資料係主任調査員田中彰が行った。

稲葉遺跡はＪＲ西日本京田辺駅西側から、近鉄新田辺駅西側にかけて東西約550m、南北約950mにわたって広がる縄文時代から近世までの複合遺跡（第34図）である。稲葉遺跡では6次にわたる発掘調査が実施されている。今回の調査地に隣接しては、第4・5・6次^{(注1) (注2) (注3)}の調査が行われてい



第34図 調査地位置図および周辺遺跡地図

- | | | | | | |
|----------|-----------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1. 稲葉遺跡 | 2. 西浜遺跡 | 3. 伝導林遺跡 | 4. 青上遺跡 | 5. 東神屋遺跡 | 6. 薪遺跡 |
| 7. 棚倉孫神社 | 8. 棚倉遺跡 | 9. 堀切古墳群 | 10. 天理山古墳群 | 11. 小欠古墳群 | 12. 尼ヶ池遺跡 |
| 13. 河原遺跡 | 14. 竹ノ脇遺跡 | 15. 田辺遺跡 | 16. 田辺城跡 | 17. 茂ヶ谷遺跡 | 18. 興戸古墳群 |
| 19. 興戸廃寺 | 20. 郡塚古墳 | 21. 下ノ河原遺跡 | 22. 鍵田遺跡 | 23. 五反田遺跡 | 24. 南垣内遺跡 |
| 25. 草路城跡 | 26. 宮ノ後遺跡 | 27. 橋折遺跡 | | | |

る(第35図)。近接するショッピングセンター建設に伴う第4次調査では、弥生時代前期と考えられる方形周溝墓が検出されている。また、調査区内から縄文時代晩期の凸帯文土器などが出土している。第5・6次調査は今回と同じ京田辺駅構内の調査である。第5次調査は調査区の大部分が、煉瓦積みのプラットホームのため遺構面が残っていなかった。しかし2区の一部に現在の地

割と方位が一致する耕作溝群が検出されている。第6次調査では1区で今回の南部トレンチで検出された方格地割の坪境にあたるSD1が、3・4区からは弥生時代前期の遺物・遺構が検出されている。

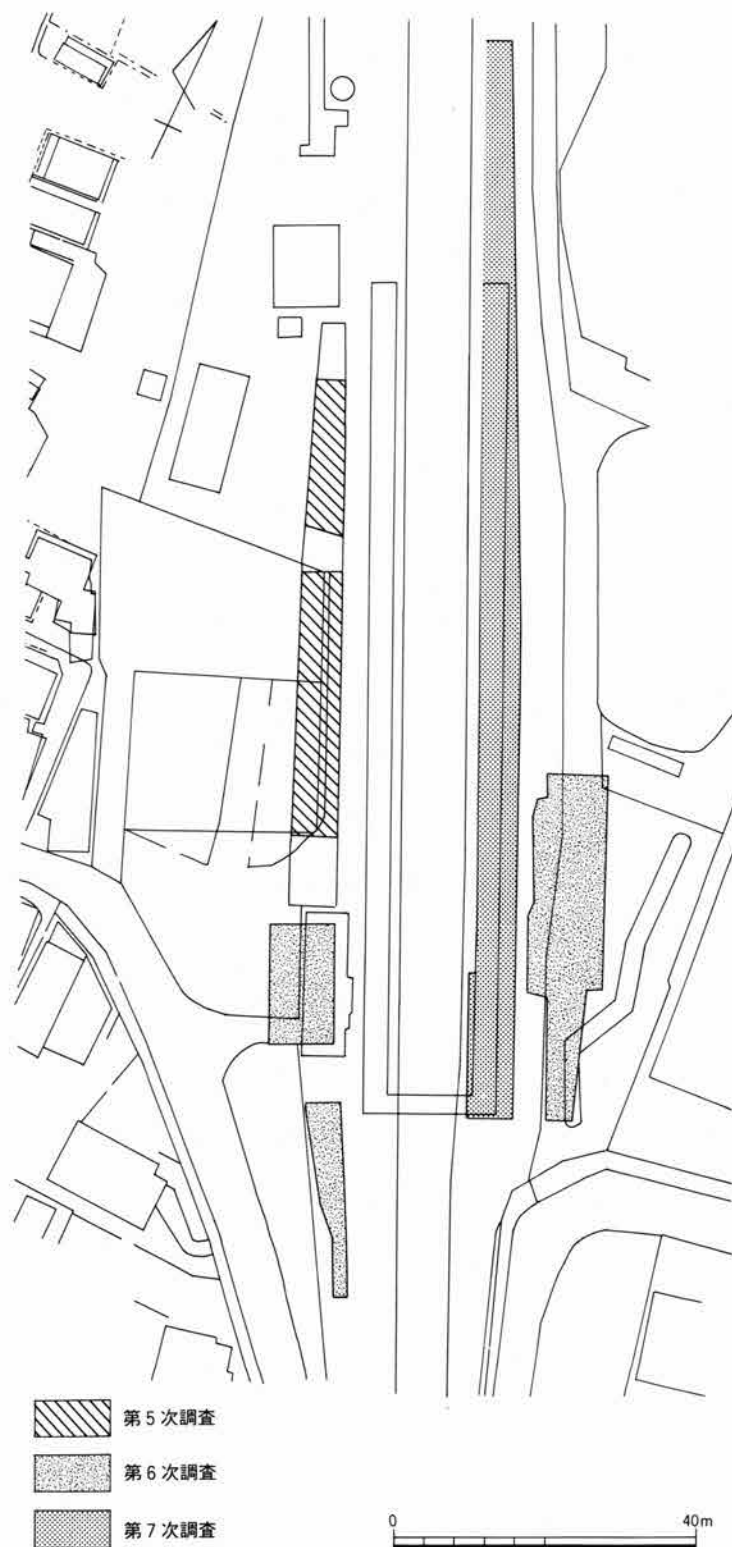
今年度の調査は、同時に行われている駅舎工事との関連で開発の急がれていた調査区南部を先行して実施した。6月21日に南部を引渡し、その後北部トレンチの調査に着手した。

なお調査にあたっては、西日本旅客鉄道株式会社、京田辺市教育委員会などの諸機関に御協力いただいた。また、38度を超える猛暑の中、調査に従事していただき^(注4)方々にお礼申し上げます。

2. 検出遺構

(1)南部トレンチ(第36図)

トレンチ全体での地層は変化にとみ、様相は一定ではなかったが、おおむね黄褐色の粘砂質土、あるいは砂質土の上面で遺構は検出された。トレンチ南端では、洪水性の堆積物と考えられるラミナ状の構造を持つ地層が遺構面上面を覆っていた。部分的ではあるが、遺構検出面上面に暗褐色または黒褐



第35図 調査区配置図

色の粘砂質土がレンズ状に堆積しており比較的多く遺物が含まれていた。遺物は弥生時代・古墳時代のものが混在しており遺構の残欠というよりは包含層の1種ととらえるべきものである。包含層からは石包丁2点、陶質土器片が出土している。

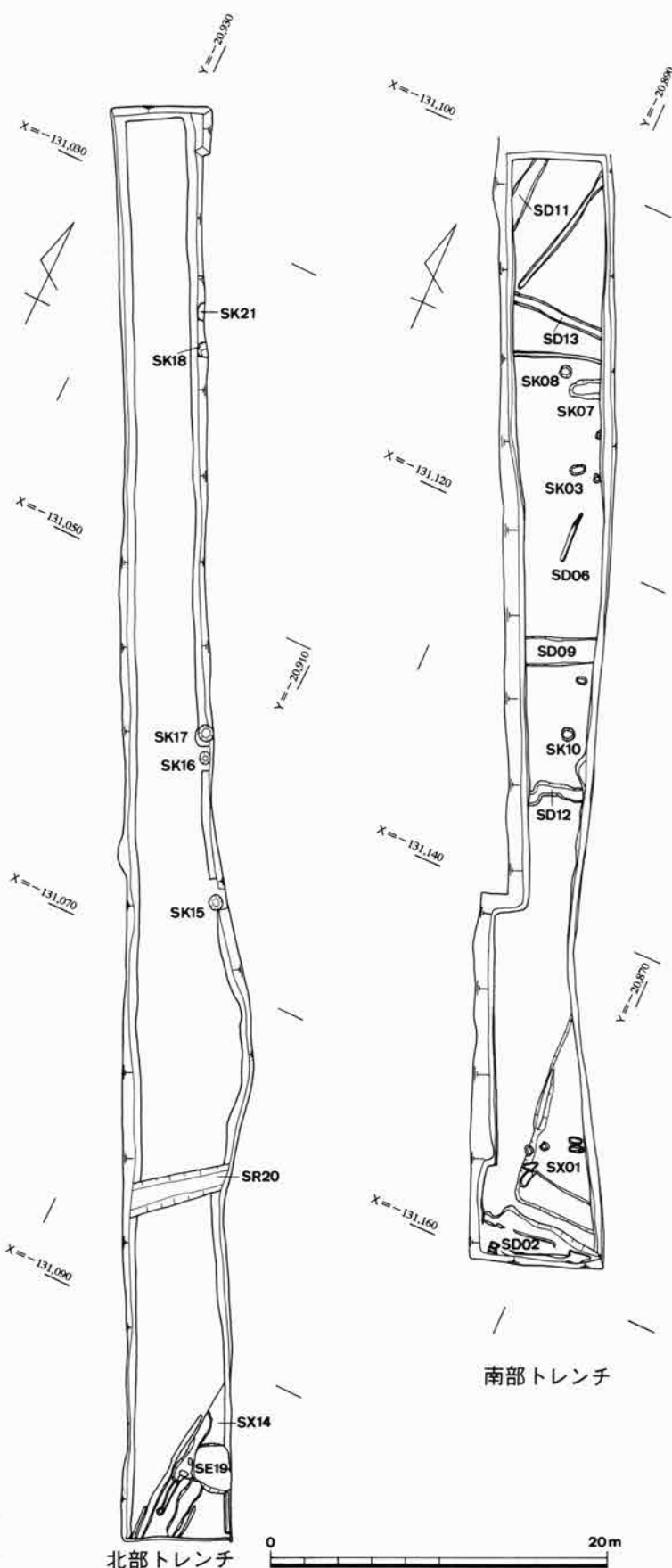
①弥生時代

SK07 東部はトレンチ外になるため全形は確定できないが、弥生時代の長楕円形を呈すると考えられる土坑である。検出した長径は約1.9m、短径約1.1m、検出面からの深さ約0.4mを測る。遺構内からは弥生時代前期と考えられる弥生土器、石器が出土している。隣接する第6次調査の4区においても同様にサヌカイト剥片を多く含む土坑が検出されている。

②古墳時代

SK03 平面形が長楕円形を呈する土坑である。長径約0.9m、短径約0.5m、検出面からの深さ0.15mを測る。出土遺物はなかったが、埋土の色調から古墳時代以前の遺構と考えられる。

SK08(第37図) 不定形な隅丸方形を呈する土坑で、一辺約0.7m、検出面からの深さ0.15mを測る。内部からは



第36図 遺構平面図

古墳時代前期の土師器甕、高杯、ミニチュア土器が出土している。

S K 10(第37図) 隅丸方形を呈する土坑で、内部からは底からやや浮いた状態で広葉樹製の板材が出土している。一辺約0.5m、検出面からの深さ0.25mを測る。細片の出土土器から古墳時代と考えられる。

S D 09(第37図) トレンチ中央で検出した南西から北東方向に向かう古墳時代の溝である。内部から土師器の高杯、甕が出土している。検出した長さ約4.5m、幅約1.5m、深さ約0.2mを測る。

③中・近世

S X 01 近世の耕作地の区画と考えられる方格地割の南西隅と考えられる落ち込みである。第6次調査の2区でもS X 01に続く同様の南北方向の段差が認められている。遺構の2辺の方位は真東西、南北の方向を向いており、条里地割を踏襲しているものと考えられる。出土遺物は18世紀のものが多く、染付碗、平瓦、丸瓦などが認められる。

S D 02 真東西方向を向く坪境にあたる溝である。トレンチ内では北岸のみしか検出できなかった。トレンチ西壁付近で溝に直行する方向に花崗岩の列石や、木材による護岸工事の跡も認められた。トレンチの南端で検出したが、湧水があり危険を伴うことから溝底部を確認することを断念した。第6次調査1区のS D 01とつながるものと考えられる。また調査地東側には溝の延長線上に現有の流路が認められる。出土遺物には17・18世紀の陶磁器類、瓦などがある。

S D 06 南北方向を向く溝である。埋土は砂混じりの礫層である。長さ約3m、幅約0.3m、深さ0.05mを測る。時期は出土遺物がなかったため不明であるが、方向から中世以後のものである可能性が高い。

S D 11 南部トレンチ北端で検出した南北方向の素掘り溝である。北端は北部トレンチへ伸びる。検出長約7m、幅約1.2m、深さ0.15mを測る。内部から出土した瓦器碗片から溝は中世のものと考えられる。

S D 13 S D 11と直交すると考えられる溝である。埋土の状況からS D 11と同時代のものと想定できる。検出長約5.6m、幅約0.6m、深さ約0.1mを測る。

S D 12 南西から北東方向に向かう時期不明の溝である。埋土は砂質土を主としており、西南部が蛇行することから自然流路である可能性が高い。検出長約3.8m、幅約0.8m、深さ約0.3mを測る。

(2)北部トレンチ(第36図)

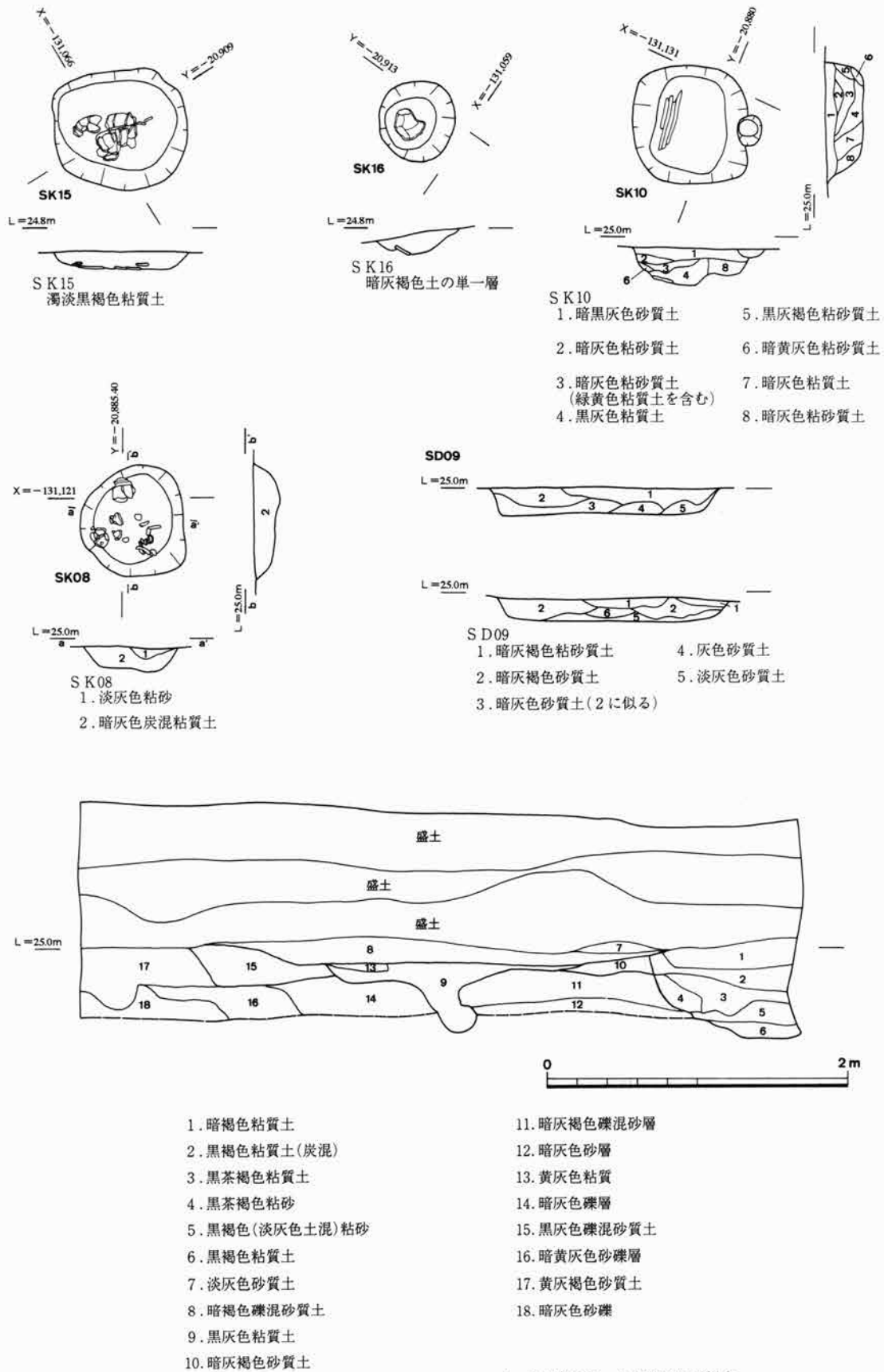
南部トレンチに比べ遺跡状況が複雑で、遺構検出面の地層の様相がトレンチの部分によって異なっていた。

①弥生時代

S K 21(第37図) S K 18同様に拡張区で検出した弥生時代前期の土坑である。検出面からの深さは約0.5mを測る。蓋形土器がほぼ完形で出土している。

②古墳時代

S K 15(第37図) 楕円形の土坑で長径約0.9m、短径約0.8m、検出面からの深さ約0.1mを測



第37図 個別遺構平・断面図および東壁土層断面図

る。土坑底面に接する状態で土師器甕が1個体出土している。口縁部が欠損しているため詳細な時期に関しては不明である。

S K 16(第37図) 円形の土坑で直径約0.5m、検出面からの深さ約0.2mを測る。土師質の土器が含まれる。

S K 17(第36図) 円形の土坑で直径約1.2m、検出面からの深さ約0.1mを測る。土師質の土器が含まれる。

S K 18(第37図) トレンチ東壁で、第37図の断面図に見える土層8の古墳時代の包含層が見られたことからトレンチを部分的に拡張した際に検出した遺構である。トレンチ内では1/4程度しか検出できなかったことから、規模は確定できなかった。検出面からの深さは約0.6mを測る。内部から高杯・壺・甕などが出土している。

③近世

S X 14 トレンチ南端で発見された「L」字状の落ち込みである。S X 01と同じ性格を持つ遺構と考えられる。導水施設の関連遺構と考えられる溝や土管、丸瓦などが隅部で検出されている。隅部には水溜めと考えられる円形の土坑S E 19が確認できた。遺構の埋土は洪水を起源とする砂質土によって充填されていた。

S R 20 地形の傾斜方向に沿った自然流路である。洪水性の堆積物による掘り込みと考えられ、S X 14を埋めた堆積物と同時期と考えられる。

3. 出土遺物

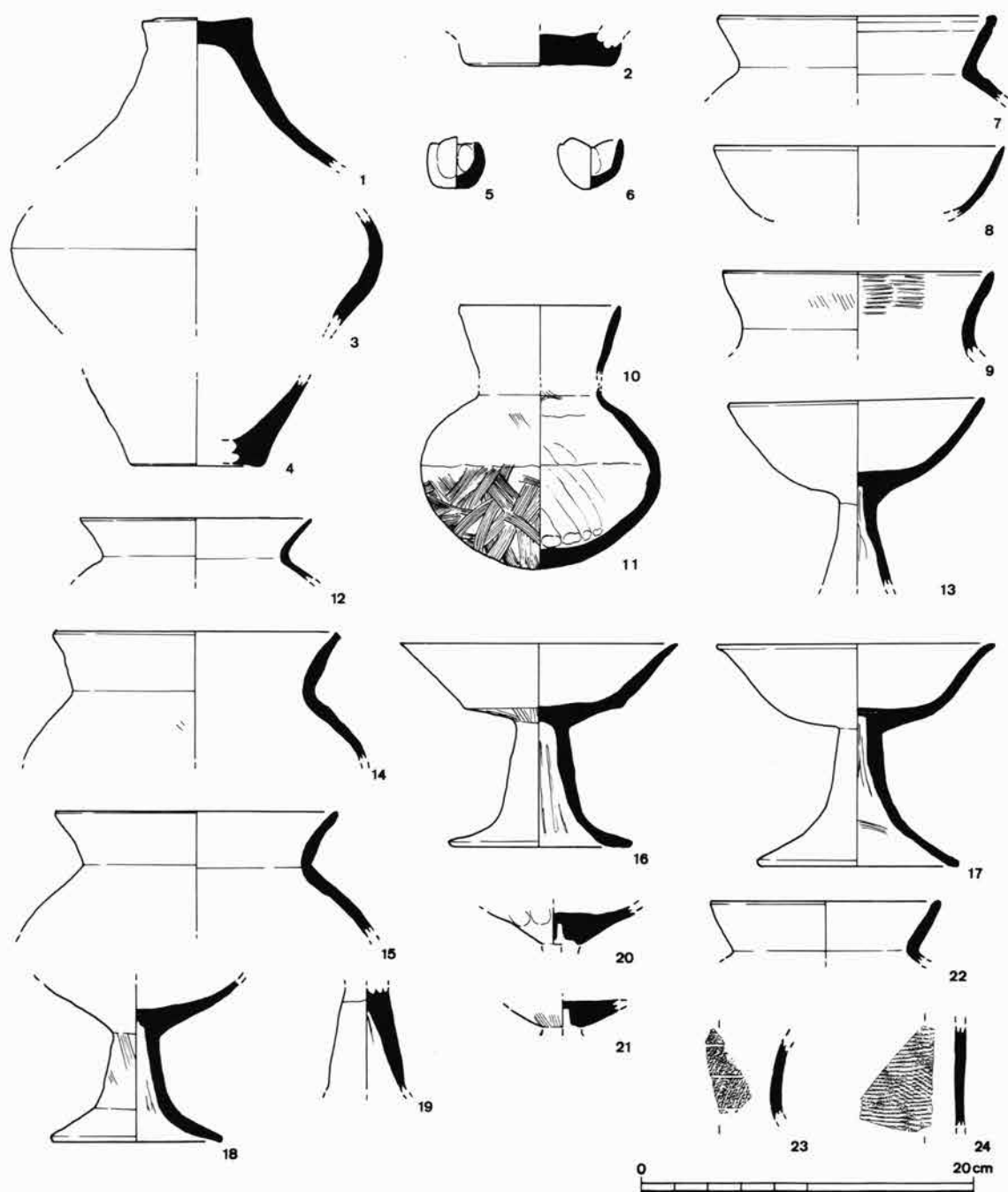
遺構ごとに図化可能な遺物が出土したものを中心に南北両トレンチを合わせて時期ごとに説明したい。

①弥生時代

S K 07 底部(第38図2)、サヌカイト製の石錐(第40図1)、石鏃(第40図2)、石鋸の微細剝片、2次加工のある剝片(第40図3)、剝片(第40・41図4～43)が多く出土している。第42図で示したように、324点のサヌカイト剝片・碎片が出土したが、その大半が0.5g以下の微細なもので、その中でも0.05g以下のものが主体を占める。石器の2次加工時に生じた碎片が捨てられたものと考えられる。

S K 21 第38図1は弥生土器の甕形土器の蓋である。

包含層 第38図3は壺の胴部である。内外面の調整は磨滅のため不明である。4は弥生時代の甕形土器の底部である。第41図44はサヌカイト製の石器で石鏃の未製品と考えられる。45はサヌカイト製の剝片である。46は紅簾片岩製の石鋸である。S K 07で碎片が発見されていることから弥生時代のものである可能性が高く、弥生時代前期の玉作りを傍証する資料である。47・48は粘板岩製の石包丁である。47は表裏両面がていねいに研磨されており穿孔が認められる。破損面のため全貌はわからないが、両面穿孔と考えられる。48は加工が粗く、素材時の表面が研磨されずに多く残されている。

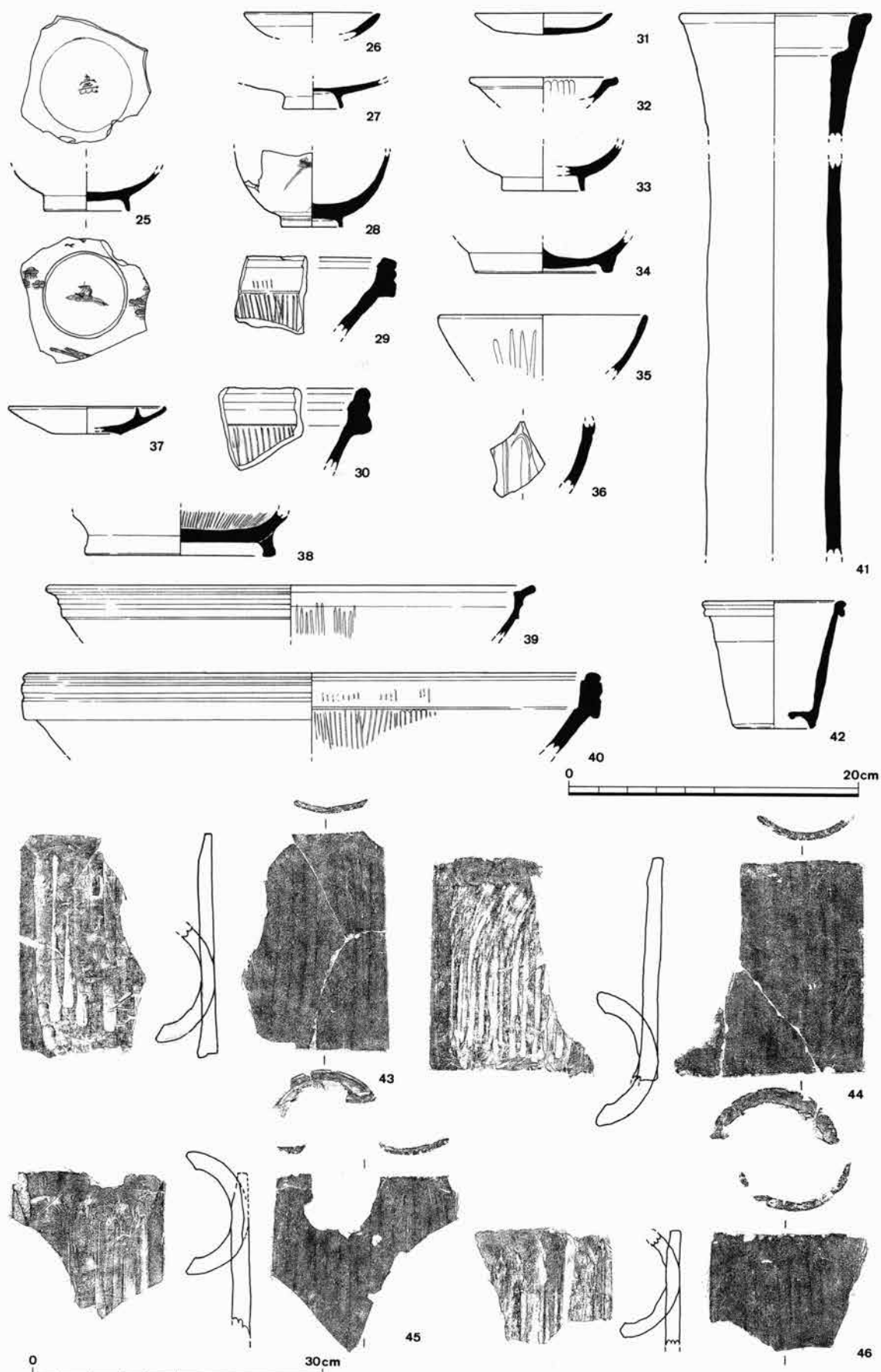


第38図 遺物実測図(1)

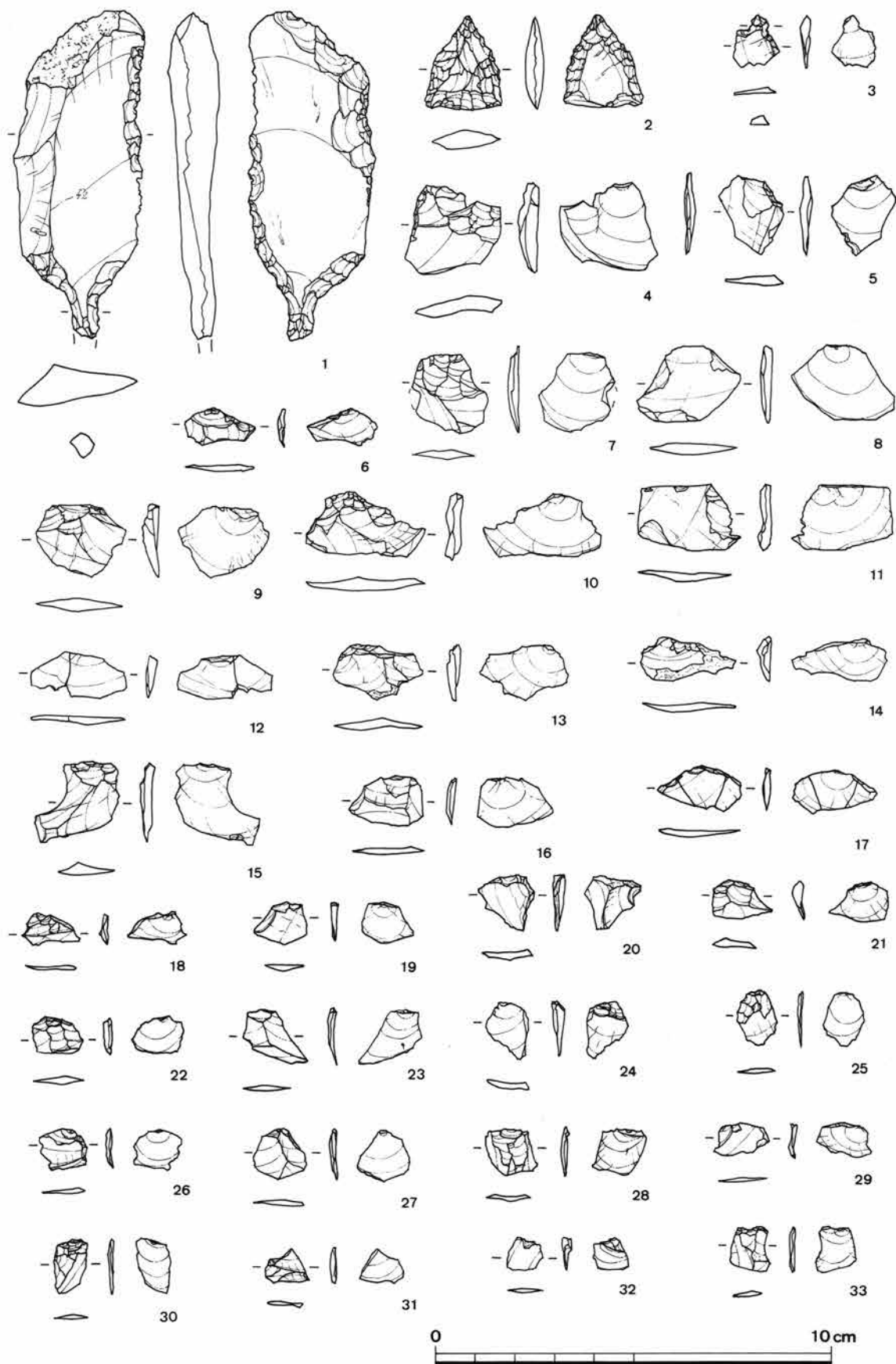
②古墳時代(第38図)

S K 08 5・6は手づくねによる土師器の土製品である。いずれも内外面ともに指頭圧痕が残
り、外面には黒斑が認められる。7は土師器の甕である。8は土師器の高杯の杯部と考えられる。

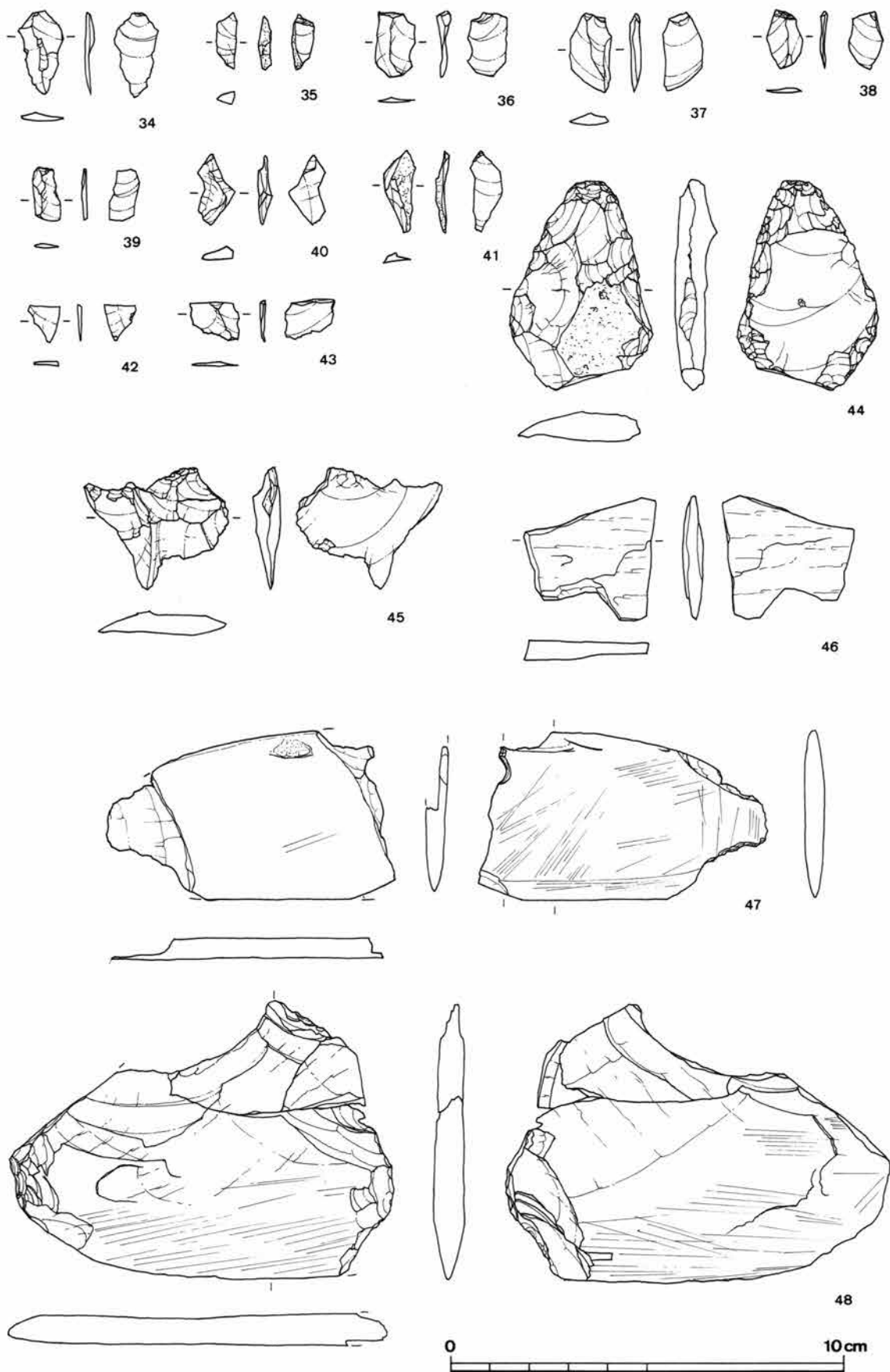
S K 18 この遺構から出土したものは残存率が高く、図化しえたもののうち高杯が5個体と多
くを占めている。10・11は壺で互いに接点はないが、同一個体と考えられる。体部外面の下半部
には、ハケ目が多く残されている。内面には指頭圧痕や指によってナデ上げた跡が認められる。
12・14・15は土師器の甕である。内外面の調整は器表面の剥落のため不明である。13・16～18は
土師器の高杯である。16の杯部に屈曲が見られるものが一点含まれる。また、16は脚部内面を削



第39図 遺物実測図(2)



第40図 S K07出土石器実測図



第41図 S K07出土石器(34~43)および包含層出土石器(44~48)実測図

ときの加工工具の跡が鮮明に残されている。脚部内面には13・18のように棒状のものが刺さった跡が見られるものと、見られないものが混在している。

S D 09 9は土師器の甕口縁部である。口縁部内面には粗いハケが残り、外面には縦方向のハケがナデの前に施されている。

包含層 20・21は土師器の高杯杯部である。22は土師器の甕口縁部である。23は須恵器の甕の胴部と考えられる。外面には縄蓆文が施された後、横方向の沈線が施されている。内面は当て具の痕跡がナデによって消されている。24もまた須恵器の甕の胴部と考えられる。外面には平行タタキが認められるが、内面は当て具の痕跡がナデによって消されている。

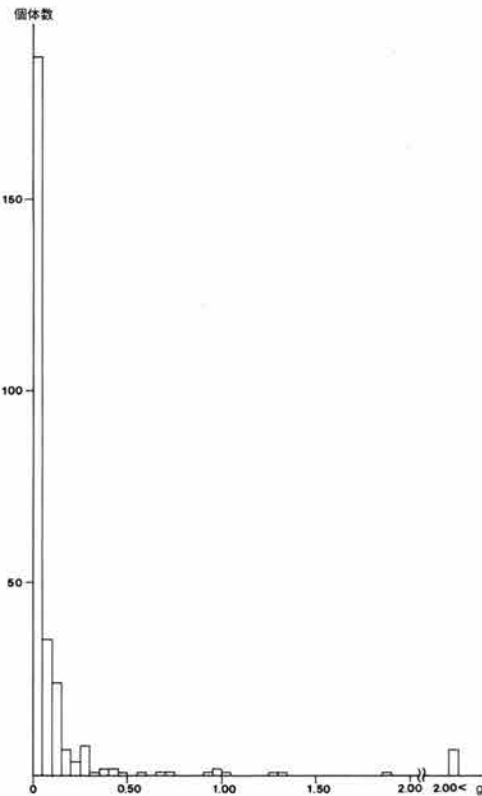
③中・近世(第39図)

S X 01 25・27・28は染付けである。26は土師器の皿である。

S X 14 41は瓦質の土管と考えられる。42は灰白色を呈する陶器の植木鉢である。43～46は丸瓦である。いずれも外面は縦方向のミガキが見られ、内面にはタタキの跡が深く残る。

S D 02 31は土師器皿である。32は瀬戸焼きの皿である。33は三田青磁と考えられる。34は白磁である。29・30は陶器播鉢である。

包含層 35・36はいずれも中国製の青磁碗である。37は灯明皿である。38～40は陶器播鉢でS X 01・S D 02を精査時に出土している。



第42図 S K 07出土石器類重量別数量グラフ

4. まとめ

今回の調査によって稲葉遺跡の地層形成過程が非常に複雑であることがわかった。そのため遺構面の認定が困難であった。弥生時代の遺物は弥生時代前期と考えられるものに限られ、弥生時代前期の遺構の広がりが追認された。また、石器製作時の廃棄土坑や、方形周溝墓(第4次調査)等がみられるが、出土遺物が少なく住居址などの遺構がみられないことから集落の縁辺部と考えられる。また、石鋸の存在から前期に玉造りが行われたことがわかる。

これまで希薄であった古墳時代中期の遺構もトレンチ内で検出できた。本来の包含層と考えられる地層が部分的にしか残されていないことから、地層の削平が激しいと考えられるが、出土遺物の量などから集落の中心からは外れた地域と考えられる。遺構はトレンチの東部に偏在していることから東に遺跡の中心がある可能性が指摘できる。

近世の地割遺構と、中世前期の溝の方位が一致することは、現存する条里遺構とされるものが

少なくとも中世までさかのぼることが確認できた。また、S D02では多くの近世遺物が出土していることから集落に近接していることが想定される。

今回の調査は稲葉遺跡の調査地周辺の状態を代表するような成果が認められた。今後、各時期の居住域の調査が進展することによって、いっそうこの地域の性格が明らかになっていくものと考えられる。

(中川和哉)

注1 鷹野一太郎『稲葉遺跡第4次発掘調査概報』京田辺市教育委員会 1998

注2 森島康雄「稲葉遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注3 森島康雄「稲葉遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第96冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

注4 調査補助員：船築紀子・山口早苗・山部聡美・古川匠・酒井由美・野崎史恵・羽生奈津子・北森さやか・兵頭千帆

整理員：森川敦子・井上聡・陸田初代・安田裕貴子・長井謙治

5. 井手寺跡・栢ノ木遺跡発掘調査概要

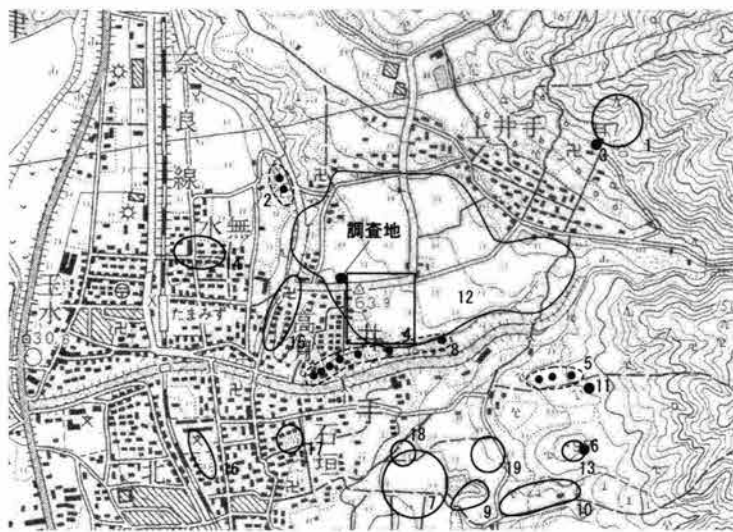
1. はじめに

井手寺は、井手町を西流する玉川の右岸、河岸段丘上面に位置しており、古くから円提寺(井提寺)跡と称された。山背大兄王が創建したのち橘諸兄が再建し、のちに氏寺としたと伝えられる。今日その法燈を受け継ぐ寺はなく、往時の寺域や伽藍配置など、当時の様相については不明のままであった。大正年間に井手町高月地区で1辺5m、高さ1mの土壇がみつき、花崗岩礎石のほか、軒瓦や海獣葡萄鏡、隆平永寶など、奈良時代から平安時代にかけての遺物が紹介された。

今回の発掘調査は、京都府の計画した府道と東井手線道路改良工事(歩道併設工事)に伴う事前の調査で、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は、綴喜郡井手町大字井手小字中溝他に位置している。調査期間は、平成13年7月12日から8月9日までである。今回の調査にあたっては、京都府田辺土木事務所をはじめ、京都府教育委員会、井手町教育委員会には、多大なご協力をいただいた。なお、調査および概報作成に係る費用は、すべて京都府土木建築部が負担した。

2. 調査の概要

府道の改良範囲を調査対象地とし、幅3m、全長50mの細長い調査区を設定した。調査区の西半では近代以降と考えられる厚さ1m足らずの耕作土と床土の交互層が堆積していた。調査区西端ではその直下に平安～鎌倉時代の包含層(土層5)が堆積していたが、以東では床土直下から著しく削平された奈良～平安時代の遺構面を検出したため、遺物包含層はみられなかった。近辺は、奈良時代の遺物散布地、栢ノ木遺跡としても周知されているが、今回はその関連する遺物を確認できなかった。遺構



第43図 調査地位置図(1/20,000)

- | | |
|-------------------|--------------|
| 1. 玉津岡神社文化財環境保全地区 | 2. 山縁古墳群 |
| 3. 宮の前古墳 | 4. 井手寺跡 |
| 5. 弥勒古墳群 | 6. 南開古墳 |
| 7. 塚本遺跡 | 8. 高月古墳群 |
| 9. 岡田池瓦窯 | 10. 南開遺跡 |
| 11. 北開遺跡(円墳か?) | 12. 栢ノ木遺跡 |
| 13. 橘諸兄墓伝説地 | 14~19. 遺物散布地 |



第44図 調査区位置図

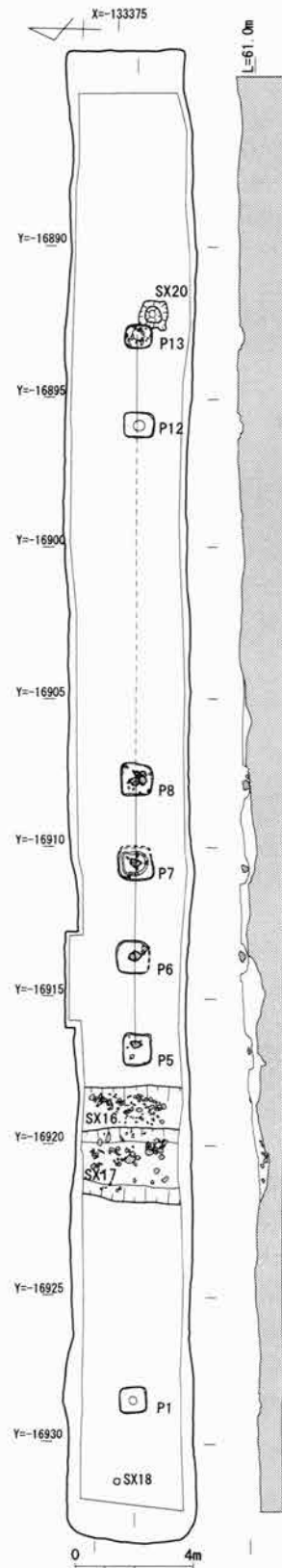
面は地表下30～90cmにある。掘立柱建物跡のものと思われる柱穴7基(P 1・5～8・12・13)(第48図)や、溝状の掘り込み(S X17)とその東側の円礫を多く含んだ堆積(S X16)、土坑(S X20)などを検出した。一列に並ぶ7基の柱穴は、一辺が90～120cm前後の方形掘形をもつもので、柱筋は、真東西方向よりも東側で北に1°足らず振れている。P 1およびP 12・13では柱痕跡を確認した。ともに地山と考えられる黄褐色の粘質土に穿たれていた。一方、P 5～8では、柱痕跡を確認できなかったが、掘形底部に、柱の礎盤として利用されたと考えられる人頭大の礫石を検出した。柱穴は、土層17・19・27などの積土に穿たれており、S X16以东には広範な地業が行われていたことが判明した(第46図柱筋土層断面図)。地業の積土土層30・31には、加工面をもつ凝灰岩(第50図18～23)が大量に廃棄されていた。また調査区東端近く、遺構面下土層17(積土)を穿つ土坑S X21(第47図)にも、平坦な加工面のある凝灰岩の破片(第50図1～17)が大量に廃棄されていた。調査区南壁の土層堆積状況からは、地業積土作業とともに、凝灰岩破片の廃棄が行われていたことを示唆する。

柱穴P 1は、85cm四方の方形の平面形である。掘形の遺存状況は悪く、検出面からの深さは20cmにも満たなかった。埋土は小礫を含まない灰白色の粘質土で、他の柱穴の礫混じりの埋土とは全く異なったものであった。ほぼ中央に直径25cmの淡黄白色粘質土の柱痕跡を検出した。柱心座標は、X=-133,376.1m、Y=-16,928.6mとなる。P 1の西側には、直径20cm、深さ10cmの小ピットS X18を検出した。拳大の円礫を埋置する。P 5は、東西110cm、南北95cm前後の長方形に近い平面形である。掘形は深さ20cm前後しか遺存していなか

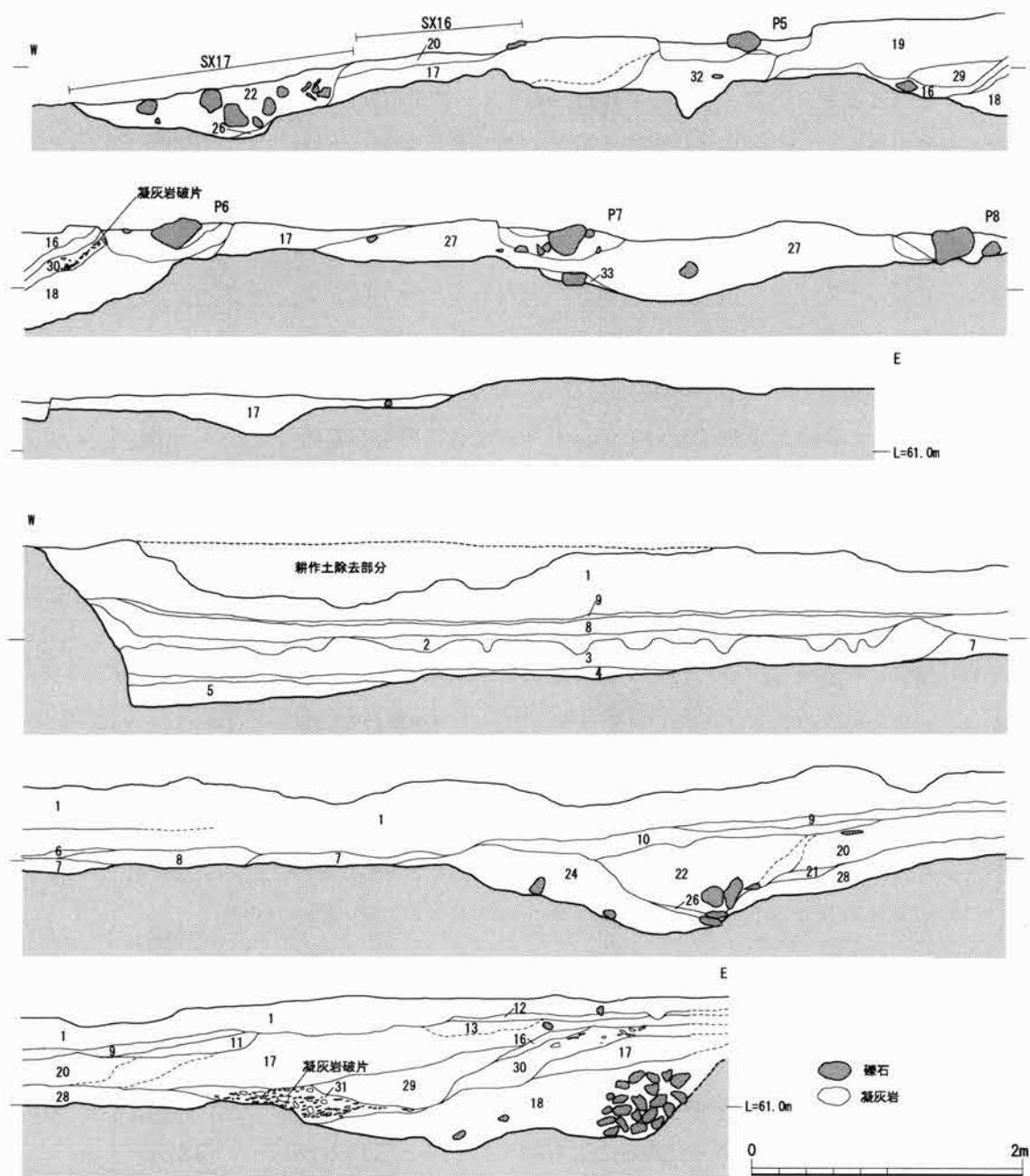
った。掘形のやや東側に、長さ35cm、幅25cm前後の平坦な石を埋置する。つづくP 6は、110cm四方の隅丸方形の平面形で、深さ25cm前後の遺存状況であった。P 5同様に、長さ45cm、幅35cmの礫石を置く。平坦面を上向きにし、埋置する際の掘形をもつ。礫石下の小礫を含んだ暗褐色の礫混じりの埋土には、下層積土土層30にみられた凝灰岩破片がわずかながら含まれている。P 7も115cm四方の隅丸方形の平面形に復原できる。底面は中央部分がさらに窪んだ掘形をもつ。やはり20cm内外しか遺存していないが、10cm足らずの小礫を多量に含んだ黄褐色の埋土の中央に、長さ40cm、幅25cm程度の亜角礫が平坦面を上に向けて埋置される。P 8も同様に、ほぼ105cm四方の方形の平面形で、掘形の深さは20cm程しか遺存していない。10cm足らずの小角礫を多く含ん

だ淡黄褐色粘質土の埋土の中央南東側に4つの亜角礫がその隅角を中心にあわせるようにして埋置される。掘形底面には、南北35cm、東西60cmほどの楕円形の浅い窪みがみられた。埋置の際の掘形と考えられる。P12は、他よりも規模が小さく、南北100cm、東西85cmのやや南北に長い長方形の平面形である。検出面では10cm内外の小礫が黄褐色砂質の埋土に多く含まれており、その中央に直径35cm程の黄褐色粘質土の柱痕跡を確認した。柱心座標は、 $X=-133,375.7\text{m}$ 、 $Y=-16,896.1\text{m}$ となる。P13もやや小さく南北90cm、東西75cmの長方形の平面形を呈している。5～15cm程度の拳大の亜角礫を多量に含んだ褐色砂質の埋土の中央に直径40cm前後の黄褐色粘質土の柱痕跡を確認した。遺存状況が悪く、抜き取り痕埋土の可能性もある。痕跡の中心座標は、 $X=-133,375.7\text{m}$ 、 $Y=-16,893.1\text{m}$ となる。P5の中央東側で検出した礫石とP8で検出した4つの礫石中央との間距離は、約8.85m、30尺となる。P5からP8の掘形中央付近で検出した人頭大の礫石を柱礎盤とし、礫石の中央を柱心と仮定すれば、ほぼ2.95m(10尺)間隔に柱が並ぶことになる。調査区西端で検出した柱穴P1柱心と、P5の礎盤と考えられる平坦な礫石中心との距離は11.89m、同様にP12柱心と、P8の礫石群中心との距離は11.80mで、ともにほぼ40尺となる。一列となる7基の柱穴が同一の尺度による間隔を共有することがわかる。P5の南側には、南北方向の掘り込み(SX17)が見られた。SX17掘形底面近くからは奈良時代の軒丸瓦瓦当片など(第51図5・10)が拳大の亜円礫とともに出土した。瓦当片は、遺存状態が悪いため明確ではないが、平城6134A型式と推測される。このSX17の東側掘形上部、円礫集中部分(SX16)では、拳大の円礫などとともに、奈良時代の平瓦片(第51図7～9)が出土した。円礫の出土位置が不均一であることや削平された上部積土分を考慮すれば、これらの円礫は積土内に廃棄されたものと考えられる。また、P13の南東側で、土坑SX20(第49図)を検出した。南北80cm、東西75cmの隅丸方形に近い平面形に復原することができる。P13の柱穴の掘削によって掘形北西隅の一部が破壊されており、P13以前に掘削、埋没したものであることがわかる。土師器把手付甕(第51図1)が1層上面から出土した。埋土には焼土や炭のブロックが含まれていたが、掘形床面に被熱の痕跡は認められなかった。埋土約5kgを水洗したが、金属加工などに関係するような微細遺物は回収できなかった。

今回出土した遺物は、奈良時代の把手付甕(第51図1)、瓦類(第51



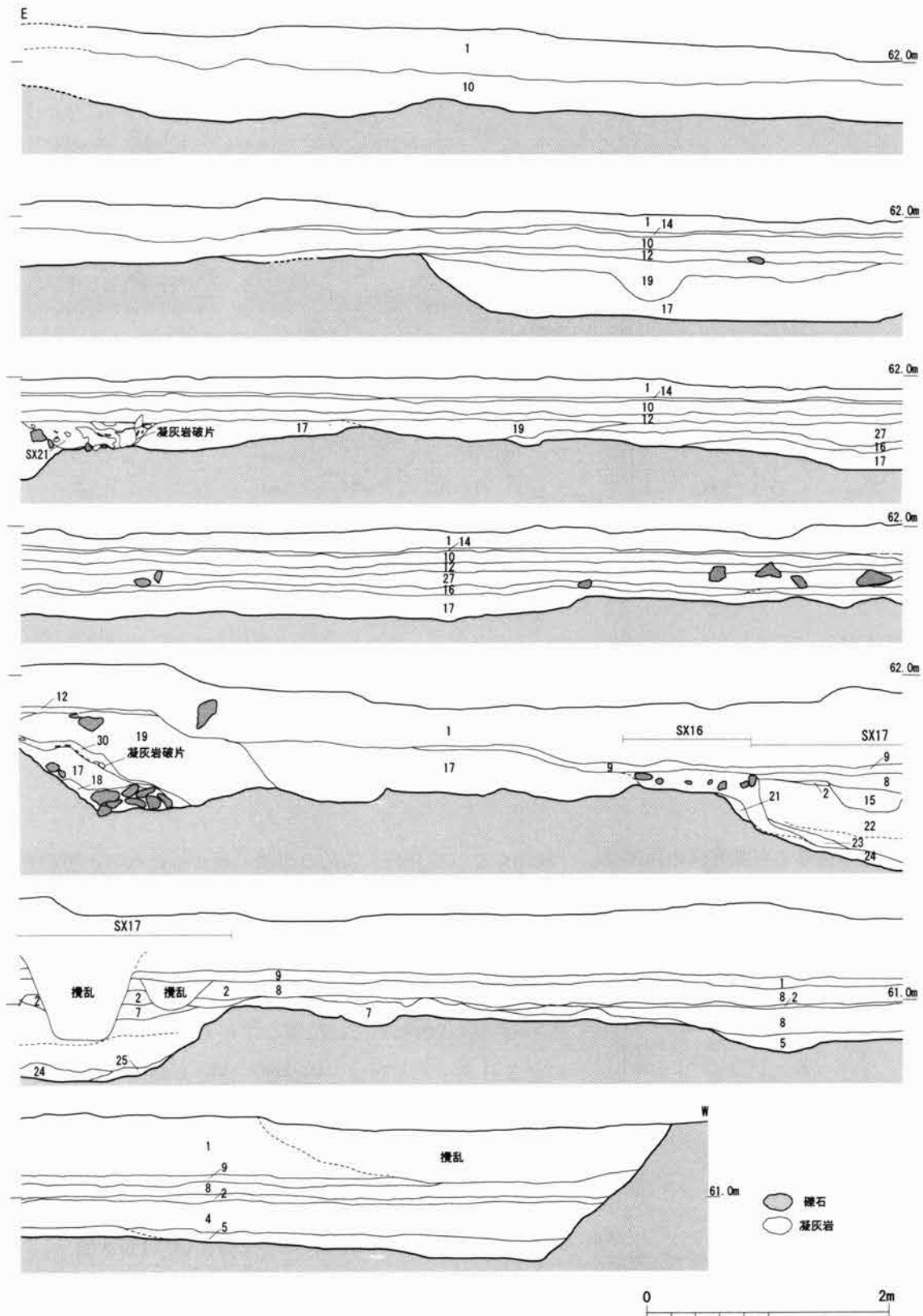
第45図 調査区実測図



第46図 柱筋土層断面図および調査区北壁土層断面図

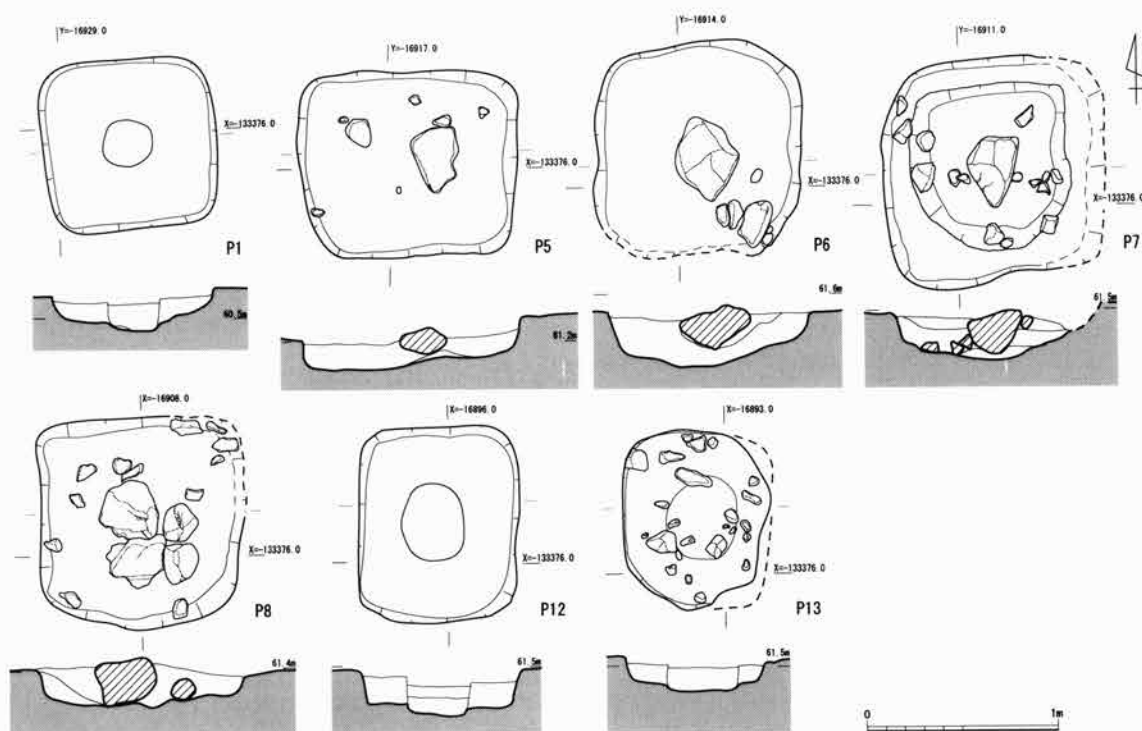
- | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 暗褐色粘質土 | 2. 明褐色砂質土 | 3. 淡灰褐色砂土 | 4. 淡明褐色砂礫土 | 5. 淡橙褐色砂質土 |
| 6. 橙褐色砂礫混土 | 7. 明黄褐色シルト | 8. 淡灰黄褐色砂礫土 | 9. 淡明黄褐色砂礫土 | 10. 淡灰褐色砂礫土 |
| 11. 淡灰褐色砂礫土 | 12. 明黄褐色砂礫土 | 13. 橙褐色礫混土 | 14. 淡黄褐色粘質土 | 15. 淡灰黄褐色砂礫土 |
| 16. 淡黄白色粘土 | 17. 淡橙褐色砂礫土 | 18. 礫土 | 19. 淡橙褐色粘質土 | 20. 橙褐色砂礫土 |
| 21. 暗褐色粘質土 | 22. 淡褐色砂質土 | 23. 暗褐色粘質土 | 24. 淡褐色粘質土 | 25. 灰黄褐色粘質土 |
| 26. 黒色炭土 | 27. 黄橙褐色砂礫土 | 28. 淡橙褐色砂質土 | 29. 暗褐色粘質土 | 30. 淡黄橙褐色砂礫土 |
| 31. 暗褐色粘質土 | 32. 暗橙褐色粘質土 | 33. 濁灰色粘土 | | |

図5・7～12)や平安時代の土師器甕、黒色土器甕の破片(第51図2・3)のほかに、先述した加工面のある凝灰岩の破片(第50図)がある。いわゆる二上層群下部の白色凝灰岩^(注4)である。17は、平坦な加工面に直線の線刻が施される。平坦な2面の加工面の交差角には90°前後(1～5・13・15・18～20・23・24)のものと、100～110°前後(6～12・14・16・21・22)のものに分かれる。S



第47図 調査区南壁土層断面図(土層名は第46図参照)

X21および土層30から出土したのものには、ともに両者が混在している。これらは地覆石や延石など、基壇外装石材の破片の可能性はある。このような凝灰岩石材が、今回検出された柱穴の掘削以前の地業積土から出土していることから、あるいは掘立柱建物の設置以前に壇上積基壇をもつ

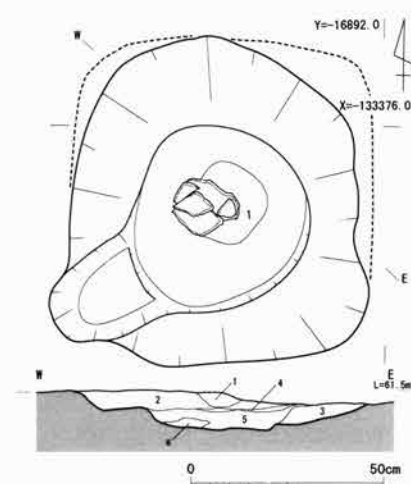


第48図 柱穴実測図

堂宇が付近に存在していた可能性が高いともいえる。検出した柱穴建物の時期を直接確定する遺物はみられなかったが、西側の包含層から出土する土器(第51図2・3)が平安時代のものであることから、奈良時代以降、平安時代前半ごろまでに建てられたと考えられる。

3. ま と め

現状の地形でも調査区の西端は、一段低くなっており、寺域の西限に近かったものと想定できる。調査区の南東側一帯の東高月地区や宮の前地区(通称「堂の上」)は、南側に西流する玉川から一段と高くなる河岸段丘の平坦面を形成しており、礎石

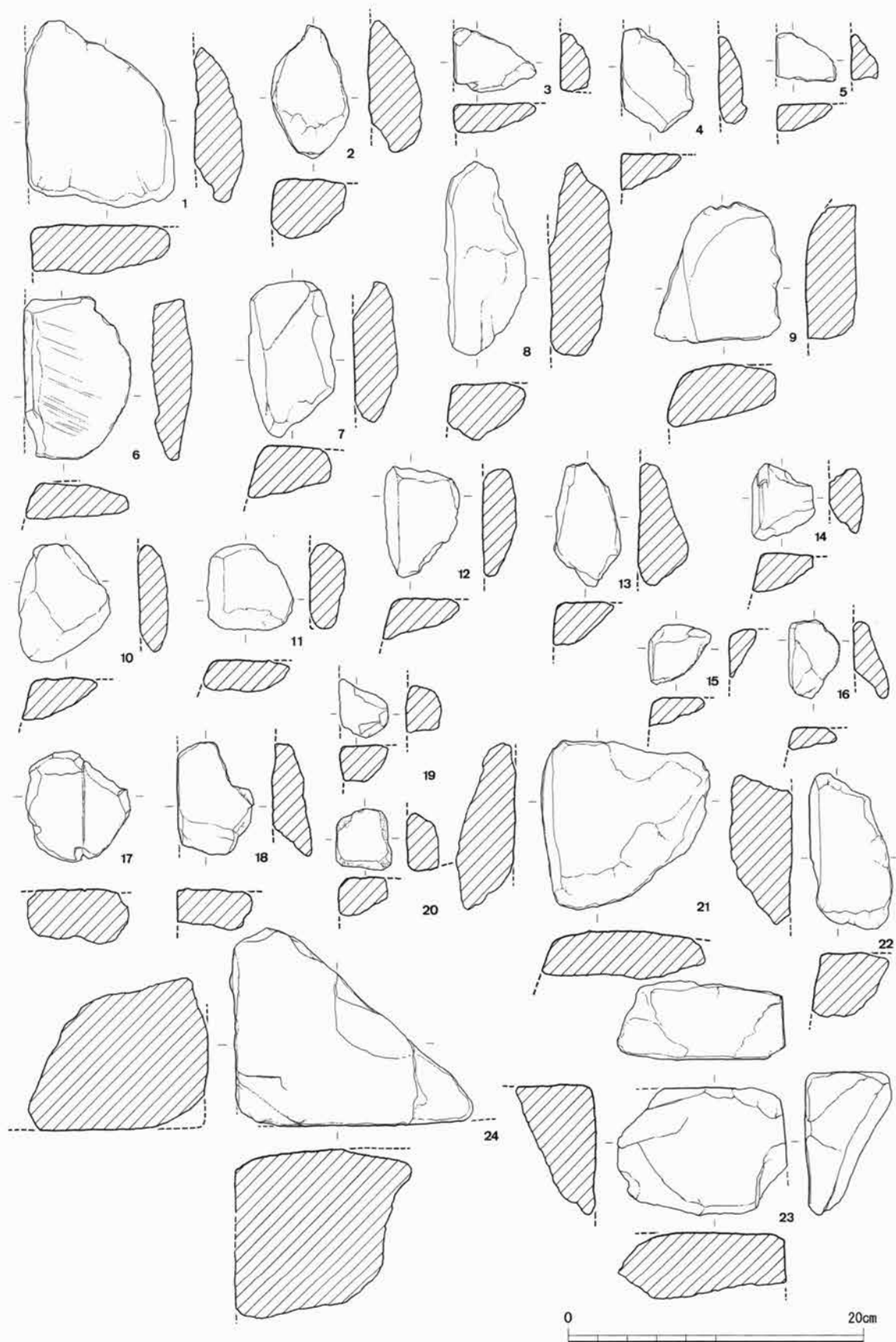


第49図 土坑S X 20実測図

1. 暗濁灰色粘土
2. 炭層
3. 橙褐色砂質土およびφ0.5cm前後の焼土ブロック
4. 明黄白色粘土
5. 赤橙褐色焼土
6. 濁淡褐色砂土

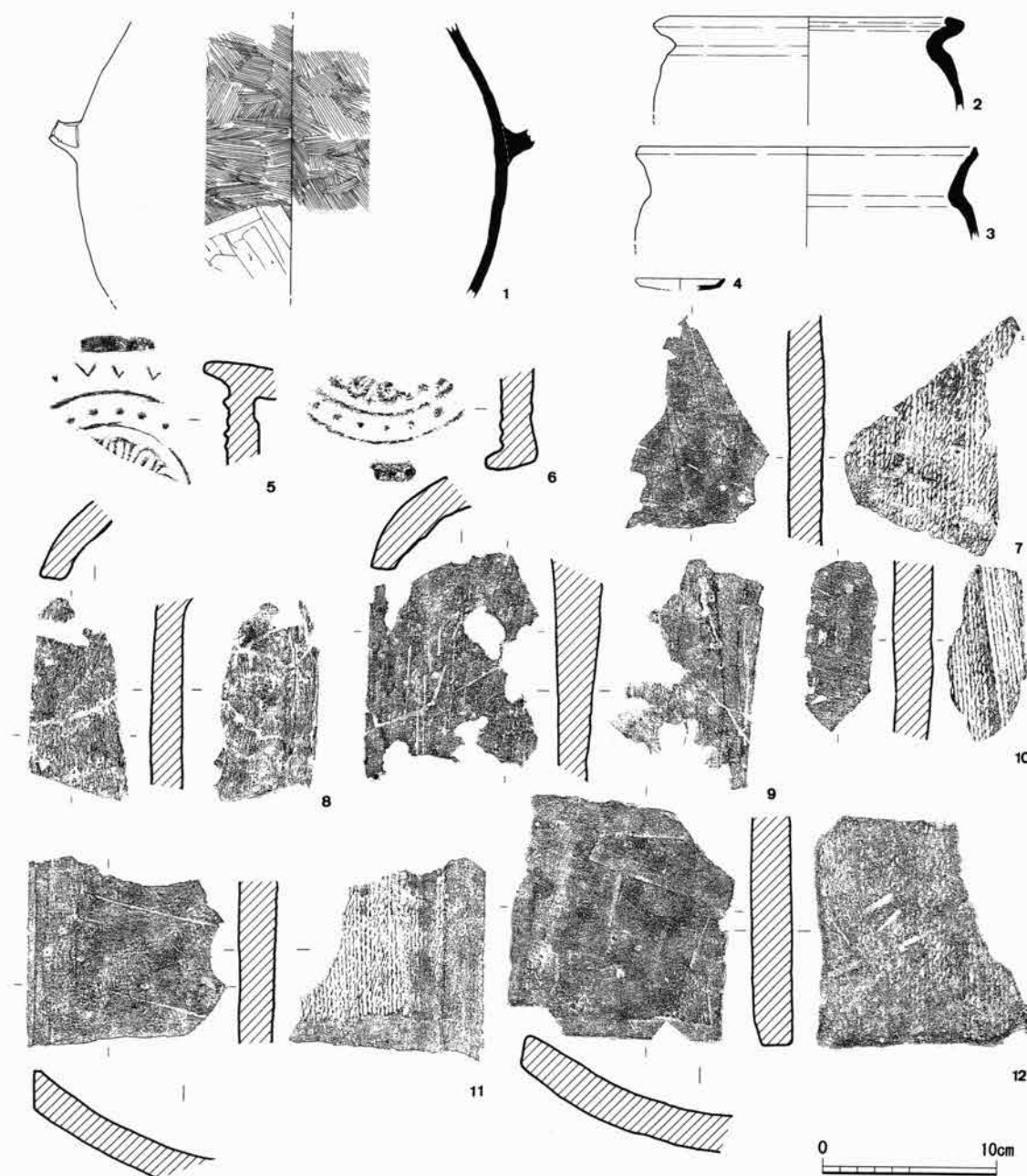
や奈良時代の瓦類が採集されている。このことから調査区が寺域の北西隅近くに位置していたと想定される。柱筋の通るP5～8とP12・13が同一建物の側柱であれば、東西に10尺等間、8間以上の規模をもつことから、寺域の北西に位置した東西棟の僧房などが想定できようか。今後の周辺調査に期待したい。なお、今回の調査後、京都府教育委員会による府道改良工事の立会調査(第44図参照)によって、凝灰岩の破片(第50図24)、軒丸瓦瓦当片(第51図6)などが採集されたため、あわせて報告した。

(野島 永)



第50図 出土遺物実測図(1)

1～17：S X21 18～23：土層30 24：立会調査



第51図 出土遺物実測図(2)

1 : SX20 2・3・11・12 : 土層 5 4 : 包含層 5・10 : SX17 7~9 : SX16 6 : 立会調査

注1 『興福寺官務牒疏』山城国条に、「井堤寺。在綴喜郡井堤郷。僧坊八字。神人四人。推古廿九辛巳年。山背大兄王本願也。本尊千手大士(千手観音)。号観音寺。左大臣橘諸兄公再建。」とある。

注2 梅原末治「綴喜郡第八井手寺址」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第四冊、京都府) 1923

注3 以下の方々にも、調査に際してご協力、ご指導をいただいた。記して感謝したい。

乾幸次・金田明大・鈴木重治・高橋克壽・中島正・中島信親・橋本清一・村田名良夫・山中章(敬称略)

注4 凝灰岩の産地については、京都府立山城郷土資料館橋本清一氏の御教示を受けた。記して感謝したい。

圖 版

図版第1 常盤仲之町遺跡



(1) 調査地全景(南東から)



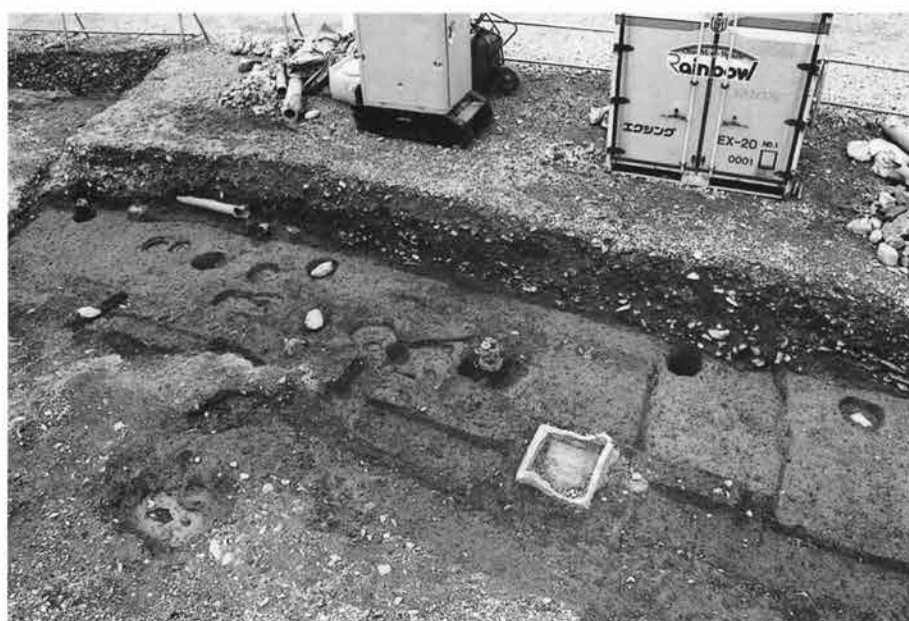
(2) 調査地全景(南西から)



(3) 溝9 周辺遺構検出状況
(南から)



(1) 溝9周辺遺構検出状況
(南東から)



(2) 調査地北側中央部
遺構検出状況(南東から)



(3) 調査地南西部分
遺構検出状況(西から)

(1) 溝 9 検出状況(南から)



(2) 溝 9 検出状況(南東から)



(3) 溝 9 完掘状況(西から)





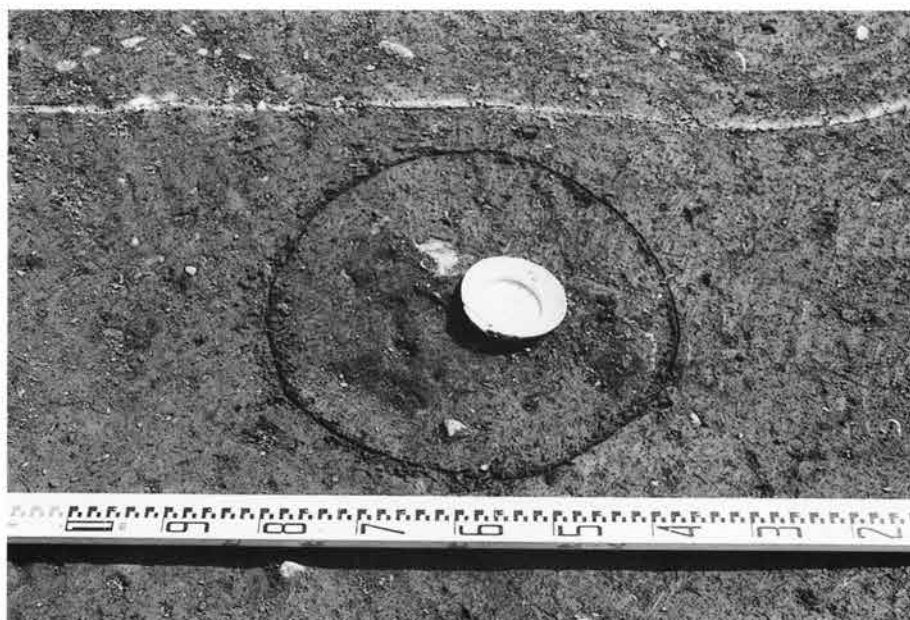
(1) 溝 9 完掘状況(東から)



(2) 溝 9 完掘状況(北東から)



(3) 溝 9 土層堆積状況(東から)



(1) 柱穴4 遺物出土状況
(北から)



(2) 土坑17遺物出土状況
(北から)



(3) 土坑17土師皿出土状況
(北から)



(1) 土坑16磔検出状況(西から)



(2) 溝28周辺遺構出土状況
(北東から)



(3) 溝28周辺遺構完掘状況
(北東から)

(1) 土坑29周辺遺構検出状況
(東から)



(2) 溝41完掘状況(北から)



(3) 土坑15周辺
遺構検出状況(南から)





(1) 土坑14磔出土状況(南から)



(2) 出土遺物

(1) 調査前の状況(北から)



(2) 調査前の状況(南から)



(3) 北調査区完掘状況(南から)





(1) 南調査区完掘状況(北から)



(2) 中央調査区遺構検出状況(1)
(南から)



(3) 中央調査区遺構検出状況(2)
(南から)



(1) 中央調査区全景(南から)



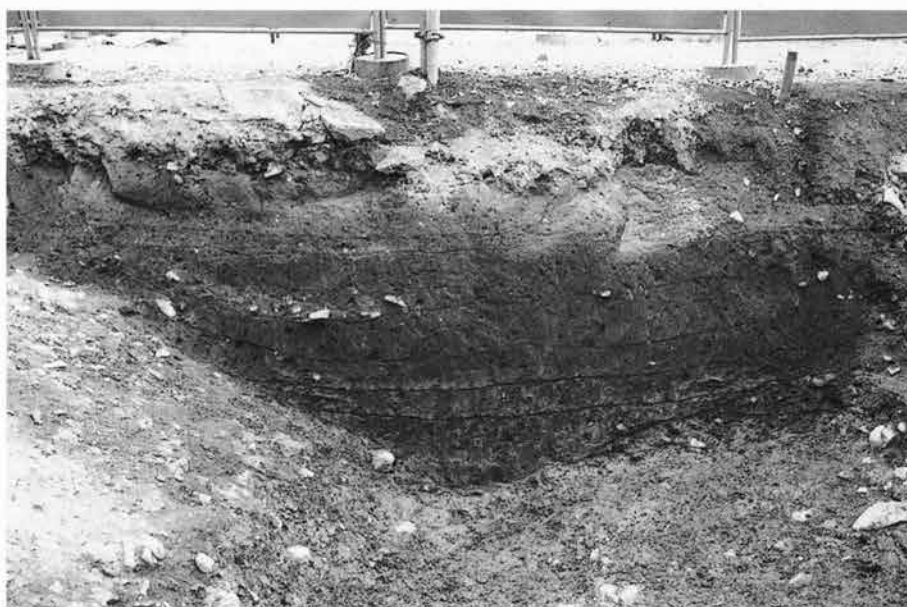
(2) S D70401下層礫出土状況(北東から)



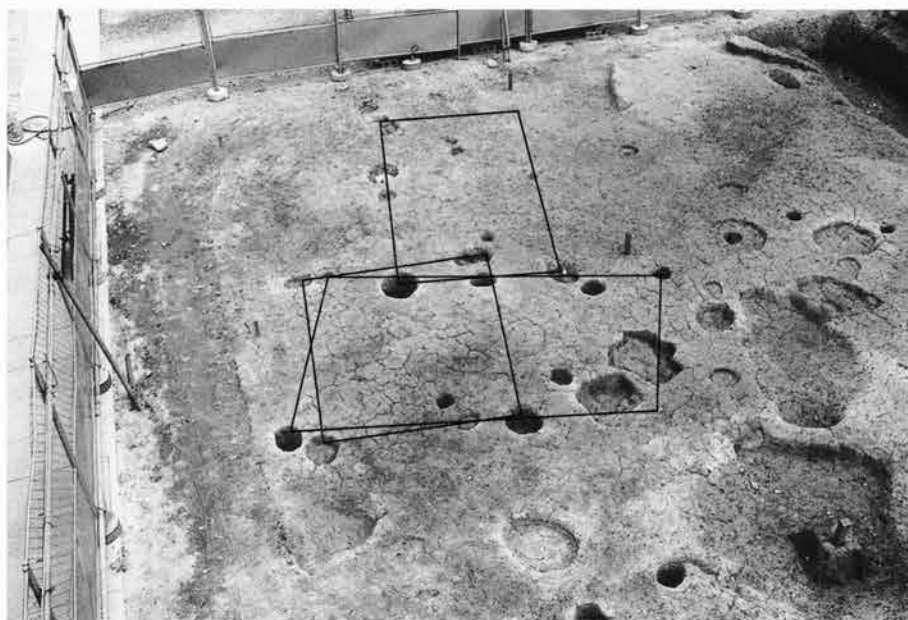
(1) S D70401中層遺物出土状況
(南東から)



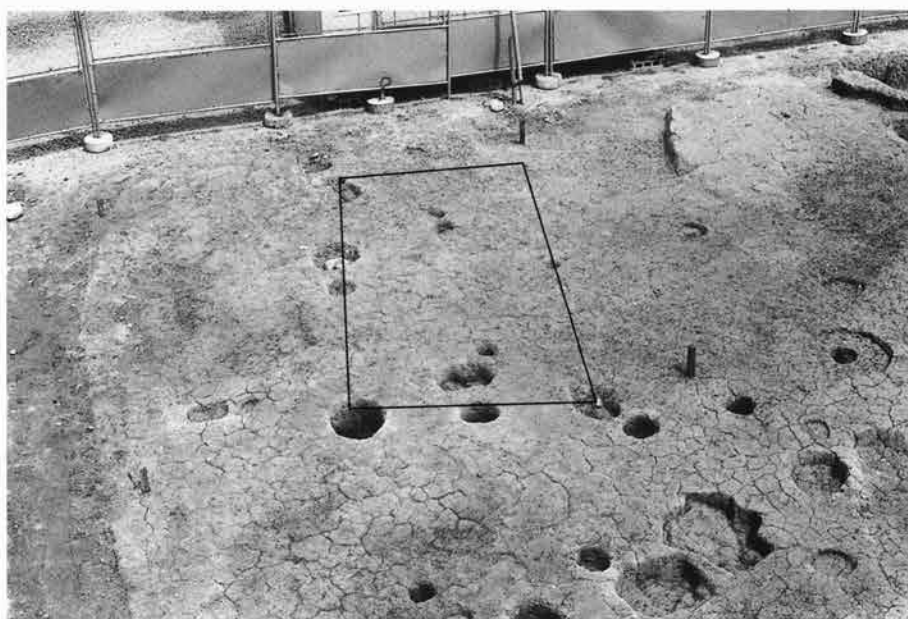
(2) S D70401テラス遺物出土
状況(西から)



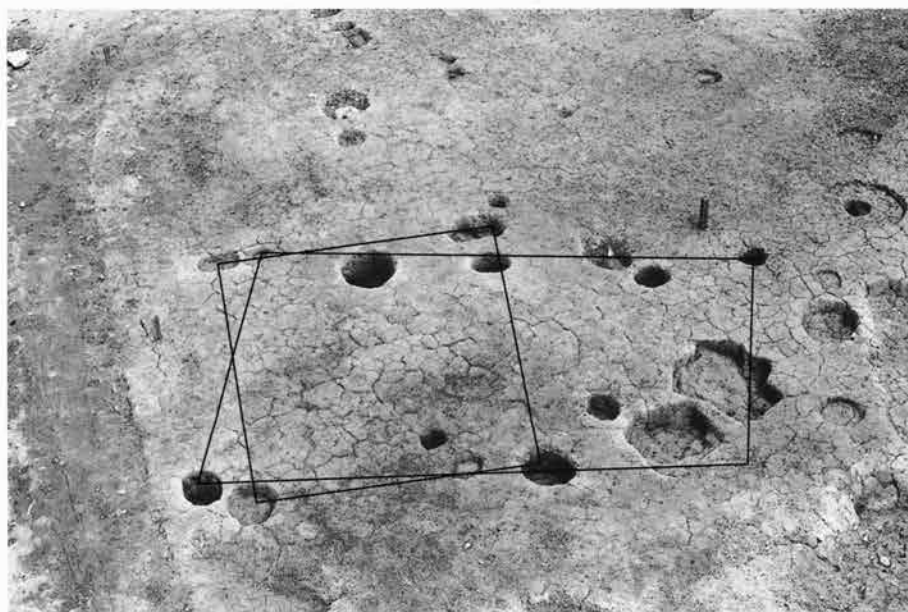
(3) S D70401埋土堆積状況
(北東から)



(1) S B70409・10・11完掘状況
(南西から)



(2) S B70409完掘状況
(南西から)



(3) S B70410・11完掘状況
(南西から)



1



8



3



14



4



15



5



16



6



21



7



22



23



28



29



32



34



35



38



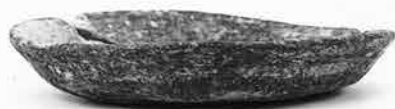
40



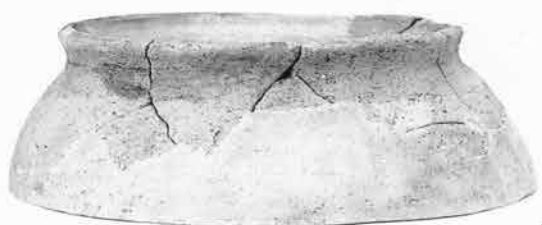
43



46



49



53



50



54



55



56



54



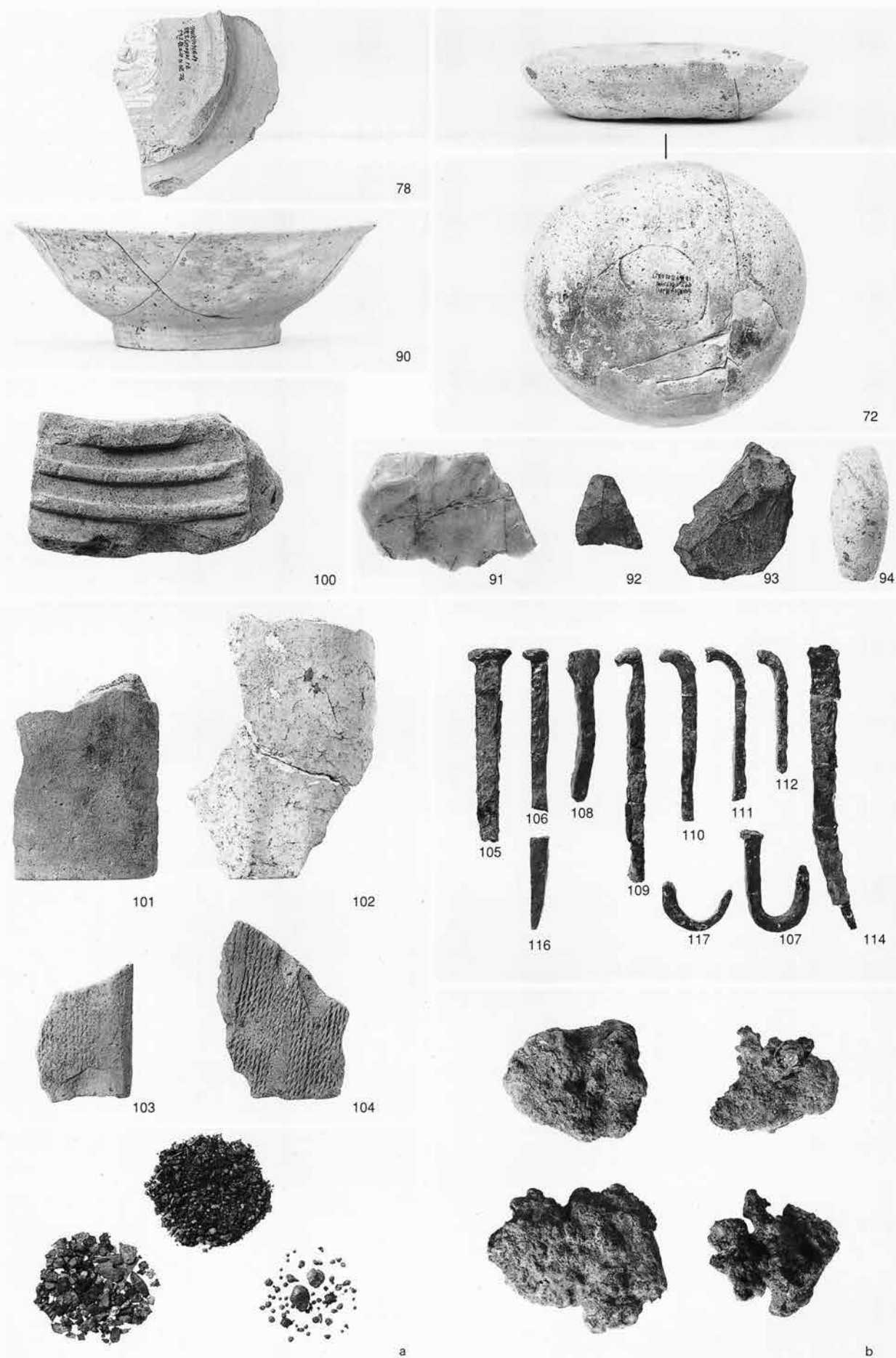
62



63



74



出土遺物(3) 番号は実測図と対応する(a. 左:鍛造剥片 中:砂鉄 右:湯玉 b. 鉄滓)



(1) 調査地全景(南から)



(2) 調査地全景(西から)



(1) 第1 トレンチ全景(南から)

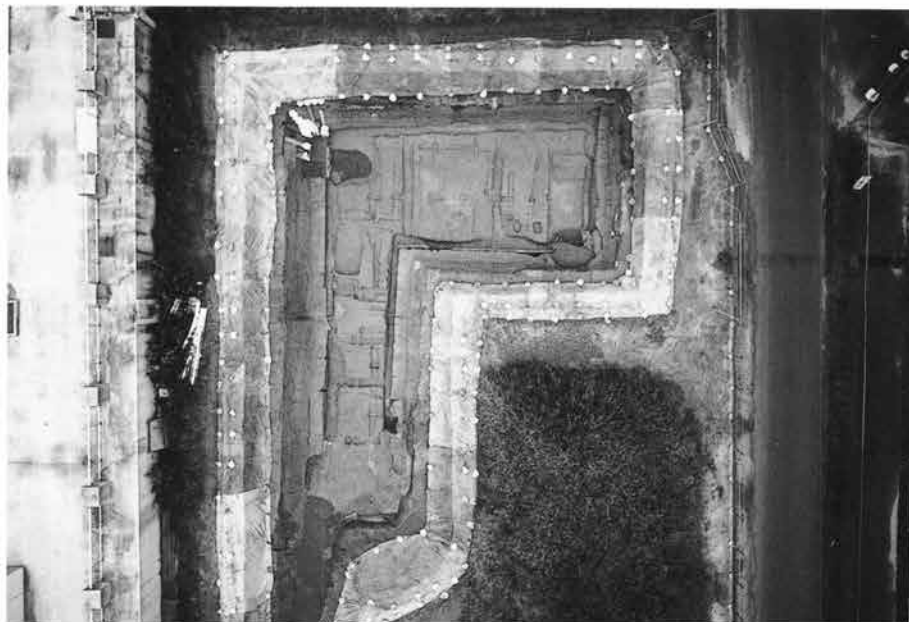


(2) 第2 トレンチ全景(東から)

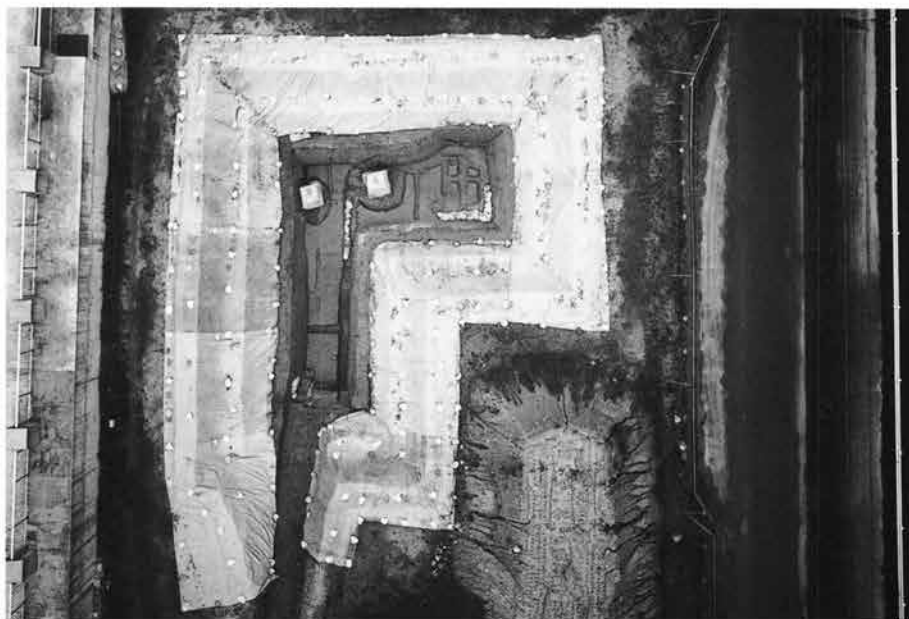


(3) 第3 トレンチ全景(北から)

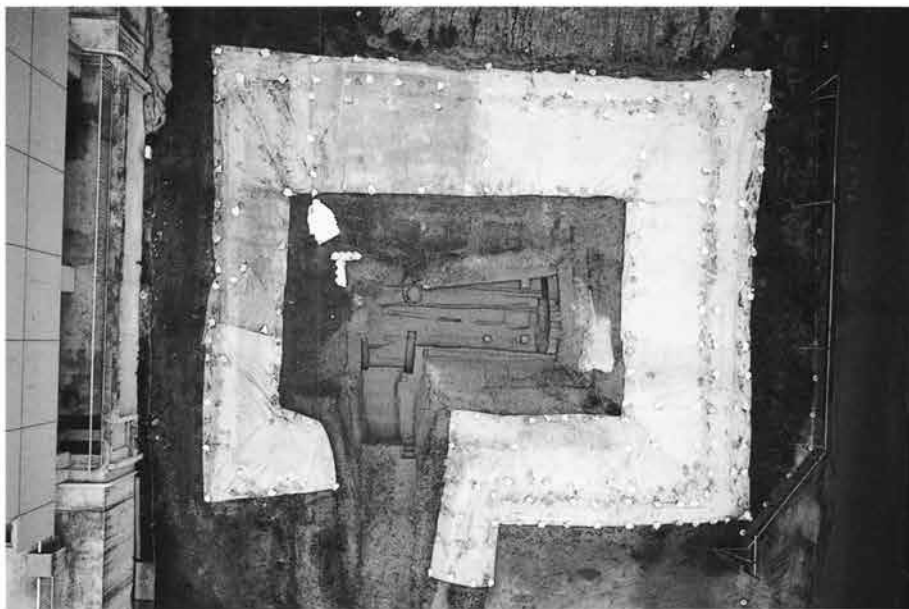
(1) 第1トレンチ全景
(下層・上が西)



(2) 第2トレンチ全景
(下層・上が西)



(3) 第3トレンチ全景
(下層・上が西)





(1) 第1トレンチ西部
(上層・南から)



(2) 第2トレンチ南部
(上層・東から)



(3) 第3トレンチ全景
(上層・北から)



(1) 第1 トレンチ S X 24 (西から)



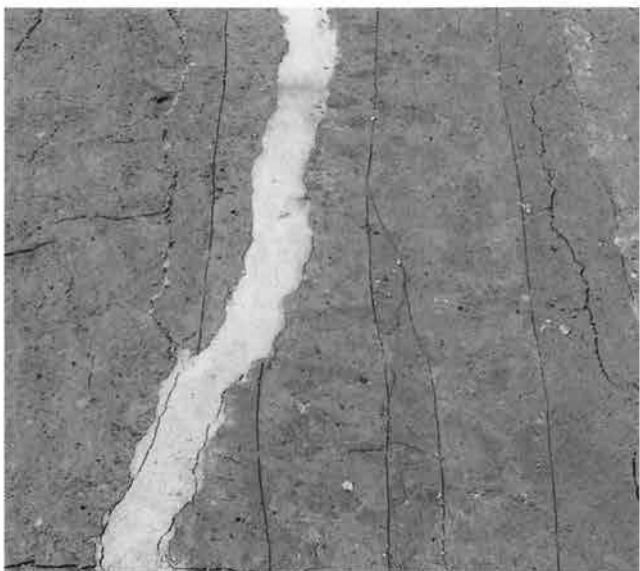
(2) 第1 トレンチ北壁 2 (南西から)



(3) 第1 トレンチ北壁 2 東隅 (南から)



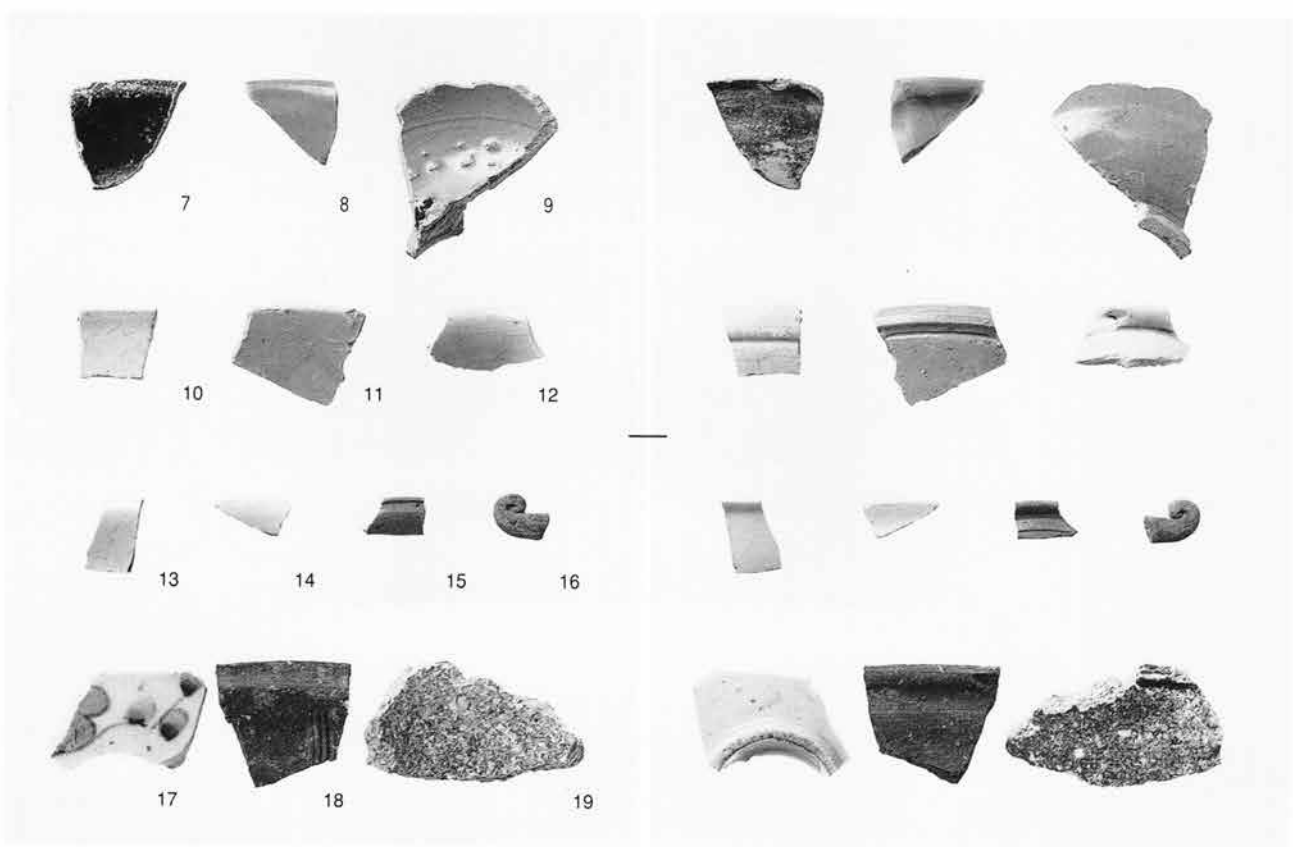
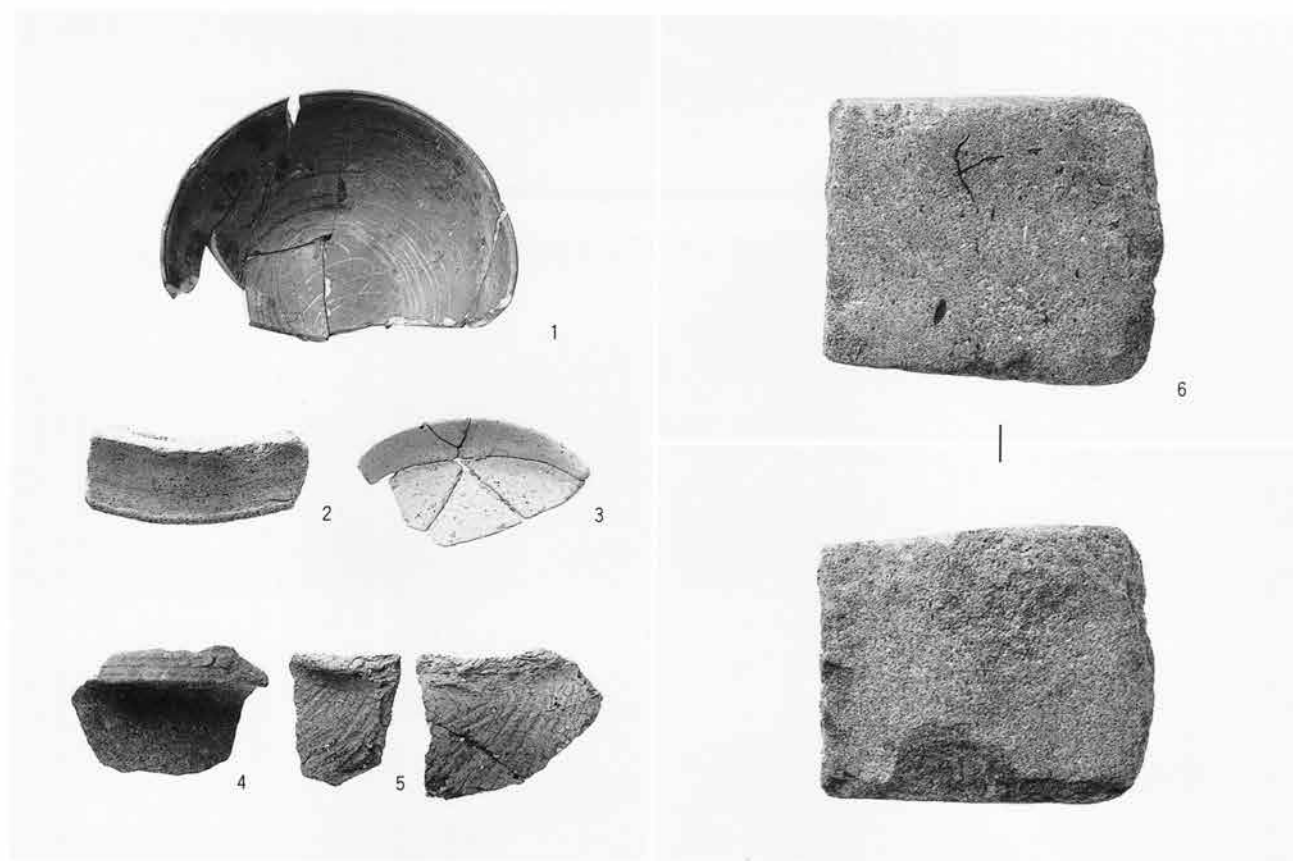
(4) 第2 トレンチ北壁 2 (南から)



(5) 第1 トレンチ噴砂に裂かれた溝 (南から)



(6) 第1 トレンチ作業風景 (東から)





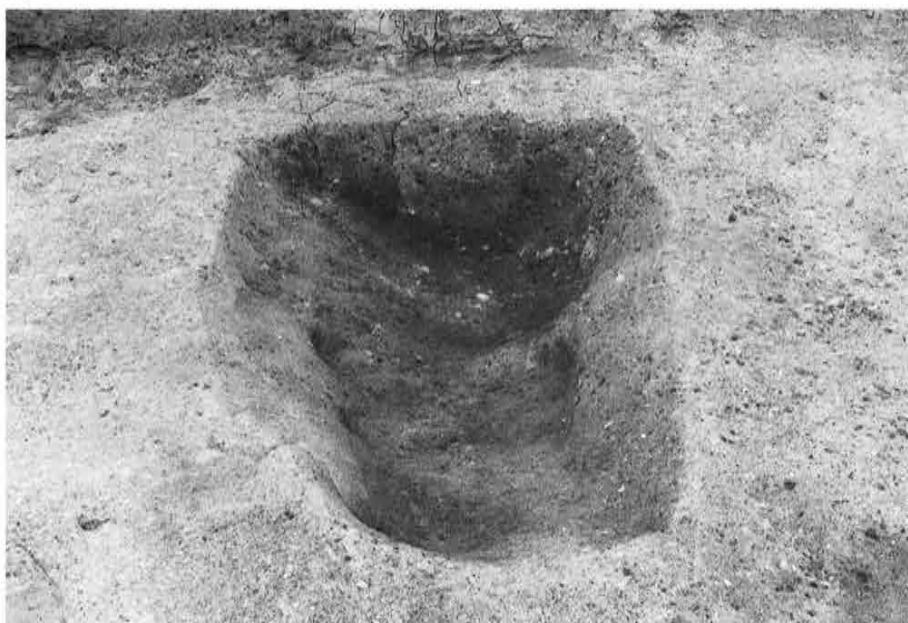
(1) 南部トレンチ全景(南から)



(2) 南部トレンチ全景(北から)



(3) S X01(北から)



(1) S K07(西から)



(2) S D09(東から)



(3) S K10(北から)



(1) 北部トレンチ全景(南から)



(2) S K21遺物出土状況(南から)



(3) S K15(西から)



(1) S K16(西から)



(2) S K18(西から)



(3) 拡張区断面(西から)



1



5



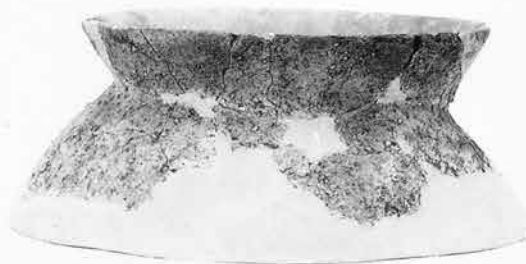
16



10・11



17



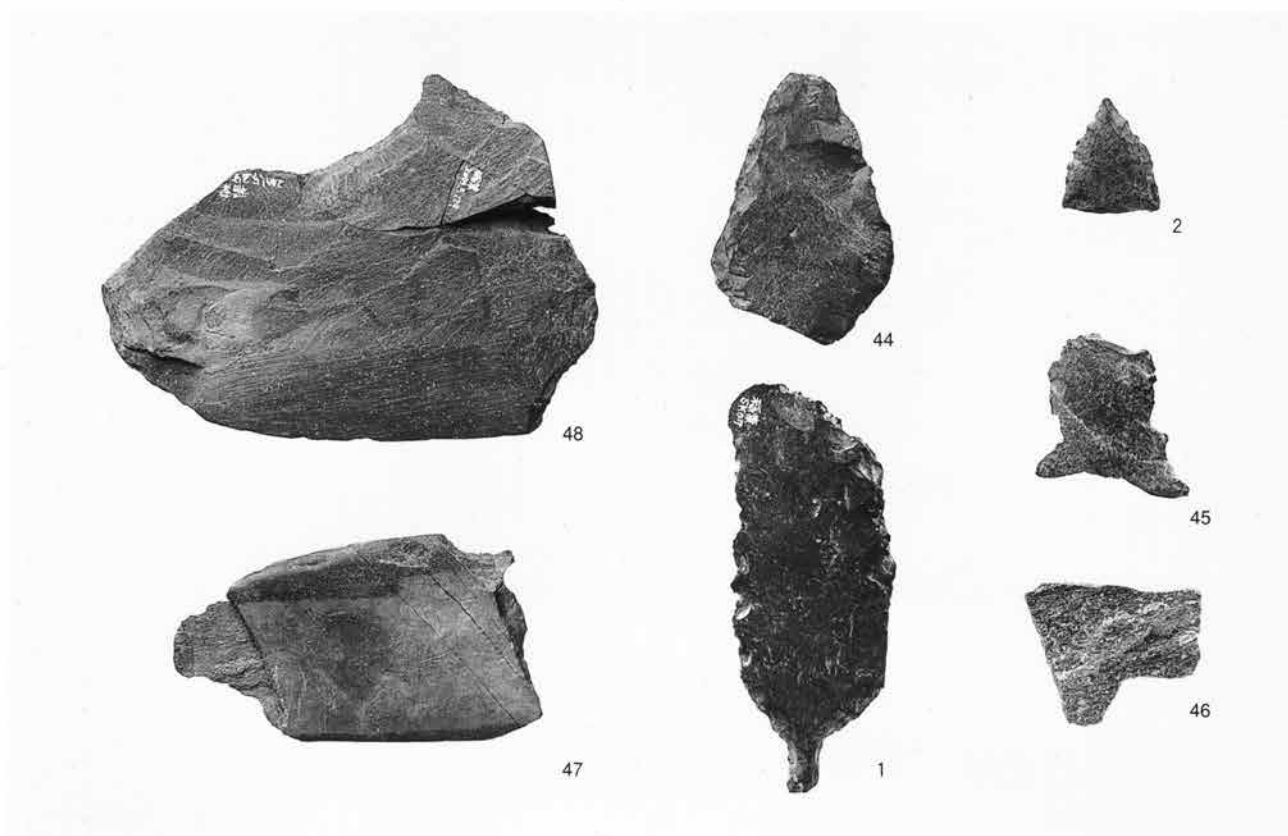
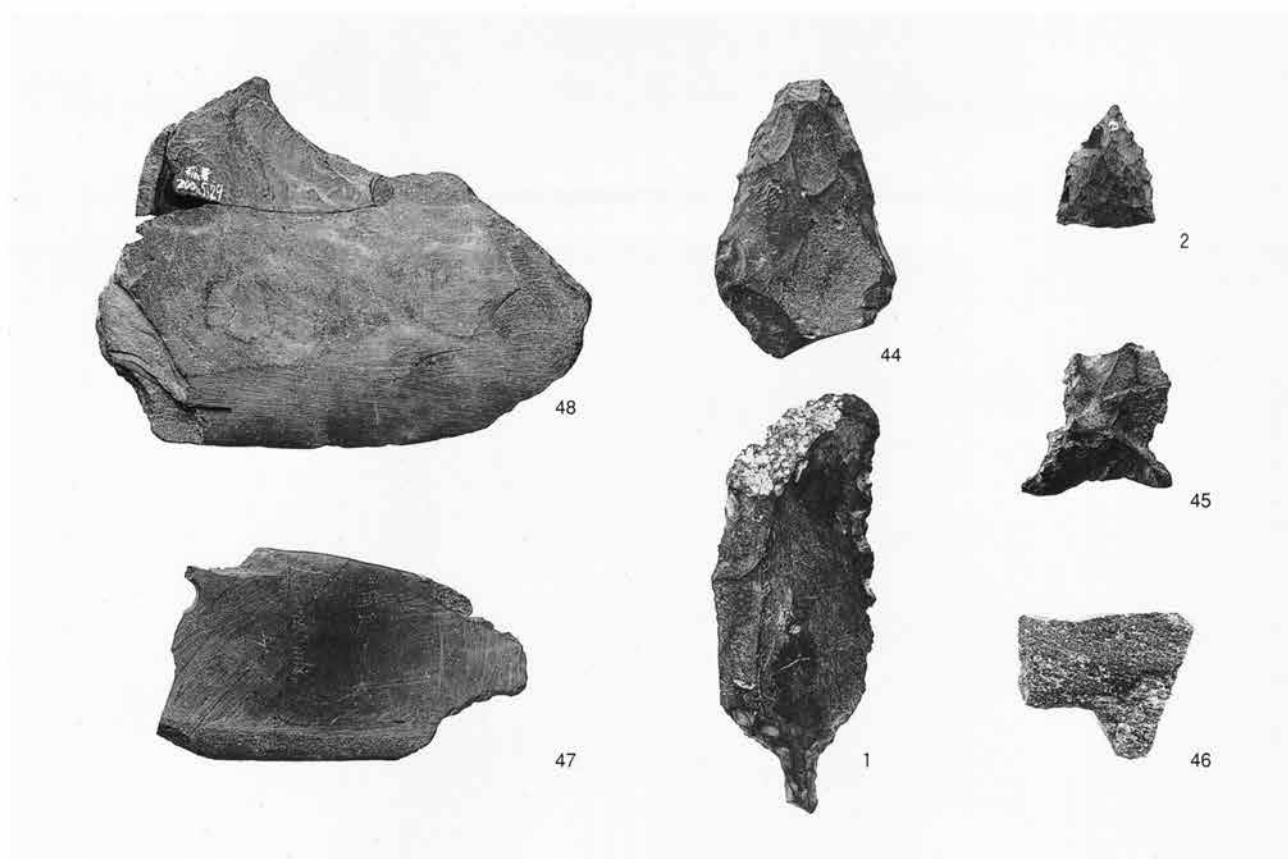
14



18

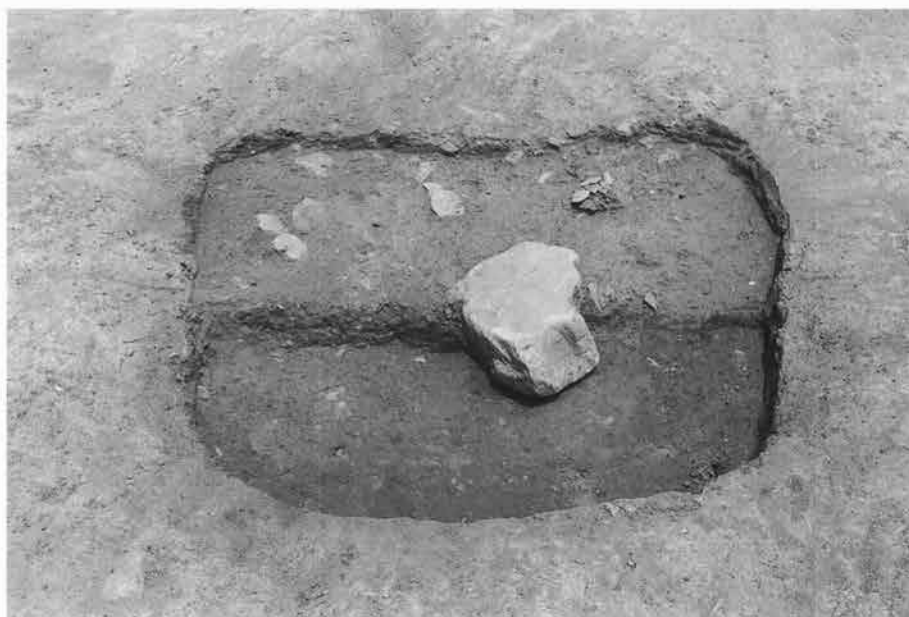


13





(1) 調査前近景(南東から)



(2) 柱穴P 5 (南から)



(3) 柱穴P 5 断ち割り状況
(南から)



(1)柱穴P 6 断ち割り状況
(南から)



(2)柱穴P 7 (南から)



(3)柱穴P 8 (南から)

(1) 柱穴P12(南から)



(2) 柱穴P13検出状況(北から)



(3) 焼土坑S X20半截状況
(南西から)





(1)小土坑 S X 18 検出状況
(北から)



(2)トレンチ南壁



(3)トレンチ南壁 S X 21 断ち割り
状況(北から)

(1) 調査区近景(東から)

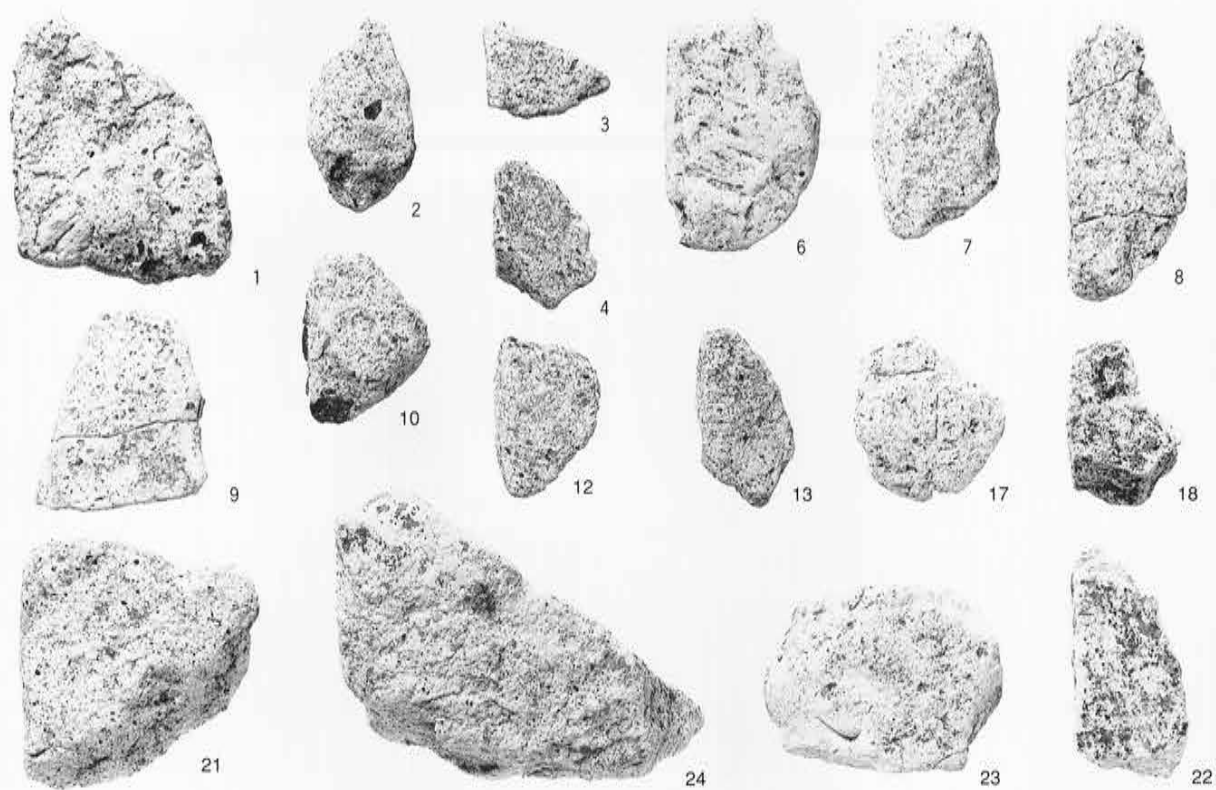


(2) 調査区近景(上が北)

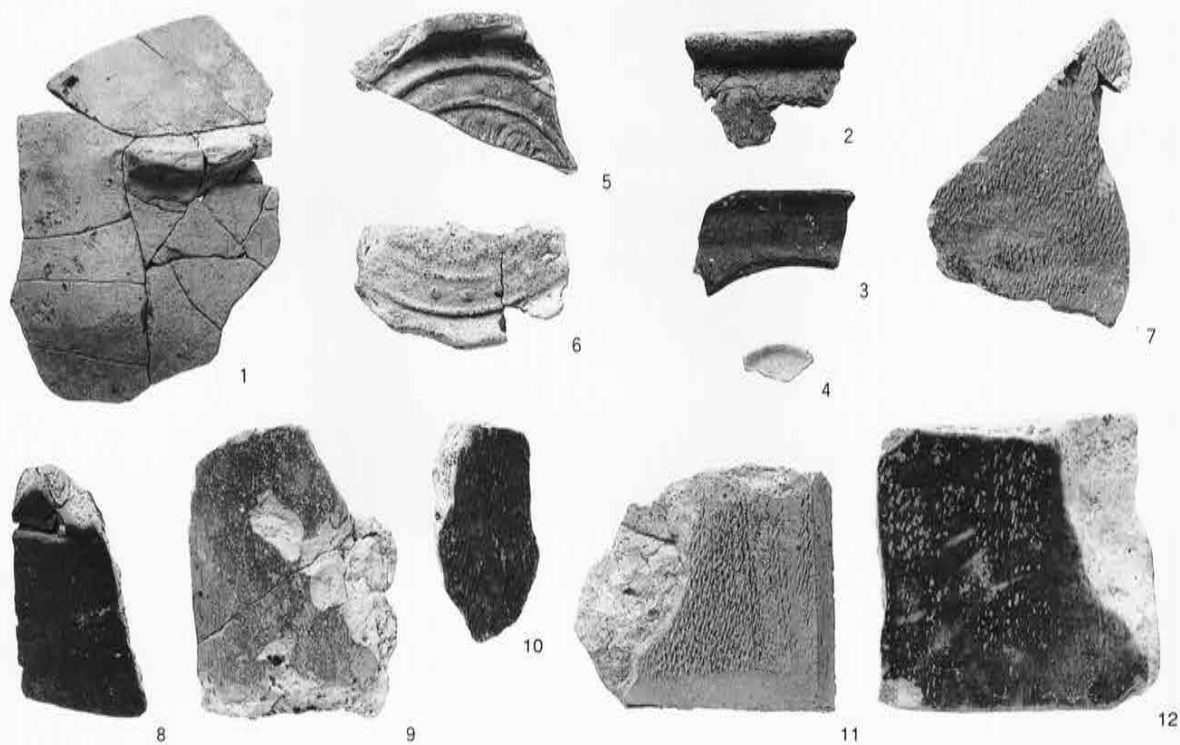


(3) 井手寺推定域遠景(南から)





(1) 出土遺物(凝灰岩加工片)



(2) 出土遺物(土器・屋瓦)

報告書抄録

ふりがな								
書 名								
副書名								
巻 次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第102冊							
編著者名	小池寛・柴暁彦・松尾史子・中川和哉・野島永							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone 075(933)3877			
発行年月日	西暦 2002 年 3 月 28 日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
ときわなかの ちょういせき 常盤仲之町 遺跡	きょうとうしきょう くときわくはまち 京都市右京区常盤 窪町	108	61	35° 0' 58"	135° 42' 30"	20010507 ～ 20010629	600	住宅建設
ながおかきよ うあとうきよ うだいなな ひやくよん じ・いのうち いせき 長岡京跡右 京第704 次・井ノ内 遺跡	ながおかきょうしい のうち 長岡京市井ノ内	209	91・10	34° 56' 15"	135° 41' 19"	20010717 ～ 20010907	300	道路建設
きづがわか しょういせき だいじゅうよ んじ 木津川河床 遺跡第14次	やわたしやわたあざ げんの 八幡市八幡字源野	210	4	34° 53' 11"	135° 42' 48"	20010608 ～ 20011018	1,200	下水処理施 設建設
いなばいせき だいなな 稲葉遺跡第 7 次	きょうたなべしたな べくど 京田辺市田辺久戸	342	83	34° 49' 8"	135° 46' 17"	20010509 ～ 20010810	910	駅舎改築
いでであ と・かやのき いせき 井手寺跡・ 栢ノ木遺跡	つづきぐんいでちよ うおおあざいでこあ ざなみぞほか 綴喜郡井手町大字 井手小字中溝ほか	343	12	34° 47' 51"	135° 48' 55"	20010712 ～ 20010809	150	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
常盤仲之町 遺跡	集落	室町 江戸		土坑・溝 柱穴		古瀬戸・土師器皿・ 瓦質土器羽釜 唐津・志野		
長岡京跡右 京第704 次・井ノ内 遺跡	集落	平安		溝・土坑・掘立柱建物跡		瓦器椀・土師器皿・ 瓦・鉄釘・鍛冶関連 遺物		
木津川河床 遺跡第14次	耕作地	平安・鎌倉 室町		溝・土坑 溝		土師器・須恵器・瓦 器 信楽焼		地震痕跡

稲葉遺跡第 7次	集落 集落 耕作地	弥生前期 古墳 中世・近世	土坑 土坑 溝	弥生土器・石器 土師器 瓦器・陶磁器	
井手寺跡・ 栢ノ木遺跡	寺院	奈良・平安	柱穴・土坑	瓦・土師器・黒色土 器・凝灰岩	

京都府遺跡調査概報 第102冊

平成14年3月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 (株)大光社

〒604-0086 京都市中京区小川通丸太町
下ル中之町76
Phone (075)222-1333 (代)